



多摩ニュータウン発 市民ベンチャー NPO 『ぽんぽこ』 <全文>

目次

序章 はじめに	2
第1章 地域に帰ってきたお父さん ～身近なコミュニティ活動とNPO	4
第2章 人との出会いから生まれたもの ～地域活動のFUSION(融合)	11
第3章 時代の風にあと押しされて ～インターネットが生み出すパワー	21
第4章 ぽんぽこな“こころ”に法人格をもたせよう ～NPOフュージョン長池の設立に向けて	36
第5章 ボランティアとビジネスのはざままで ～認証手続きと事業活動の模索	44
第6章 市民ベンチャーとしてのNPO ～暮らしの支援事業がスタート	57
終章 たぬきの見た夢	77
多摩ニュータウンに移り住んで～あとがきにかえて	80

序章 はじめに

わたしは、地域に帰ってきたお父さんである。

歴史のある多摩丘陵、東京・多摩ニュータウンに住みついて一四年になるが、若い頃からずっと都心の会社勤めをしてきた。わたしがここをねぐらとしてでなく、働き、生活する場所と決めてから一年が過ぎた今、この地域に住む人たちと紡いできたものが、「特定非営利活動法人 NPOフュージョン長池」として、住民の新しいコミュニケーションのかたちや、行政や企業とのパートナーシップにおける新しい可能性を実現しつつある。

最初からNPO (特定非営利活動法人) の法人化を目指していたわけではない。

地域で、心の通いあふ暮らしを実現したいと思って関わってきたコミュニティ活動。そこで出会った人々のもつすばらしい力。これは、人材という言葉でひとくりにすることはできないほど豊かな資源だった。コミュニティ活動と人々のエネルギーが醸成され、融合 (FUSION) していったとき、ボランティア・マインドとコミュニティ・ビジネスは限りなく近づき、新たな創造を生むということに気づいたわたしは、それを具体化していくために、自分の人生をかけてみようと思ったのである。その背景で、時代の風がNPO法人として活動することを促したように思う

そして、気がついたら、わたしは各所からの要請に応じて、自らの活動の経緯とNPOについて語るようになっていた。

NPOフュージョン長池の活動は、最近ではマスコミで取り上げられるなどさまざまな方面から注目されはじめており、その社会的反響に驚いている一方、日本型のNPOの奔流となるであろう気概とともに、その経緯をここに書き記す意義を感じている。

わたしの住む長池と呼ばれる地区を中心とした地域社会には、「人の優しいところ」というインフラがある。そして自立した人々がいる。

住民が主役で、住民が住民のためにできること、それを実現するために必要なサポートとは何か。NPOとして取り組んでいく意義とは何か。

コミュニティとビジネス。この一見相反するようなものが、どう融合するのか。それを、一生懸命、口と足と手と頭で考えながら走ってきたら、面白いほど、不思議なほど、多くの価値観を共有できる人々に出会うことができた。ここで出会った人たちのFUSION (融合) が、とんでもないものを生み出しているのだ。

わたしは多摩ニュータウンの一住民で、大変にフットワークのいいおじさんであることを自認している。そのわたしがさまざまな知見をもつ人たちにお会いしながら、また考えながら走り抜いてきて出会ったのは、今まさに前代未聞のことを実現しようとしているのかもしれないという興奮と、未知のものに向かう畏れおそれだ。

わたしは、地に足の着いていること、つまりバーチャルではなく、土着であることを常に意識しながらやってきた。歴史のうえでは、ほんの新住民にすぎないかもしれないが、この地域に根ざしているという思いである。

一方、地域で電子井戸端会議（インターネット）を始めた頃は、地域社会においてインターネットというインフラが果たす役割が、これほど大きいとは思わなかった。このシステムが加わったことで、人々の間に新たなコミュニケーションを生み出したのである。

1999年12月に東京都から認証を受けたNPOフュージョン長池。多摩ニュータウンという住むことをベースにした街だからこそ必要とされる、住宅管理に関する支援事業がこの4月にスタートする。その他にも次々に事業のアイデアが生まれていて、機が熟し出番が来たときに、NPOは人々の応援団として登場していくことになるだろう。

人が街に住まい、暮らすとき、いろいろな営みをするものだ。そして、人は、一人だけでは生きていけない。

給料をいただくなどして、必要なモノをお金で買ってさえすれば生きていけるとするのは、大きな錯覚である。さまざまなシステムに支えられ、今の都市生活が成り立っているということを、阪神・淡路大震災などを経験された方は肌で感じたであろうと思う。

わたしたちの暮らしを支えるシステムは、すでに行政や民間、既存の公共法人によって多くがカバーされ、一応、安全で安心な生活を送ることができているように見える。けれどそのシステムが、そこに住まう人々の顔が見えて、その人たちが必要とし、望むモノが見えるしくみから、実は遠いところにあるという現実、多くの人が気づきはじめているのではないだろうか。そのギャップを埋めることが、NPOという新しいセクターに期待されている役割ということで、さまざまなNPOが生まれているのだろう。

この2000年3月には、NPO法が施行されてはじめて、認証を受けた団体が決算期を迎えることになる。それぞれ試行錯誤があったはずだ。

本書では、NPOとしての事業の柱が見えてくるまでと、それがどのように実行されようとしているのか、わたしたちのこれまでの試行錯誤の全容をありのままに記してある。

さて、多摩丘陵の先住民であったたぬきたちは、どこへ行ったのだろうか。

今でも、真新しい団地の傍らをすり抜けていくこともあるようだ。

はたして、わたしにしっぽが生えているかどうか、一度、読者のその目で確かめに来ていただけるといい。

第1章 地域に帰ってきたお父さん

～身近なコミュニティ活動とNPO

見附ヶ丘地区の団地群。長池見附橋や長池公園は生活の場のすぐ隣である。

会社に辞表を出す

1999年4月5日、日本テトラパックという会社に勤めていたわたしは、上司に辞表を提出した。17日に予定しているNPOフュージョン長池の設立総会に中途半端な気持ちで臨むことは、これからさらに多くの方々を巻き込んでいくであろうことに対して、失礼だと思ったからである。それにもう二足のわらじでやれることの限界を感じていた。

会社のみんなには「どうして?」と言われた。そして、「NPOをやる? それ何?」とも言われた。しかし、日経連(日本経営者団体連盟)の副会長でもある日本テトラパック社の山路敬三会長だけは、

「富永さん、これからはNPOの時代が来でしょう。すばらしいことです。日経連も、これからはNPOにも雇用創出を期待していますよ!」

と言われ、そのうえ、具体的に協力できることがあればとって、東京ゼロエミッション構想の説明をしてくださった。

東京ゼロエミッションとは、日本経済新聞論説副主幹の三橋規宏氏(97年当時)の講演と論文「提言・廃棄物ゼロ社会の実験を東京で」が契機になって組織された委員会で、「循環型社会の推進のために、従来の第三セクター方式に柔軟で自由な発想と行動をもつNGOやNPOを含む都民を加え、民間主導で運営する方式を東京方式というモデルにしたい」という構想である。

三橋氏とともに委員会の会長を務められている山路会長は、わたしに向かって、「実証実験がやりたいね」と言ってくださった。その言葉で元気が出てきた。

NPOって何?

そうわたしは、NPOを立ち上げることになってしまったのである。自分の身近なコミュニティ活動を進めていくうちに、あるイメージがどんどんふくらんでいった。そして、自分がその活動のコアになるのだ、という確信がもてたときに、NPOという組織のかたちが見えてきた。さらに、任意団体としての活動を超えて法人格を得て動いていくことに焦点が合ったとき、私の中で何か吹っ切れるものがあって、これまでの自分の人生を大きく変える決心ができたのである。

そもそも、NPOとはどういうものか。

アメリカでは、NPO(Non Profit Organization)が社会的認知を得ていることはよく知られている。教育・健康・福祉などの場面で、市民活動の組織が公共サービスを提供する事業を展開し、1994年には、150万以上のNPOが登録され、成人の過半数である一億人余りの人々がNPOで活動し、アメリカのGNPのパーセントを生み出しているという。これには、アメリカの人々が安全な居住区を守るために、市民が努力することが不可欠だということを切実に感じているという背景があり、彼らは地域コミュニティへの帰属意識も強い。

キリスト教をバックグラウンドとする福祉活動や、赤十字など災害時の救済活動、ホームレスの再教育を行う活動、美術館や文化施設の運営から政治・経済のシンクタンクなど、ありとあらゆる分野にNPOが存在しているのがアメリカ社会のようだ。

日本でも1998年に「NPO法(特定非営利活動促進法)」を施行することで、民間の非営利団体に「特定非営利活動法人」という法人格を与えることによって、ボランティア活動をはじめとする市民活動の促進と、公益の増進を図ろうとする動きが出てきた。今年2000年の3月3日現在、国内では1508団体が、東京都では2月末現在で330団体が、法人格を取得したという

さて、NPO(民間非営利団体)が法人として認証を得るときには、特定非営利活動として次にあてはまる活動を行うことを目的としなければならない。

1. 保健、医療または福祉の増進を図る活動
2. 社会教育の推進を図る活動
3. まちづくりの推進を図る活動
4. 文化、芸術またはスポーツの振興を図る活動
5. 環境の保全を図る活動
6. 災害救援活動
7. 地域安全活動
8. 人権の擁護または平和の推進を図る活動
9. 国際協力の活動
10. 男女共同参画社会の形成の促進を図る活動
11. 子どもの健全育成を図る活動
12. 前各号に掲げる活動を行う団体の運営または活動に関する連絡、助言または援助の活動
不特定かつ多数のものの利益の増進に寄与することを目的とする活動

ところが、NPOフュージョン長池が の12項目すべてを活動の目的とすることが、内にも外にも物議をかもしることになった。認証申請に際して、東京都の窓口では、「これ、本気ですか？」と聞かれ、まず本気であることを理解してもらうまでに、大変に時間がかかった。また、見識のある方からは「NPOは本来、民間と公共の中間に位置し、どちらにもできにくい小回りの必要な仕事を不特定多数の人々のために行い公益の増進に資するものだ。これでは風呂敷の広げすぎ」という意見をちよびいした。先した。

もちろん、一度にすべてを花咲かせることはできないし、またその必要もないだろう。しかしわたしは、住民の暮らしという視点に立ったとき、どれひとつ欠くことのできないものだという気持ちだった。

住民を主人公とした暮らしの支援事業として、何が必要とされるのか。それを次ページのような図で表してみた。

一方、NPOを「市民による自主的・自立的な非営利組織で、行政や企業では取り組めない社会

のさまざまな問題 課題の解決に取り組んでいる公共活動を行う団体」として見たとき、「社会変革の担い手、静かなる市民革命」といような期待があるようだが、実態はどうだろうか。行政とNPOの「協働」をうたいながら、対等なパートナーシップの実現が果たして可能だろうか。

日本社会には、公が施すものという概念が、またNPO側にも補助金や支援に頼ることで自主・自立性を欠く行政依存の傾向が根深くあるのではないだろうか。言葉は悪いが、この下地が変わっていかねば、そうして生まれたNPO法人の多くが行政の公共サービスの下請けづくりに協力せざるを得ないことになるように思う

日本人の心に添うオリジナルなNPO活動は、このようにシステムの大上段から采配されたものではなく、市民のボトムアップな動きから生まれるものではないだろうかと わたしは考えているのである。

3年ほど前、わたしは、自分はどうも、毎日多摩の田舎から都心に出稼ぎに行っているよげだ、と考えはじめた。狩猟民族のまねをして、日本全国へ、そして海外へ出ていって一生懸命獲物を獲って会社へ帰ってくる。そのご褒美として給料をもらって家族を養っている……。けっしてこの生活が悪いわけではないが、何か変だと感じはじめていた。

日本人はもともと農耕民族で、地域の田畑を大切に耕して生きてきたのではなかったか。60歳で定年になって、突然、地域での生活を余儀なくされたとき、どうなるだろうか。きっと地域になんの生活基盤もないことに気がついて、愕然とするであろう。これは大変なことだ。そのときは確実にやってくる。困ったぞ！ 今からもっと地域を耕しておかなければ。

そげだ、農耕民族の昔に帰ろう。多摩丘陵のたぬきの昔に帰ろう。そして、自分と家族と地域というかけがえのないものを大切に生きよう。でも、いきなり生活を変えることはできない。それなら、1週間7日のうちの2日、つまり土・日を利用して地域貢献に生きてみよう。そのうえで10年ぐらいかけて徐々に狩猟民族から農耕民族にシフトしようど決心した。そして、会社に転職と土・日の出勤拒否宣言をしたのである。

これでサラリーマンとしての出世からは、縁がなくなってしまった。しかし、妙に心が軽やかなのはなぜだろう。とも感じていたのである。

移り住んだ街、多摩ニュータウン・長池地区

多摩ニュータウンは「住む、働く、学ぶ、憩う」そんなまちづくりを目指しているという。1994年4月、わたしは、41歳のときに現在の「長池公園せせらぎ通り北団地」という長い名前の団地に引っ越してくることになった。

それより以前、わたしが横浜の地より多摩ニュータウンの南大沢に引っ越してきたのは1986年、33歳のときだった。

南大沢で八年間を過ごした後、移り住んだ長池地区は、業務核都市である東京都八王子市にあって「ライブ長池」と呼ばれる地区である。大規模店舗や大型文化施設、官公庁施設が建設されているのが、多摩センターと南大沢。その間に位置する京王堀之内駅前には、長池地区の北側にあたる。

駅前には集約的に都市機能を整備した「都市核」と、長池公園周辺の地区南を自然保全型の

「保全核」を「せせらぎ」という軸域が結んでいる街である。長池から湧き出た水が、長池見附橋として移設復元された旧四谷見附橋のある長池公園からせせらぎ緑道を通して、日枝神社、別所公園から駅前まで続いて、街を貫いている。

多摩ニュータウン計画について、少し調べてみた。

昭和30年代(1955年前後)の東京は、当時深刻な住宅難とそれに伴う住宅需要によって、市街地の地価が上昇した結果、地価の安い周辺地域へと、住宅建設は拡大していった。そして、多摩地域でも、無秩序な開発が進行しつつあった。このような乱開発を防止して、居住環境のいい宅地や住宅を大量に供給することを目的として、昭和40(1965)年12月に決定されたのが、多摩ニュータウン計画であるという。

多摩ニュータウンは、東京の西南部にあたる多摩丘陵地帯に位置し、多摩、八王子、稲城、町田の4市にまたがる大規模ニュータウン。計画の規模は、総面積2980ヘクタール、人口30万人。多摩の自然環境と調和した居住環境といった「住」機能の充実と、教育、文化、業務、商業の機能を備えた新市街地として形成されることを基本方針としている。

開発事業には、東京都、旧住宅都市整備公団(現都市基盤整備公団)、東京都住宅供給公社が分担して施行にあたり、一中学校区を基本的な単位として、幹線道路を境に「住区」と呼ばれる二一のブロックに分けられている。さらにこれらの住区のいくつかを集めて「地区」を構成している。

住宅は、賃貸住宅と分譲住宅を混在配置し、そのうち、戸建住宅を一定の割合の範囲で供給している。住宅面積が大きく取られていることや、歩車分離による歩行者専用道ネットワークを導入したり、なだらかな丘陵地という自然地形を生かした多様な住宅、公園などのオープンスペースとの調和、景観など、どれをとっても、考え抜かれた計画のうえに立っている(多摩ニュータウンの地図など次ページ参照)。

開発が始まって、30年余りたった多摩ニュータウンは、全体としては建物の老朽化、住民の高齢化などが注目され、コミュニティの重要性が指摘されて久しい街である。

一方、長池地区は、ニュータウンのなかでは比較的新しい開発地区で、30代から50代の壮年期の人口の割合の高い地区でもある。この街で、今、何が起きているのか。そこから見えてくるものは何なのか。

この話を展開するには、わたし自身のほんの足もとの活動から始まった出来事を抜きには語れない。足もとのコミュニティ活動、これは理論ではなく、実践といえるものだ。

せせらぎ北団地の役員活動

ニュータウン内で新しい住まいに買い替え、移り住むことになったのは、4LDKにして二人の子供たちに自分たちの部屋を与えたいと思ったことにある。しかし、理由は他にもある。南大沢時代、大変に忙しい会社員生活を送りながらも、団地の管理組合の理事を経験することで、地域に温かい人間関係ができてきた。

ところがある時期から、同居していた母が心臓を患い、入退院を繰り返すという個人的に厳しい現実に向きあうことになったのである。そして仕事と家庭を最優先する生活になって、せっかくなにかをつかんだ地域との関係性も失うことになってしまった。

母を亡くした後、再び地域に温かい人間関係を自分のイメージどおりにつくってみたいと、団地の入居募集のたびに、ある種の夢占いのような思いで公団団地のくじを引き続けたのだ。そしてその結果、多摩ニュータウン長池公園せせらぎ通り北団地、通称せせらぎ北団地が当たり 移り住むことになったのである。

1994年、わたしも40代に突入した。子供もすでに13歳と9歳で、あと二、三年もすれば、下の息子も親離れをしてしまうに違いない。だからもう一度、南大沢居住時代にできなかった、自分が理想としてきた人間関係を近隣である団地内に最初からつくってみようか決意しての転居だった。

3月の入居説明会を兼ねた管理組合の設立総会では、公団の職員の方の求めに応じて世話人として臨み、その設立総会の席上、副理事長に選任されるにいたった。

「さあ、やるぞ！ せせらぎ北団地 110世帯という真っ白いキャンパスの上に、みなさんに喜んでもらえるような温かい人間関係をなんとか描いてみよう。わたしのなかには、新しい環境に向かって希望がふくらんでいた。

管理組合の役員活動の鉄則は以下のとおりに決まった。

- 1、初代の理事が仕事をやりすぎると、その後の理事さん達が迷惑するので、できるだけ月に一回以上の理事会を実施しないこと。
- 2、団地の全組合員に情報公開するために「理事会だより」を発行すること。必要なときは労を惜しまず説明会を実施すること。
- 3、団地の全組合員で仕事を分担して、だれかに仕事が集中しないように実行すること。

この方針は、99年度の6代目理事会においても引き継がれている。このことが、「何かを実施するときには無理をせず、みんなで「浴衣がけの気分で行こう」となる原点である。つまり無理をすると長続きしないから、ということである。

近隣に人間関係をつくらうとするときの秘訣は、人はいろいろ事情もあるし考えも違うということ念頭に、無理をしすぎたりしなくて、できるときにできるところまでを、負担にならないようにやることだと思っている。だれかが頑張りすぎたり人を説得しようとしすぎたりしないで、理事など担当する人を信頼し、まかせてしまえば案外うまくいくものである。自由にゆったりと話し合える雰囲気醸成していくことのほうが、団地という「高級長屋」での長い生活には重要であると思う。

『いいかげん』は、「良い加減」として鷹揚にやったほうがうまくいく。そして、情報公開が重要だ。知らなかったということが、ときに取り返しのつかないボタンの掛け違いを起こすからである。この良い加減の大方針は、その後の団地運営に反映されていった。

情報公開の方法については、悩んだものである。団地の階段下に広報紙を貼り出してもなかなか読んでもらえず、何かあると「知らない」と言われてしまうのである。

そこで、管理組合の活動を確実に知ってもらうためと、何か人手が必要なときにみんなで仕事を分担するために、110世帯を14班に分けることにした。

班体制設立の目的は、管理組合からのお知らせや回覧物、自由な意見を集約するためのアンケート調査などを必要に応じて円滑に、確実に実施するためと、小さな話し合いの場をつくることでコ

コミュニティの形成を促進するためであった。

この班体制を決めることにした背景には、向こう三軒両隣、とにかく隣近所と仲良くしてほしいという願いからである。この体制であれば、さまざまなことを隣近所(班)で相談しなければならなくなるのである。こうしたちょっとした「まあ、しかたないか」と思ってもらえる範囲のお膳立てなくしては、隣近所であっても交流することはなかなか難しいのが現実のようであった。

このように、初代の役員たちが決めた基本的なルールが、今日、近隣からも「せせらぎ北団地は、みんな仲良くまとまりがいい団地」と思ってもらえる礎になったと思う

この初年度の活動を通じて、

- 1、具体的な団地運営のイメージをもつことの重要性
- 2、負担にならないように実行することの重要性
- 3、その活動を動かす“人”の重要性

の三点を理解したのである。

そして、「せせらぎ北団地」にとって幸運だったことは、多くの利他的精神あふれる方々と、気楽に楽しんで実行に移せるだけの人材に恵まれたことである。

ここに登場する方々が、その後、NPOフュージョン長池の形成に重要な役割を発揮するようになるのであるが、この時点では、だれもそんなことは想像すらしていなかったのである。

また、理事は一年交替で全組合員の当番制とするが、専門性が高く継続性が必要な仕事は、専門委員会をつくったほうがよい、ということがわかってきた。

専門委員会の確立からコミュニティ委員会へ

1995年1月の理事会では、建物及び設備に関する専門委員会、機械式駐車場に関する専門委員会、コミュニティ(自治)に関する専門委員会を設立することが決定した。

建物専門委員会の山本勇さんは、「まあ、いいじゃないの」と会社の名前をおっしゃらない。ここは、いつものように、名刺の関係のない世界だから深追いはしないが、建設業界の話になると、プロらしい専門性の高い話がポンポン飛び出す。

駐車場専門委員の大和田明宣さんは、髭を生やしたサラリーマン。どこかの研究所で何かの開発に携わっているらしい。人の話を冷静に聞いていて、ウイットに富んだコメントでその場の雰囲気をもろくしてしまう人だ。

コミュニティ委員会に応じてくださった北村健さんは、大和田さんの義理の弟、つまり奥さん同士が姉妹で、金融関係にお勤めの様子。石上昌弘さんは、中学校の社会科の先生である。

専門委員会の活動を通じて、これなら何かができる、もっとできる、と強く感じたのである。

この年1月、阪神・淡路大震災が起こった。この大震災は都市生活のもろさと、コミュニティの大切さを思い知らされた大変な出来事であった。

日々の生活での親密でいいなあおつきあい。わたしは今ここで、危機管理をマニュアル化する以前の、大切なものを築き上げていこうとしている。そんな確かな手応えを感じながらも、震災に遭われた方々をわが身に置き換えて考え、身の引き締まる思いと、当該地の方々のご苦労がしのばれ、コミュニティづくりに本気になって取り組む決意を新たにしたのであった。

1995年1月のせせらぎ北団地の組合員に対する説明会のあと、5月の定例総会を経て、専門委員会は活動を開始した。わたしは、コミュニティ委員会のメンバーとして石上委員と協力し、北村委員長を補佐することになった。阪神・淡路大震災の教訓が頭から離れない。できれば見附ヶ丘地域の近隣団地であるほかの四団地とも交流や意見交換ができればいいな。近隣との連携がなくては困る日がくるかもしれないからな。でも、あせらず、無理をせずに気楽に楽しくやろうと考えながら、平日は一生懸命仕事をし、休日の何日かを地域の方々との交流にあてていった。

第2章 人との出会いから生まれたもの

～地域活動のFUSION(融合)

長池見附橋下の夏のぼんぼご祭りの風景。橋の向こうに、住民たちが里山活動を楽しんでいる長池公園が臨める。

地域情報誌『FUSION見附ヶ丘』の登場

1995年4月のある日、見慣れない地域情報誌がわが家に配布されてきた。『FUSION見附ヶ丘 創刊号』である。その一面には、

Welcome to MITSUKEGAOKA. FUSION見附ヶ丘は、住む人達と創る、見附ヶ丘の《かわら版》です。ようこそ、ライブ長池見附ヶ丘地区へ。

みなさん御存知の通り、この街は新しくこれから熟成されてゆく街です。そして、この街で生活するみなさんが、安全で快適に生活し、自然と人、人と人がコミュニケーションできる街となれるように都市基盤整備がなされています。しかし、本当の“まちづくり”は、これから始まります。この街の未来を創造するのは、この新しい街で暮らすみなさんなのです。この『FUSION見附ヶ丘』は、そんなみなさんの“まちづくり”をサポートする情報誌です。いろんな人が交流し、さまざまな情報が集まる「まち」にあって、「まち」を形成する全てのものが融合し、新たな文化を創造する。そんなことの一助ができたらの思いから、この情報誌は、『FUSION(融合)見附ヶ丘』と名付けました。みなさんの積極的な情報提供をお待ちしています

とある。そして、二面から七面にかけて長池見附ヶ丘地域の知りたかった情報が満載されていて、最終ページには、

発行 : FUSION見附ヶ丘発行委員会

企画・編集 : FUSION見附ヶ丘編集部

制作 : 株式会社フラッシュ

協力 : 東京都住宅局 東京都住宅供給公社 住宅 都市整備公団東京支社

住宅 都市整備公団南多摩開発局

と書いてある。

『いい内容だな』という第一印象をもった半面、奥付を見るかぎりでは、よく理解できなかった。FUSION見附ヶ丘発行委員会や編集部とはだれがやっているんだろう。株式会社フラッシュとは？そして、東京都と住都公団が仲良く共同事業をするわけではないし、と不思議な気がしたのだ。

「これ、なんだろうね？」

ある日わたしは、『FUSION見附ヶ丘』の創刊号を片手に、北村さん、石上さんに問いかけた。

彼らは創刊号の一面を読んで、

『いいこと書いてあるねえ』

『いったい、だれが発行してるんだろう？』

「この地域を見附ヶ丘ということ知ってた？」

「全然知らなかった」

「新住民ばかりで、それこそ隣は何する人ぞ、だもんな」

「じゃ、こちらから三人で近所を訪ねてみようか？」

「全然相手にしてもらえないかも……」

「いいじゃない！ どんな人がいて、どんな顔してるかがわかればいいじゃない！」

「そもそもどこに自治会長さんや理事長さんが住んでいるかもわからないし」

「そうだ、管理事務所の宮間さんに調べてもらおうよ」

こんな調子の会話が続き、おじさんたちの週末の井戸端会議だ。でも、アクションの早いわたしは、まず「FUSION見附ヶ丘」編集部に電話をかけた。対応して下さった鈴木雅徳さんは、フラッシュという会社の社長さんだった（以下フラッシュの鈴木さんで登場）。そして、同時にせせらぎ北団地の管理事務所の宮間泰子さんに、近隣の団地の自治会長さんや理事長さんたちを調べてもらったのだった。

見附ヶ丘地域の情報交換が始まる

さっそくフラッシュの鈴木さんが、せせらぎ北団地の集会所に足を運んで下さったことで、いろいろな背景を知ることができた。

地域情報誌『FUSION見附ヶ丘』の発行責任者は、住宅 都市整備公団、現在の都市基盤整備公団である。この見附ヶ丘地区は、公団が考えた「ミックスド・コミュニティ」の実験地だということだった。ミックスド・コミュニティというのは、そこに住む住民同士が相互に交流できるように、という願いで設計されている。団地は通常、設計や管理の主体者別に閉鎖的に独立して造られるが、この地域は、車や人が団地から団地へ移動できるようになっている。このように、まずハード面でミックスド・コミュニティになっている。

次に、ソフトの面でも、ミックスド・コミュニティになるようにと、地域情報誌を発行したというのである。大変にめずらしいケースで、公団からいわれているのは「公団批判をしないこと」というだけで、あとは、住民の方々が自由に誌面を構成していいそうである。

公団の開発担当者のコミュニティ形成にかける思いをうかがっているうちに、三人とも少々やる気になってきた。フラッシュの鈴木さんとは今後の交流を約束して別れ、われわれは、

「今度、近隣の団地の代表の方々にお集まりいただいて、顔合わせ会をやりたいのですが、いかがですか？」

と、さっそくご近所を訪ね歩いたのだった。

こうして、その日のうちに、4団地の役員の方たちにお会いすることができた。近隣の七団地のうち、公団賃貸団地には自治会や管理組合がないので、せせらぎ北団地を含め組織化されている5団地の交流が始まり、97年からはもう1団地が加わることになった。

案ずるより産むが易しとはこういうことである。見附ヶ丘地域の情報交換会はこうして始まった。

見附ヶ丘地域情報交換会から見附ヶ丘連絡協議会へ

1995年8月20日、第1回見附ヶ丘地域情報交換会開催。この日はとにかく初めてなので、まず

各自自己紹介をしたあと、こうした情報交換会を2か月に1回もつことに決めて、散会した。

その後、見附ヶ丘地域の情報交換会は、9月の理事長と自治会長の顔合わせ会、11月と続けられたが、だんだん自己紹介以上に語る事がなくなってくる。しかし、阪神・淡路大震災をめぐる出来事が生々しく、こうした団地間のつながりの継続が必要であることはみんな頭ではわかっているようだった。こうしたとき、だれかが知恵をしぼって集まる理由と楽しさを演出する必要がある。

そこで、思いついたのが、見附ヶ丘地域の情報交換会に地域情報誌『FUSION見附ヶ丘』の編集会議を兼ねさせてもらえないかということだった。さっそくフラッシュの鈴木さんに提案してみたら、快く承知していただいた。

こうして、見附ヶ丘地域の情報交換会は地域情報誌の編集会議を兼ねることで続けることができた。そしてこのことから、地域で新しい活動を始めるためには、ある種、みんなが納得と共感ができて、なおかつ楽しめることを具体的に、継続的に用意しつづけることができるかどうかが重要であることを学んだ。

その後、見附ヶ丘情報交換会は、見附ヶ丘連絡協議会として運営されることになった。運営方法や位置付けは、情報交換会のとくと変わらない。見附ヶ丘連絡協議会は、各団地の上位団体ではなく、単なる地域の情報交換や交流をするための事務局として存在する。ゆえに、会則もないし、会費もなしですべて手弁当で実施する。

このボランティア活動をして感じたのは、無責任だから楽しいのだ、ということ。地域情報誌『FUSION見附ヶ丘』の編集会議に出て、要望を出してもお金は出さない、記事も書かない、編集する必要もない、そして、配布もすべてフラッシュがやってくれるのである。

しかし、こんな楽で楽しいことが続くわけではないと思った。公団はたしかにいいことをしてくれているが、勝手にやらせてくれ、お金を出し続けてくれるような奇妙な行為を、公団がサポートし続けられるはずがないと、われわれは思いはじめていた。

夏休み最後の日曜日、せせらぎ北団地のアニメ上映会

せせらぎ北団地のコミュニティ委員会では、コミュニティを形成するために、何か楽しいイベントを実施してはどうかと考えた。理事会の許可もいただき、夏休み最後の日曜日である8月27日にアニメの上映会を実施することになり、石上、北村両氏とともにレンタルビデオショップへ出かけることにした。

出かけるとき、家内に「どんなビデオがいいかな？」と相談したところ、「平成狸合戦ぽんぽこ」って知ってる？ どうやら多摩ニュータウンの開発と、多摩丘陵に住むたぬきさんたちの話のアニメなんだって」

というのである。自分たちが住んでいるところが舞台になっているアニメなら、みんな興味をもって観てくれるのではないだろうかということで、プログラムは『ドラえもん』と『平成狸合戦ぽんぽこ』の二本立てに決めた。小さな子供たちが多かったため、このコミュニティ委員会最初のイベントは大盛況をおさめた。この上映会のために、わたしの南大沢時代の友人である金子誠男さんは、100インチのスクリーンを用意してくれ、石上さんは中学校から暗幕を借りてきてくれた。

小さい子供のためのビデオ上映会は昼間行うため、太陽の光を遮断することも結構大変であった。

またこのときは、集会所でお菓子も食べていいし、飲み物も飲んでいい、寝転んで見てもいいなど、いろいろうるさく言わないということを決めておいた。これが親たちにも好評だったのである。

たぬきたちとの出会い

偶然に選んだこの『平成狸合戦ぽんぽこ』の内容について、特筆しなければならない。

スタジオ・ジブリ製作、高畑勲監督による『平成狸合戦ぽんぽこ』という作品は多摩丘陵を舞台に、宅地開発にともない食糧と住む場所を失っていくたぬきたちが、開発を阻止するため人間たちにあの手この手で対抗する姿を描いている。

この子供のために用意した物語に、親たちは大変なショックを受けたようだった。自分たちの住んでいる緑豊かな環境のよい多摩ニュータウンは、視点を変えると大変な環境破壊であったり昔から平穏に暮らしていた方々の生活を破壊したうえに存在していたのである。

この日からしばらくの間、わたしは悶々と悩み続けた。そして出した結論は、すべてを肯定しようということだった。悩んでみた！否定的な考え方のなかからは何もプラスの価値は生まれない。そして「そげだ！『平成狸合戦ぽんぽこ PART 』をこれからやればいいんだ！」とひらめいたのである。

たしかに、高畑監督のアニメでは、たぬきたちは人間の開発力に抗しきれずに反対運動をあきらめ、住むところを失ってしまった。今、自分たちは、ある意味ではこの多摩丘陵に長年住み続けてきた方々の犠牲と環境破壊のうえに暮らしている。

でも、「その後のぽんぽこ」では、気のいい利他的精神あふれる新しく住みついた人々と、この現実を受け入れて共存を図ろうとする先祖代々この地に暮してきた人々どが仲良く楽しく暮らしている姿が描かれればいい。自然とも、動物とも、八王子市や東京都の方々とも、公団とも、みんな仲良くして暮らして「生きていく」のだ。こう考えたとき、わたしの心は熱くなってきてどうしようもなかった。さあ、これをどうやったら実現できるだろうか？

『多摩ニュータウンタイムズ』の横倉舜三さんとの出会い

ある休日の朝、ときおり新聞に折り込まれるタウン紙『多摩ニュータウンタイムズ』を読んでいて、「あ、この人だ！」と直感した。いつものように、わたしは多摩ニュータウンタイムズ社にいきなり電話をかける。

「もしもし、富永と申しますが、横倉社長さんはいらっしゃいますか？」

「少しお待ちください」

と女性の声。

「はい、横倉ですが、どういったご用件でしょうか？」

「突然ですがとにかくお会いしたいのですが」

「よろしいですよ」

「と言われるやいなや、

「今から伺います」

と言って電話を切ったら、横倉舜三社長の前に、わたしが立っていたような速さであった。こうした

ときのわたしの対応はきわめて早く、動物的勘によるところが多い。直感的に「この人しかいない、この人以外に多摩丘陵の昔を自分に教えてくれて、なおかつ、これから自分が何をこの地でしたらいいかを教えてくれるのもこの人しかいない」と感じたのである。

わたしは人が好きである。特に価値観の共通性を感じて、この場面ではこの人しかいないと思ういても立ってもいられなくなって、気がついたら相手と面会しているようなことが今までにもよくある。そのときには、不思議といやな顔をされたことはないし、間違っていたこともない。この横倉社長との出会いもそうであった。

それ以降、会社を半日休んで『多摩ニュータウンタイムズ』の編集会議に出させてもらったり事務所に伺ったりしてとにかくいろいろな話をした。そうしたなか、横倉さんの著書『多摩丘陵のあけぼの』という上下刊2冊の本を読ませていただいた。

この地に降ってわいた多摩ニュータウン計画。用地買収をめぐる経緯や土地の歴史、開発計画の冷静な分析とまちづくりへの思い。横倉さんの一代記を、涙腺の弱いわたしは涙なくしては読めなかった。それを横倉さんに率直に伝えたら大変に喜んでくださり、多摩丘陵の変遷とともに生きた自分の人生を語ってくださった。

わたしは、本気で、

「『多摩ニュータウンタイムズ』をわたしにゆずってください」

と言った。しかし

赤字で暮らせないので息子もあきれているくらいだから、やめておきなさい」

と言われた。

そんなことを言っていると横倉さん一代で、この新聞が終わっちゃうじゃないですか！」

と言うと

「あんたが別のかたちで、わたしの心を継承してくれるからいい」

と言われ、驚いた。

果たして自分にいったい何ができるというのだろう。それから自問自答が始まった。

平成狸合戦ぽんぽこ』の高畑監督との出会い

ある日、横倉さんに『平成狸合戦ぽんぽこ』の話したら、「どうもあのアニメはわたしの話を参考にして制作されたい」とおっしゃる。お礼の手紙付きでビデオを贈っていただいたがまだ観ていないのだという。そして当時の『多摩ニュータウンタイムズ』を引っ張り出して、記事を見せてくれた。これが今日、NPOフュージョン長池のホームページにある横倉さんの原文である。そして、『ぽんぽこ談義』で大いに盛り上がり、ついに高畑監督に会いに行こうということになった。

電話で約束を取り付けたプロデューサーの鈴木敏夫さんは、徳間書店の取締役であった。

今日はどういう用件で来られたのでしょうか？」

高畑監督にどうしてもお会いしたかったので。そして、これからまちづくりのシンボルとして、ぽんぽこ狸のキャラクターを使用させてほしいからです！」

といきなりお話ししたら、それこそ鈴木さんは、ためきに化かされたような顔をされた。それでも、高

畑監督を呼んでくださり、紹介して下さった。

高畑監督はニコニコしながら『平成狸合戦ぽんぽこ』を制作したときの苦労話をしてくださり、横倉だぬきと高畑だぬき(失礼！)の歓談に、楽しいひとときを過ごさせていただいた。

公共性の高い話であればキャラクターを貸してもいいと行って下さったので、わたしは、将来かならず使わせてもらおうと心の中で決心した。当時はまだ、NPOという言葉も知らなかったが、公益性の高い活動をやりたいと考えていたことは事実である。

この本が世に出る今、NPOフュージョン長池はすでに法人格を取得し、自立を目指して頑張っている。この本を手にもう一度横倉さんと一緒に高畑監督を訪問したいものである。

コミュニティ活動の広がり

第1回見附ヶ丘フェスティバルを開こう

1995年の夏は、せせらぎ北団地でアニメ『平成狸合戦ぽんぽこ』を上映したが、翌九六年は、見附ヶ丘連絡協議会ができたこともあり、夏祭り、つまりフェスティバルを実施しようということになった。すると議論百出。

見附ヶ丘連絡協議会がどうしてフェスティバルをやるの？ お金もないのにどうするの？」
大変だからやりたくないけど、どうせやるなら盆踊りのやぐらに提灯も派手にやりたい。神輿も欲しい」

見附橋の下に集合してやろう、各団地別に分かれてやればいい」

雨が降ることを考えたら、各団地の集会所だねえ。当日の連絡態勢はつくましよう」

といったぐあいである。さまざまな意見を聞きながら、なんとかして一歩前進をイメージしながら、方向性を協議していく。そして、こうした議論の後に、前向きな妥協の産物が生まれてきた。

- 1、8月25日(日)に「第1回見附ヶ丘フェスティバル」を実施する。
- 2、実施方法は、各団地の判断で各団地のなかの集会所等を使用して行う。金銭も各団地の判断で処理する。
- 3、極力無理をしないで、手伝った人たちのほうが楽しくて、またやりたくなるようにやろう
- 4、会議は極力やらない。打ち合わせは6月、7月に各一回と開催日一週間前の三回のみとする。そうしないと夏休みに家族旅行等ができなくなる。
- 5、この見附ヶ丘フェスティバルを『FUSION見附ヶ丘』で特集する。

という参加者が楽しく妥協できる内容であった。

にぎやかなことが大好きなわたしは、みんなで見附橋の下に集合してやればいいのにとも思ったが、強行しなかった。とにかく一回でも実施することはすごいことだと、自分に言い聞かせていた。人にとっていちばん楽しいのは、責任がなくて、無理をしないで、ちょっとだけ手を出してよいことをした気分になれることかもしれない。これを肯定しないかぎりボランティアは成り立たないのだ。

しかし、最低でもひとりを中心にして、すべての雑務を引き受けてニコニコと物好きを決め、責任もとる気持ちの人間がいないと成り立たない。この地域の人々は、べたべたした人間関係が嫌いな人たちだ。自分もそのひとりである。こうして各団地別にやれることを前向きに考えれば、結構、自由に自立できるものなのだ。

そうか！ みんな内にもこもってばかりいる人たちと思った部分もあったが、そうしてられるということ、経済的にも思想的にも自立した人たちだから、家族だけで“ドアを閉めた”生活もできるにちがいない。もしかしたら、これはすごいことだ。

反対に、経済力がなくて自立することが難しいときには、人間は長屋的な助け合いを求めるようになるのだ、ということに気がついた。要するに、この街の人たちの“気分”を最初から肯定することができれば、みんな安心して出てきて“自由に自立”して“勝手”に手弁当でやってくれるのかもしれない。

このところ、人生の応援団という言葉をよく使う。自分が他人の人生の応援団をすればするほど、周りの人がわたしの応援団を、求めなくてもしてくれるのだ。利他的精神と行動のエネルギーの交換である。自分は目立っている黒子。完全な黒子では存在感がなくなる。でも、黒子は黒子。人がやりたいと思っていることをなんとかして応援したい。そして、何かが具体的にできて、その人たちが喜んでいる様子を見ながらひとりで静かに“人に乾杯”をして“ニターッ”とする。気持ち悪いけどこれぞ、究極の自己満足。

NPOを語るとき、よく人材育成とか研修とかいうことがあるが、到底考えられない。人材は出てくるもの、または、発見するものだと信じている。

いろいろな活動をしているなかで成長する人がいるのは当然であるが、それは教育を行っているのではなく、その人の内面にあるものを、その人自らが気づきはじめて、自分の才能を開花させるのだと思う。そのときにできることは、最大限のデリカシーをもって、そっと心地よい場を提供することくらいではないか。

しかし、この地にはたくさんの人材がいるものである。その人たちが、しかも必要とする場面で、まるで地から湧き出るように地域から出現してくるのである。

せせらぎ北団地の住宅管理問題

長期修繕計画

せせらぎ団地では、団地ができて三年目でもあり、そろそろ真剣に長期修繕計画を策定する必要があるということで、検討が進められていた。まずは当団地の管理会社に依頼しようということになって、見積もりを依頼したら、なんと長期修繕計画の資料を作成するだけで200万円かかるという、それは高いということで交渉したが、‘気に入らなければ結構’と言われてしまった。

1996年10月13日、大集会所に103戸から34名(7戸未入居)が集合して相談の機会をもった。出席の方々からは賛成をしていただいたが、理事会としても、少しでも慎重にしたいという意見が大勢であったため、同月25日を期限に全戸に意見を聞く文書を配布することにした。

ここでも、初代理事たちが願いをこめた方針である、とことん情報公開することと話し合う姿勢を貫いていったのである。この面倒な作業の一つ一つが、せせらぎ北団地の今日のコミュニティを支えているのである。コミュニティを形成することは理屈ではなく、良いことも悪いことも、次々に起こる具体的な事象について、徹底的に情報公開して話し合うことがなによりであると思っている。

さて、長期修繕計画書策定の費用と内容についてアンケート調査を行った結果は、103戸中回

収数 50 で、賛成 46 件のうち 5 件は意見付き、反対は 4 件であった。無回答の 53 を賛成にしてしまつと賛成多数で決定になる。しかし、無回答の方々が何を考えているのかがどうしても気になり翌 97 年 1 月 19 日に臨時総会を開催して決議することとなった。

臨時総会において、全会一致で理事会一任が決定したので、1 月 25 日に管理会社を呼んで最終折衝を行い、発注にこぎつけた。この長期修繕計画策定資料を発注するかどうかだけで、実に 6 か月に及ぶ話し合いを行ったことになる。しかし、ここまで長くかかったもう一つの要因は、管理会社の仕様(やり方)の押しつけ体質への反発であった。管理組合だけの自主管理が管理会社への委託管理かで議論が生まれたのは、この時期からであった。

駐車場の管理

駐車場については団地の入居が開始された当時、110 戸中 90 戸でスタートしたためにそれほど問題にならなかったが、入居者が増えるにしたがって、機械式駐車場の下段に入らない車や機械式駐車場の上段にも入らない、平面(地面)駐車場限定車も増えつつあり、こうした問題にどう対処したらいいのかが駐車場専門委員会および理事会で議論になっていった。

駐車場専門委員が長時間かけた議論の結果、次のように対応することに決定していった。機械式駐車場に車種によって限定条件があることを承知している人(既入居者)が、限定車両を新たに購入した場合は、少々駐車場代金を追加徴収することで抑止する。新規入居者で、限定車両があることを知らないで限定車両とともに引っ越してきた人には、1 台目でもあるので優先して駐車場を確保する。つまりすでに駐車している人のなかで駐車場選定会の際にくし運の悪かった方から順番に駐車場を移動していただくというわけである。

この後、110 世帯が完全入居するのであるが、この駐車場確保に対する柔軟な方針があったおかげで近隣団地に先駆け、入居率が 100% になったことは事実である。そして、今日において転売の際にも有利に交渉が進められる条件にもなっているようだ。

地域情報誌『FUSION見附ヶ丘』の存続

いつしか地域情報誌『FUSION見附ヶ丘』は、住民の意見や問い合わせがベースになって記事が編集されて発行されるようになっていた。しかし、公団が予定した予算は 2 年間のみと聞いていたので、1997 年 1 月のある日、フラッシュの鈴木さんに電話をかけた。

鈴木さん、地域情報誌の『FUSION』なんですが、二年間だけの予定ですから、もう終わりますよね。」

当初の予定ではそうなんですが、住民側でもう一步突っ込んだ応援をしてくれますか？」

もし継続できるなら、何でもしますよ！」

そうですか。それならもう一年延長を公団と折衝してみますよ。こんなに住民が協力的なケースは公団にとっても初めてなのですよ。」

「へえ、そうですか。僕らは楽しいから続けたいと思っているだけですよ。」

「じゃ、ちょっと一週間だけ時間をください。」

というような会話が合った。

そして、一週間後に鈴木さんから連絡があり、一年間継続になったと報告された。このとき鈴木さんが頑張ってくれたことが、今日のわれわれの活動につながっているのである。

さて、地域情報誌『FUSION見附ヶ丘』に、97年3月から「見附ヶ丘連絡協議会通信」を掲載することになった。そこには、見附ヶ丘連絡協議会の趣旨が、詳しく紹介されている。

見附ヶ丘連絡協議会通信」(97年3月『FUSION見附ヶ丘』12号)

現在、見附ヶ丘には、長池団地自治会・長池第二団地自治会・長池公園せせらぎ通り北団地管理組合・長池公園せせらぎ通り南団地管理組合・コープタウン見附橋管理組合(順不同)という五つの自治会・管理組合があります。さまざまな管理・運営のために5つに分かれていても、みんな同じ「見附ヶ丘」の住人。それぞれが互いに友好を深め、親睦を図っていきたいもの。そこで発足したのが「見附ヶ丘連絡協議会」なのです。

1 見附ヶ丘連絡協議会とは.....

皆さん、昨年の「第1回見附ヶ丘フェスティバル」を覚えていますか？ 実はこのイベントは、各自治会・理事会の代表者が日程や開催の方法を話し合うことによって、見附ヶ丘地区全体で同時開催することができたのです。

そして、このイベントを機会に、見附ヶ丘地区全体の友好や親睦を図ることを目的とし、九六年7月に発足したのが「見附ヶ丘連絡協議会」。この協議会は、各団地の自治会・理事会が独自に選出した代表者(それぞれ一名)計五名で構成され、あくまでも各自治会・理事会に対して上位組織ではなく、各団地を横につなぐための会とされています。現在の活動としては、約2か月に1回のペースで、集会所で会合を行い、今後の活動や運営方針などを話し合っています。

2 どんな活動をしていくの？

97年2月までの会合で話し合われた内容には以下のようなものがあります。

見附ヶ丘地区にあるサークル活動支援

親睦を深める(営利目的・宗教活動等は不可)ことを目的とした、各種サークル活動や同好会の募集告知等を支援していく。(具体的な内容は現在検討中)

『FUSION見附ヶ丘』の発行

現在の『FUSION見附ヶ丘』は、見附ヶ丘地区を対象として東京都住宅局・東京都住宅供給公社・住宅都市整備公団の協力で発行されている情報誌だが、これを引き継ぎ、連絡協議会の広報誌・情報誌として、より地元に着した事項を記載していく。

当初は、現編集部と協力して情報提供を行い、1年後には自主発行を目指して編集を引き継ぐ。

「第二回見附ヶ丘フェスティバル」の開催について

今年も例年同様、夏期に、より親睦が深められるようなフェスティバルを開催するために、さまざまな情報を収集していく。

3 今後の協議会運営のために

今後の、さまざまな協議会の活動や運営を考えると各自治会 理事会から選ばれた代表者5名だけでは、難しいことも起きてくると予想されます。このため、連絡協議会としては、その事務処理などを手伝っていくために、事務局を置くことを確認しました。そしてまずは、現在の連絡協議会メンバーをベースに、任期満了などで交代する代表者をバックアップすべく、この2月に事務局として正式に発足しました。

現在事務局では、前述のような活動を円滑に進めていくために、参加希望者を募って、運営にあたっていくことを検討しています。近いうちに、事務局の活動を手伝っていただける方を募集する予定ですので、この機会に「ぜひ『FUSION見附ヶ丘』をつくってみたい」とか、「こんな見附ヶ丘フェスティバルをやってみたい！」など、日々の生活のなかで、楽しいアイデアをおもちの方は、ぜひ協力してください。

第3章 時代の風にあと押しされて

～インターネットが生み出すパワー

牧場のおっさんが長池見附橋のそばまで子牛を連れてきてくれた。突然現れた三牧場に、子供たちは大喜びである。

第2回見附ヶ丘フェスティバル

せいがの森保育園 藤森園長との出会い

1997年夏。第2回の見附ヶ丘フェスティバルは、長池公園の見附橋下姿池周辺において開催されることになった。フェスティバルの準備を進めるなか、わたしは「せいがの森保育園」の藤森平司園長と運命的な出会いをした。

7月のある日、わたしは長池見附橋近くにあるせいがの森保育園を、「園長先生いらっしゃいますかー？」と突然訪ねたのである。

応対してくれた保母さんは、このずうずうい訪問者にとっても愛想よく「はい、ちょっと待ってください」と答えて、藤森先生を呼んできてくれた。

この、大変好奇心の強い訪問者は、藤森先生のこと、保育園のこと、せいが(省我)の意味のことなどを、まるで興信所のように尋ねた。先生はニコニコしながら、これらの質問に要領よく答えてくださり、そして、最後に子育ては地域全体で行うもので、なにも保育園での教育がすべてではないと教えてくださった。

わたしはさらにずうずうしく、

「8月24日に第2回見附ヶ丘フェスティバルを行うので協力していただけますか？」

と切り出した。すると驚いたことに、藤森先生は、「8月23日に前夜祭もやりますよ」と

と言ってくださったのである。

そして、イベントなどに不慣れなわたしに、トイレのこと、救護のことなど、さまざまなアドバイスをしてくださった。わずか四〇分くらいの話し合いと、初対面にもかかわらず、わたしは藤森先生の大ファンになってしまった。これからこの地域にコミュニティをつくりたいと願うわたしにとって、かけがえのない味方を得た思いだった。価値観の合う人との出会いほどすばらしいものはないと実感させられる。

これが、せいがの森保育園で有名な、富永の“トイレ貸せ事件”である。

要するに、第2回見附ヶ丘フェスティバルを実施するにあたり、近くにトイレがないのもまずいと思って「トイレだけ貸してくれたらいいや」と内心想いながら突然訪問したのだった。この日以来、この突然の訪問者は、暇さえあれば保育園をたまり場にしてしまった。

土曜日になると保育園に出かけていく親父に向かい、長男は「また、保育されにいくのかよ！」と言ってからかう。親父のほうでも「そうそう、藤森先生は街ごと保育してくれてるんだよ！」とやり返すくらいなのだ。

お祭り地元のスーパー

8月のある日、わたしは、またしてもいきなり相鉄ローゼンというスーパーマーケットの本社に電話をかけて、まもなくオープン予定という八王子別所店の店長予定者の名前を聞き出した。そのうえ、
「今、どこにいらっしゃいますか？」と聞いて、「外出中です」と言われると、「なんとかして連絡をとる方法はないですか」と押しまくり、ついに携帯電話の番号を聞き出すのに成功した。

その店長とは田口信行さんであった。このように強引になれるのは、相手に喜んでもらえる確信できるときでもある。最初はたしかに、ちょっとびっくりさせてしまうのだが。

「もしも、今度お店を出される別所店の近くに住む富永と申します。はじめまして」

「はじめまして、田口です。よろしくお願いします」

今日は、二つの用件でお電話させていただきました。第一に、この地域の情報誌『FUSION見附ヶ丘』に、お店の開店のことを掲載させていただきたいのですが、よろしいでしょうか？ 公団がスポンサーをしてくれていますので掲載料は無料です」

こうした場合、かならず相手のメリットになることを先に言うと、一瞬、相手が喜ぶのがわかるものだ。さらにそのうえで、こちらをお願いをすると相手は断れないものである。

「それは、どうも、恐縮です」

あとで、フラッシュの鈴木さんから電話がいきますので、よろしく。ところで、8月22日のオープン後すぐで恐縮ですが、8月24日の地域のお祭りのために、食材を購入したいのですが、少々安くしていただけるでしょうか？」

「いいですよ！ それでは特売の価格にしましょう」

「ありがとうございます。でも、雨が降ったらいなくなる可能性もあるのですが」

「うちはお店ですから、困りませんよ。雨が降ったらキャンセルにしましょう」

「恐縮です。もう一つすみません！ 飲み物などを冷やすために氷が必要なのですが」

「いいですよ。当日は必要なだけ持って行ってください。無料で結構ですよ」

ということになった。これでみなさんに食材の心配をさせないですむ。

まだ顔も見たことのない相手からの電話一本の交渉に、柔軟に応じていただいた田口店長には本当に感謝している。

後日、足を運んでお礼を述べた際、田口店長から祭りの祝い金の話が出たが、丁重にお断りした。これは個人的な見解だが、地域で祭りをするとなると、周りの事業者から祝い金をお願いする習性が存在するが、わたしはあまり好きではない。それよりむしろ、彼らが商売になるように協力すべきではないかと思っている。

NPO活動をする場合に、事業者とおつきあいすることもあるが、相手はビジネスをしているのであるから、それに対し、なんらかの方法で貢献できることがあるかどうかをよく考えて行動することが重要だと思うのだが。

「自分たちは利他的な良いことをして、企業はお金があるのだから応援してくれてもいいのでは」という考え方があるとすれば、わたしは少々違うように思う。企業に対しても、地元の中小的

事業者や行政ともすべてに平等な立場になり、利他的に対処してほしいものである。

このときも、できれば、相鉄ローゼンの旗を立てて夏祭りに一緒に参加してほしかったが、開店直後の忙しい時期だったため、実現しなかったのはとても残念だった。

見附ヶ丘フェスティバルの取材

コミュニティFMのボランティアスタッフだった山本紀子さんは、8月24日のフェスティバルの本部席に、

「こんにちは！ ちょっと取材させていただいていいですか？」

と言って現れた。

「どこが主催しているのですか？」

主催は見附ヶ丘連絡協議会といて、この目の前に見える団地群ですよ」

費用はどうしてるのですか？」

費用はゼロ。各団地が自分たちの費用でやりたいようにやっているですよ」

そんなこと、よくできますね」

見附ヶ丘連絡協議会は、団地群の上部団体ではなくて、単なる物好きな人間（自分のこと）がやっている事務局ですからね。お金を集めると会計をおいて、監査して、会計報告してと面倒くさいじゃないですか。ですから、見附ヶ丘連絡協議会には会則もないし、会費もないんです」

「よくみなさんが協力してくださいますね」

無理をしないで、浴衣がけのような気楽な気分で、やった人が楽しめて、また、来年もやりたいくなる程度にやっているんですよ」

それにしても、盛大ですが」

それは保育園が協力してくれたからでしょうね」

え、保育園が協力しているのですか？」

実は、きのうは前夜祭だったんですよ！ それに今日は、保育園の方々は全員出勤して手伝ってくださってます」

などと延々としゃべっているうちに、「多摩ニュータウンタイムズ」の記者も加わっている間かれることになった。そして、そのときの様子は、多摩ニュータウンタイムズでも紹介された。

このとき、万一、地域情報誌『FUSION見附ヶ丘』がなくなっても、広報手段はあるということにあらためて気づいた。いざとなったら、多摩ニュータウンタイムズの紙面のなかに「見附ヶ丘の活動紹介コーナー」をつくってもらおう。考えたら即実行のわたしは、その後すぐに横倉社長を訪ね、その旨を了解していただいたのである。

30周年を迎えた多摩ニュータウン

多摩ニュータウン学会との出会い

1997年は、多摩ニュータウンが事業着手から数えて満30周年の年であるという The 30th Anniversary「Think TAMA N.T.」という内容で、この年にはさまざまな多摩ニュータウン30周年記念事業が行われた。

3月15日には、産・官・学・民の連携でそれらの交流のプラットフォームとなる「多摩ニュータウン学会」が発足したらしい。わたしは残念ながらこうした動きをあとから新聞記事で知ったのだった。

3月頃まで、せせらぎ北団地と見附ヶ丘連絡協議会というきわめてローカルな活動に終始していたが、多摩ニュータウン開発30周年のイベントの風に煽られて、なにか自分も新しい時代を求めたくなっていたところだった。そのタイミングに多摩ニュータウン学会の創設のニュースが飛び込んできたのである。この記事に登場されていたのが、学会の事務局の大妻女子大学の炭谷晃男教授である。とにかく、思い立ったら会いに行かずにはいられない性格は、すでに読者のみなさんもご承知のとおりである。

4月のある日、わたしは大妻女子大学社会情報学部助教授の炭谷先生にお会いするために、先生の研究室を訪れた。そこには大変に丁寧で優しい面もちの炭谷先生が待っていてくださり、多摩ニュータウン学会の目的や今後の活動についてを語ってくださった。このときに学会で一緒されている中央大学の細野助博教授と、多摩大学の斎藤裕美教授をご紹介いただいた。さらに話が終わって帰途につくときにも、炭谷先生は一階の出口まで初対面のわたしを見送ってくださったのである。

炭谷先生とは、夏の第2回見附ヶ丘フェスティバルのときに、思いがけなく再会することになった。「やあ、富永さんじゃないですか？ 今日はお祭りをやってるんですね！ 全然知らなかったですよ」

ニコニコ笑いながら見附橋脇の階段を降りてきたのが、炭谷先生だった。

「はあ、広報手段がないので、この辺に見えている団地だけに広報してるのです。先生はどこにお住まいですか？」

「そういえば前回お会いしたときにいかなかったですね。蓮生寺団地の一番街ですよ」

「そうですか、じゃあ近くじゃないですか！ 来年は先生のところも参加しませんか？」

テンポの速すぎるわたしは、もう来年のお祭り参加の交渉を始める。まじめな炭谷先生は返答に窮する。そんなお決まりのパターンで終わるのである。最後に炭谷先生から、多摩ニュータウン学会の事務局会議を永山駅近くのラクーン多摩という会社で行っているの、今度いらっしゃいませんか、とお誘いを受けた。

中央大学総合政策学部教授の細野先生には、夕方少々早めに仕事を切り上げて訪ねていった。研究室をノックしても返事がない。変だなと思って立っていると、学生がやってきて、「おいでになるはずなのに」と言う。しばらくして事務室に寄ったが、所在がわからないというので結局その日は失礼した。

その後わかったことだが、細野先生は行政の委員になっておられて、急な呼び出しがあって飛び出していかれたとのこと。あとになって、わたしとの約束を思い出して「しまった」と思ったときには、もう遅かったそうである。

細野先生とは、その後あらためて研究室でお会いした。南大沢にお住まいの先生は、見附ヶ丘

連絡協議会の活動の話をしたところ、大変に興味をもっていただいた。そのとき、先生は「僕は、この7月からアメリカの大学へ留学しますが、一年で帰国しますので、帰ってきたらこの多摩ニュータウンで株式会社でも経営しましょう」と言われ、ビジネスマンみたいな先生だなという印象を受けたものだった。

多摩大学の経営情報学部の斎藤裕美教授に、炭谷先生にご紹介いただいた旨を電話で説明し、多摩大学を訪問したところ、大変気さくに会ってくださった。第一印象で、なんとおおらかな感じの女性なのだろうと感じさせられた。そして、地域情報誌『FUSION見附ヶ丘』をお見せしながら見附ヶ丘連絡協議会の活動の話をする、大変に興味をもっていただいた。

この頃、わたしは、自分たちがやっている活動は結構、説得力があるように、あんなに著名な炭谷先生や細野先生、斎藤先生が大変に興味をもってくださるのだから、と感じはじめていた。しかし、多摩ニュータウン学会との具体的な接点も見出せなかったため、わたしは相変わらず一生懸命に、せせらぎ北団地と見附ヶ丘連絡協議会の活動に注力していたのである。

当時、多摩センターに建設された「文化創造工房 繭ドーム」という仮設のドームでは、数々の多摩ニュータウン30周年記念のセレモニーやシンポジウムが開催されていた。

わたしも、いくつかのシンポジウムに参加したが、多摩ニュータウンに住んだこともなく、働いたこともない著名な方々が、考え方として「これからの多摩ニュータウンは、こうあるべきである」と語られることに対して、「へー、そんな考えもあるのか。すごいなあ」と思いつつ、一方で「だれがやるのだ、そんなもん！ 結局実現してなんぼだ。能書きだけでは何にもならない」と思いながら、少々冷やかに眺めていた。

しかし、一面ではある種の感動が自分の体の中を走り、ぞくぞくしたのも事実である。もしかしたら自分たちが今やっていることは、とんでもないこと、つまりこれらの高邁な能書きを日常性としてやっているのかもしれないと感じたことである。

みんなから、「どうしてそんなに地域のために活動するの？」と聞かれると、自ら「物好きなんですよ」と答えてきたが、これは単なる物好きを超越してしまうかもしれないと感じ、まあ、人生いろいろなことがあるほうがおもしろいからな、とも思っていたのだ。

ともあれ、わたしは自分に何ができるのか挑戦してみたくなったので、やれるところまで、そして自分が楽しめるところまでやってみよう決意したのもこの頃である。

さて、多摩ニュータウン学会の事務局会議を行っているという「ラクーン多摩」の事務所に到着すると、わたしより若い羽田野二穂さんが、「ソーホー、ソーホー」としゃべっている。わたしもよくしゃべるけれど、羽田野さんもよくしゃべる。そのうえ言葉がわたしにはわからない。「ソーホーってなんだろう？ ロンドンには、ソーホー地区とってストリップやポルノが氾濫している場所があったけど」なんて考えていると、炭谷先生がメンバーのみなさんに紹介してくださった。

さらに「第1回多摩ニュータウン学会研究大会」で、わたしもプレゼンテーションすることが、羽田

野さんの話に取り取られている間に決まってしまうようだった。

あとで、ソーホーとは「SOHO」のことで、Small Office Home Office のことだとわかったが、そのときはそんなことも知らなかったのである。

第1回多摩ニュータウン学会研究大会

97年9月27日の第1回多摩ニュータウン学会研究大会では、記念講演のあと、自然・歴史・地理部会、コミュニティ部会、ビジネスシーズ部会、広域行政部会、環境デザイン部会など各研究部会の報告があった。

そしてそのあとに、さまざまな地域活動を紹介する自由研究が報告された。そのなかでわたしは、「自由に自立した人たちがつくる街」というテーマで、見附ヶ丘連絡協議会には、会費も会則もない、楽しければみんな出てきて活動してくれる、という話をしたのだった。

コミュニティ・サーバって何？

その後、考えたら行動、いや考えながら行動、いやいや考える前に行動、というわたしのお株をとられたような素早さで、羽田野さんが自宅に現れた。羽田野さんは、わたしにも理解できるように言葉を選びながら話してくれる。そして、コミュニティ・サーバの説明を始めた。英語は多少できるつもりでわたしは、最初、コミュニティにサービスしてくれる人がいるのかな、と思っていたが、一時間ぐらい後、それはサーバとっているコンピュータのことらしいとわかってきた。しかし、コンピュータはコンピュータで、どうしてサーバ、サーバと別の言葉でいっているのか、やはり理解できない。次に、ホームページ、メーリングリストの話になっていく。わたしきたら「なにになに？ 家のページに、メールするためのリストがあるのかな？」という調子である。

時間ばかりがたって、まったく言葉が通じないなかでおもしろそうだったのは、羽田野さんが、「メーリングリストを使うと、一度に100人とも200人とも話ができる」と言ってくれたことである。

これは、よくしゃべるわたしがさらに機関銃を持たせてもらうようなものだど理解した。そして、ホームページに記憶させておけば記録も残り、あとから参加する人にいちいち説明する必要がなくなると説明され、さらに興味をひかれていった。

これは、めったにメモを取ろうとしないし、書類の管理も苦手、最近コミュニティ活動について同じ説明を繰り返しているわたしには向いている仕組みかもしれないと直感。羽田野さんは、人のネットワークを補助するかたちでコンピュータが使われることを望んでいて、それを実現するコミュニティ・サーバとやらの実証実験の相手として、わたしを選んだようである。

現在のNPOフュージョン長池では、メンバー間の日常のやりとりのほとんどをメーリングリスト上で行い、おもしろい情報をホームページにストックして、3か月に1回は、紙媒体として「NPO FUSION 長池 ぼんぼこかわら版」を作成し、地域情報誌として発行している。こう書けば格好がいいが、最初はまったくこのインターネットを活用するシステムが理解できず、活用どころではなかったのである。

牧場のおっさんとの出会い

先の多摩ニュータウン学会研究大会で、わたしの次に発表した、髪はボサボサ、髭は伸びている

し、少々臭うし、何だこのおっさんは！ と思っていた人がいたが、この人はみんなが「牧場のおっさん」と呼ぶ鈴木亨さんだった。それにしてももう少し綺麗にできないもんかな、と思いながら話を聞いていたところ、わたしは、度肝を抜かれた。なんとこの多摩ニュータウン開発に反対しながら牛を飼ってるという。そしてこれからは共存したいとも、そんなバカな！ そのうえ、インターネットで情報発信しているとか。わたしにはついていけない世界だと思った。

しかし、当時テトラパックという牛乳用の紙容器メーカーに勤務していて、酪農には少々縁があったわたしは、やっぱり後日、鈴木さんを訪ねてしまったのである。そこで聞かされた話は、多摩丘陵の昔のこと。まずい、わたしの一番弱い話だ。ぼんぼこだ。『平成狸合戦ぼんぼこ』だ！ この話に入れ込むと人生が変わりそういやだー、ダメダメ！ 女房、子供のためにサラリーマンを続けなくちゃと思っていたのに……。

その後、やはりサラリーマンを辞めることになって、今こうして本を書いている。だから、牧場のおっさんもわたしの人生を変えた人のひとりである。でも、NPOフュージョン長池を語るときには絶対になくなくてはならない人なのだ。それは、これをきっかけに始まったおっさんとの交流が物語っている。

せせらぎ北団地の長期修繕計画と、とことん懇談会

団地の管理会社に200万円を支払って発注した、長期修繕計画書ができ上がってきた。内容からすると、修繕計画費用が今のままだと全然足りない。建物専門委員長の山本さんのリーダーシップのもとに、長期修繕と資金の問題の検討を徹底的に実施したのがこの年であった。この高額な長期修繕計画書の有効利用のためにも、一般管理費は今のままでいいのか、共有部分の修繕計画と資金の関係はどうするのか、専有部分の修繕計画と資金の関係はどうなっているのかなどを、まさに総力をあげて議論を繰り返したのである。

最後は「もういいよ！ 勝手にしろよ！」なんていう会話もあったぐらい、かんかんがくがくの議論であった。しかし、会議が終わって帰るときには「また、相談しよう」と穏やかに解散できたのは、歴代の理事さんたちと専門委員の方々が、上手に理事会を運営してくださったのと、何かにつけて協力して団地内の懇親に努めてきた成果であったと確信している。

しかし、大変に重要なことなので「最終提案」の前に全組合員の意見を聞くことにした。これが一二時間懇談会である。110世帯を班別に六グループに分け、2日間、合計12時間の説明会を行った。理事さんや専門委員の方々に助けられながら、なんとか来られた方々への説明と、みなさんの意見を聞かせていただくことができた。

その結果、98年3月15日の臨時総会においては、管理組合の運営上、最も難しいといわれる長期修繕計画と資金計画の見直しを、全会一致で通過させることに成功したのである。

この経過に見られるように、この街に暮らす人たちにとって、住宅問題がいかに重要であるかということがわかり、NPOフュージョン長池の「住宅管理支援事業」につながっていったのである。

公団と住民の新しい関係

1997年6月に、八王子ニュータウンのみなみ野シティより、高橋陽子係長が住都公団多摩ニュータウン事業本部、事業計画二課（ライブ長池担当）へ転勤して来られた。この後、高橋さんを抜きに、

公団とNPOフュージョン長池のエールの交換は無かったといっても過言ではない。

この年の暮れ、「住都公団の街づくり」に対する行動が開始された。今まで休眠状態のような「街づくり館 ライブ長池」を使用して活動開始だ。「ポレポレフェスタ」というライブ長池の活性化のための公団の主催する一年間にわたる企画やイベントが始まった。それらのイベントが始まる前に、高橋さんと街づくり館でお会いした。

高橋さん、住都公団は、これから何をやりますか？」

そうですね、なんとか街づくりに貢献したいのです」

そうですね。そのときだけのイベントにならないければいいのですが……」

そうですね。公団はいろんなところでイベントをします。そのときは結構なお金も使います。でもわれわれが事務局をやっているときはいいのですが、なかなかうまく住民の方々に引き継いでもらえないのです」

そうですね、それならこんなにうまくいった例はないといわれるように、高橋さんとやってみましょうか」

それができたらすごいですね！」

わたしも自分の家の資産価値を守るためにも重要です。そうだ、住都公団が売りそこなっている土地と建物の完売セールをやきましょう！」

そうですね。建物というハードだけでなく、暮らしというソフトも提案していけば売れますよね」

わたしは、売ってなんぼのセールスマンですからね。能書きではなく、事実の積み上げで勝負しましょう」

いいですね、やってみましょう！」

ということでスタートし、最初「ポレポレフェスタ」のフリーマーケットなどの募集を手伝おうとしたが、誰もわたしの呼びかけに応じしてくれず、惨敗であった。何か具体的な工夫が必要だ。

ポレポレフェスタの広報紙「ポレポレ」の編集者として登場したのが、南大沢にお住まいの早乙女博之さんであった。

ポレポレフェスタのイベントのひとつに「探検！ 長池に行こう」というのがあった。長池里山活動で、バンダナを頭に巻いて写真撮っている人が早乙女さんであった。ひとりで写真を撮り、イラストを描いて、記事を書いて編集までしてしまう。ご自分でデザイン事務所をやっている、オールマイティな人である。でも、ちょっとシャイでおとなしくて、人の話を一生懸命聞いてくれる。NPOフュージョン長池の愛くるしいたぬきのマークは、早乙女さんがデザインしてくれたものだ。早乙女さんは、みんなが大事にしたい雰囲気やイメージをいつも形に表してくれるのだ。

地域情報誌「FUSION見附ヶ丘」から「FUSION長池」へ

1998年1月18日、「第1回FUSION(融合)ミニシンポジウム」を開催することになった。これまでに出会った藤森先生や炭谷先生、羽田野さんらをパネラーに、街づくりや子育てといったテーマを語り合ったのである。

この日はみぞれから雪になる寒い日であったが、街づくり館には約30人の方々が訪れ、真剣に聴いてくださった。

最後に、地域情報誌『FUSION見附ヶ丘』を『FUSION長池』へ拡大して継続し、「見附ヶ丘フェスティバル」を「長池見附橋フェスティバル」へ変更して継続を考えているのでぜひ協力してほしいとお願いをしたところ、会場にいらした当時多摩市史編集委員で、現立命館大学助教授の勝村誠さん、大嶋母乳相談室の助産婦の大嶋千映子さんから、応援したいとの発言をいただいたうえ、会場に来られた方々にも「そうそう 賛成」とうなずいていただいた。

そして、なんと嬉しいことに、シンポジウムの発表者でもあったフラッシュの鈴木さんから、もう一年だけなら資金と編集を協力してもいいという申し出があったのである。そのかわり 記事を書いたり配布したりするのは、住民で自立して実施して経費を節約することをお約束したのだった。

こうして98年3月、18号で最後の地域情報誌『FUSION見附ヶ丘』は、地域情報誌『FUSION長池』として新しく船出をすることになったのである。

インターネットのメーリングリスト「pompoco」

電子井戸端会議のスタート

NPOフュージョン長池が多くの方々から注目していただいている理由の一つに、インターネットを地域で使っているということがあるが、インターネットをやりたくなかった人の代表がわたしである。

しかし、やらなければ大好きな活動ができないので、しかたなしに始めたのも真実である。それから二年を待たずして、約8000本のメールが飛び交った。そのなかのメール本数ダントツ1位がこのわたしである。

NPOフュージョン長池の今日の隆盛を見るとき、このメーリングリスト「pompoco」くらい情報交換のための技術として貢献してくれたものはない。この“pompoco”技術こそが、忙しく仕事に追われているお父さんたち同士の時間の壁を見事に乗り越える手助けをしてくれたのである。

しかし、羽田野さんのいうコミュニティサーバという電子井戸端会議システムを活用する決心をしってから本格的に登場するまでには、今しばらく時間がかかったのだった。理由は、いろいろある。

わたしに情報技術に対する対応力がなかった。

わたしにとって、顔の見えない関係がこわかった。

ゆえに、わたしにメーリングリストの必要性は理解できても、実際に運用するとなると、「もめごと」がメール上で発生したらどうしよう、「何か聞かれてもインターネットそのものもよくわからないし、どうしよう」と結構わからないことに臆病な性格が出てくる。それに地域で万が一にもめごとを起こすと二度と立ち上がれなくなると思ったからでもある。そして、最初の「pompoco」登録者は絶対にメーリングリスト上でもめごとを起こさそうにない人をお誘いしていったのである。

こうして、1998年4月9日20時38分、ついに羽田野さんより pompoco 第一号メッセージがアップされた。以下、このメーリングリストを「ぼんぼこネット」と呼ぶことにしよう

ある事故だけがの功名

4月18日、ぼんぼこネットに「橋が開通」というタイトルの一通のメールが載った。この日やっと開通した、地域の歩道橋であるせせらぎ橋。この歩道橋の上には、長池公園からせせらぎ緑道を流れてきたせせらぎが通るといふめずらしい橋なのだ。

現在「FUSION探検隊」としてコラムを書き続けていただいているフリーライターの土生恵子さん

の子供さんが、このせせらぎの水を流す人工的につくった溝に、自転車ごと突っ込んだのである。そのことを知らせるメールであった。

わたしはとっさに「これは困った」と思い、公団の高橋さんと個人メールで相談をした。その結果、公団の方々が素早く土生さんのお宅を訪問してお詫びと安全柵を設けることを約束してくれた。

幸い土生さんの息子さんのけがも大したことがなかったので、土生さんがすぐに「公団の方々の素早い対応に大変に感謝」とぼんぼこネットにメッセージを発信してくださった。これがよかったのである。土生さんの子供さんはけがをするわ、公団バッシングは起こるわでは踏んだりけったりになるところであったが、公団の方々の素早い対応と、それを生み出した電子メールに感謝した。このことは、メーリングリストの効用と個人メールの使い道を教えられた重要な事件であった。

その後、このメーリングリストは、急発展していく。次に示す数字が、毎月メーリングリストに寄せられてきたメッセージ数である。1998年4月83本、5月279本、6月282本、7月300本、8月311本、9月366本。98年9月28日までに、メッセージ数1611本になった。予想を超えるぼんぼこネットの活性化に、サーバが耐えられなくなったために、バージョンアップをしていただいた。1998年9月28日

それ以降、毎月届くメールの数は予想を超え、五〇〇本を数えるメッセージがやりとりされているのである。99年8月に「FUSIONのある街に住みたかった」で有名になった田中純さんが通算4000号目を獲得したと思ったら、もう10月には、5000号のメッセージを数えていたのだった。

めでたく5000号目のメッセージを載せることができたのは、炭谷先生であった。

メーリングリストについて少々説明しておこう

わたしが何も知らないでスタートをしたので、ぼんぼこネットでは、「ネチケット(ネット上でのエチケット)」などの話は、最初何もなかった。もしかしたらこのことが幸いしたのか、うるさく使用方法を注意する方はいない。結果としてだれでも参加できて楽しむことのできるものになってきたと思う。その一面には、このネットが地域内であったので、ぼんぼこネットに参加される方々とは、かならずお会いするようにしたこともよかったのではないかとも思う。顔の見える間柄での「地域の電子井戸端会議システム」ができあがっていったのである。

そして井戸端会議にとって重要なことは、だれかがだれかの発言に「肯定的な合の手」を入れることである。

こうした地道な努力により、この地域に「優しいところのインフラ」ができあがったのである。この「ぼんぼこな優しいところ」こそが、地域活力の原点であるとわたしは信じている。そして、今日に至っては、地域外からも大勢の人がぼんぼこネットに参加してくださっているのである。

地域情報誌『FUSION長池』として再スタート(1998年5月、19号)

『FUSION見附ヶ丘』から『FUSION長池』に生まれ変わった地域情報誌は、引き続き年に4回のペースで発行されることになった。

1998年5月の新生19号の一面の写真には、田中純さん一家が映っている。

田中さんは、神奈川県相模原市からこの多摩ニュータウンに移ってきた。初めてここへ来たとき、

集合住宅が立ち並ぶだけの閑散とした印象で、生活の息づかいを感じなかったという京王堀之内駅前の「街づくり館」で手にしたパンフレットの数々。そのなかに『USION見附ヶ丘』があった。ここを生活の舞台と意識したことについて、「『USION』を見たから、かな。これがなかったらどんな街かわからへんかった」と奥さんの洋子さんはこの誌面で語っている。

今では、洋子さんはせいがの森保育園で子供たちの世話をしている、ご主人の純さんはNPOフューション長池の事務局では、郷土史勉強会をコラムにまとめたり、多摩丘陵の見学会などを率いている。その後、見附ヶ丘連絡協議会の事務局長を引き受けてくださったり、地域活動のいろんな場面で活躍している人なのだ。

PCレスキュー隊の誕生

ぼんぼこネットの上で飛び交うメールの数が増えていったのは、すでにご紹介したとおりである。まさに、井戸端会議。そのなかから、具体的になっていくアイデアの数々があった。

ここで誕生したのが、ぼんぼこパソコン倶楽部（通称PCレスキュー隊）である。ぼんぼこネットがスタートした直後から、PCレスキューの話題は出ていたが、あっという間にPCレスキュー隊の結成まで行ってしまった。この「ぼんぼこ仲間」は、せせらぎ北団地の神田修一さん、大和田さん、田村裕之さん、甘利英敏さんらであった。

「みんなが困ったときに、だれか手の開いている人がレスキューすればいい」が結成の理由である。さらに、気のいい大和田さんは、パソコンには自信がないと言いながら、PCレスキュー隊長を引き受けてしまった。

PCレスキュー隊は、1998年7月12日に『はじめてのパソコンとインターネット』という催しを街づくり館で開いた。そこでは、長池の街づくりとインターネット、ぼんぼこネットの説明が行われ、PCレスキュー隊が紹介された。これにも約30人の人が参加し、説明のあとは相談会も行われたのである。

PCレスキュー隊の活躍はめざましく、日頃は会社勤めなど仕事をもつお父さんたちが、週末になると地域の保育園や小学校で、自前の教科書を作成して地域の人たちや先生たちにわかりやすく教えたり、インターネットについて説明したりと大活躍するようになったのである。あるときは、あるお宅の自宅内LANまで構築したり、かなり本格的なのだ。今も続くこの活動は、最近では新聞記事にも取り上げられた。

せせらぎ北団地の理事とコミュニティ委員を務められた甘利さんは、技術に強い方のようだ。PCレスキュー隊で活躍しているが、ぼんぼこネットに参加してくる人たちの登録の手続きを引き受けてくださっている。ぼんぼこネットは今や、300名を数える参加者をかかえる大所帯となった。

人間は自分の興味のあるテーマに出会うと、突然活性化してボランティアを楽しみはじめるということを、このPCレスキュー隊の活躍は物語っている。あるべき論をいうよりも「浴衣がけの気分」で、負担にならない程度に楽しむことを、すべてを肯定的に許容していったら盛り上がることは間違いないということをわたしは確信していた。

物好きをやりたい人々が勝手に手弁当でやっている。そして人は、やりはじめると結局、最後は

責任感をもってやり遂げるもののようである。ここは「自由に自立した人々が創る街」である。

ぼんぼこネットから生まれた出来事

ぼんぼこネットは、井戸端会議ならではの話題とともに、驚くべき速さで情報が伝わる電子掲示板、回覧板の役目も果たしているのだった。ここに実例を紹介しておこう

牧場のおっさんの歴史講座とニ牧場

ぼんぼこネットに登場する牧場のおっさんのメッセージを、みんなが楽しみにしている。この地域には歴史があることを、おっさんはたくさん教えてくれた。長池伝説のこと、小泉屋敷のこと、新撰組と保井寺(ほうせいじ)と、斎藤一諾斎のことなど、多摩丘陵の悠久の歴史を実感させてくれた人である。

「多摩乳タウンの話」と「ブランド名「牧場のおっさん」の話。この多摩地域は、ニュータウン計画が始まる前までは、多摩地域の酪農の中心であったそうだ。ところがニュータウン開発の過程で多くが廃業したり転居していったそうである。でも、今でも、牧場のおっさんは酪農を続けている。

新しく移り住んできた人々と古くから暮らしてきた人々とのFUSION(融合)のシンボル、それが「牧場のおっさん」ブランドの牛乳やヨーグルトであつたらいいと思う

また、おっさんは、子牛の誕生をデジカメで撮影して、おっさんのホームページに紹介してくれる。生き物を相手にしている生活を見せてくれる。「梅が咲いたよ」「福寿草の花が開いてるよ」と自分たちのすぐそばにある命の存在を教えてくれる。

そうしているうちに、おっさんは子牛を連れて見附橋のそばの空き地に出てくるといいはじめる。おっさんが大和田さんたちの協力を得て、ぼんぼこ牧場を実施した。ただ、牛が3頭いるだけなのに、次から次へと見学者が訪れて、みんな喜んでいて。

スポーツ大会

小久保佳昭さんは、スポーツが大好きだ。「『FUSION長池』の体力づくりの記事が少々間違っているよ!」と大変に優しく指摘して下さった方である。そうしたら縁は異なるもので連続してお会いした。京王新線の新宿駅で隣に立っていた酔っ払いの変なおじさんが小久保さんであった。

最初、神田さんがやりたかったスポーツ大会を、小久保さんが実現してくれた。これもいいことだ。言い出した人がたとえできなくても、だれも文句を言わない。それだけじゃなくて、できる人、やりたいい人がかわって実現すればいい。

小久保実行委員長のもと、第1回スポーツ大会を開催した。二チームできればといていたら、一〇チームもできてしまうほどの人気で、参加者は100人を超えていた。

ネオテニス、おじさんサッカー、野球大会……小久保さんは今や、地域のスポーツイベントには欠かせない存在となっている。

また、最近では、週に一度の「健康情報」をメールリストに発信していただき、役に立つ情報にみんなが感謝している。

台風で祭りが中止に

さて、見附ヶ丘地域のみ地域情報誌『FUSION見附ヶ丘』を長池地域に拡大したことで、祭りについても「見附ヶ丘フェスティバル」から「長池公園フェスティバル」へ変更しようか、それとも「長池フェスティバル」へ変更しようかと悩んでいたある日、京王線の電車の中で居眠りしていて突然、「長池ぼんぼご祭り」という名を思いついた。

1998年8月の本番は「第3回長池ぼんぼご祭り」を正式名称に採用。これはやはりアニメ「平成狸合戦ぽんぽこ」へのこだわりであった。もしかしたらたぬきがわたしに乗り移ったのか、それともわたしがたぬきだったのか。

その後、少々不安な気分で見附ヶ丘連絡協議会のメンバーに相談したところ、思わず楽しくなるこの名前にみんなは大賛成してくれた。「ぼんぽこ」と書いても「pompoco」と書いても、文字まで丸くて円満なこの名前が大好きである。

ところが、8月30日、台風のため第3回長池ぼんぼご祭りは中止になった。

自宅の窓から外を見ていると、せせらぎの水があふれそうになっている。朝七時ごろから各団地の責任者が、せせらぎ北団地の集会所に集合して祭りを実施するかどうかを協議した。二転三転したがやむなく中止を決断し、メールに配信した。

食べ物を手配している団地は困るので、各団地内で料理することにしてもらった。そのうえで各団地にハンドマイクで呼びかけて回った。地域はやっぱ最後はアナログが強く、食材はみんなのお昼ごはんとなって完売したという

ぼんぼご鉄道倶楽部

公団の高橋さんから、街づくり館の裏庭にある本物の丸の内線の車両をなんとか有効利用できないかと相談された。そこで、ぼんぼごネットでみんなに尋ねてみると、ナ由木坂の赤羽誠さんを筆頭に、いるわいるわ、今も鉄道が大好きなお父さんたちがたくさん出てきて、その後定期的に車内の清掃で手入れをしたり、倶楽部活動が始まってしまったのである。

赤羽さんは、都心にお勤めの技術系の会社員で、住んでいる団地のホームページを手がけたりするのもお手のもの。地域での活動を存分に楽しんでいるお父さんのひとりである。

あるとき、このお父さんたちの多くがなぜか昭和31年生まれということに気がついた。そのときから31(サーティーワン)クラブ、というのができてしまったようである。地域のつながりで出会った、気の合う同世代のお父さんたちのつきあいもいいものだ。

長池公園の里山活動

1998年7月の地域情報誌『FUSION長池』20号では、「長池公園の里山で田植え、国際色豊かに小学生らが挑戦！」という記事が一面を飾った。春のポレポレ「長池公園に行こう」のイベントのときは、約30人の参加であった人数が、今回の「田植え」では、なんと約150人に増えたのである。

国際事業団の研修生として、南米などからの6人も参加してくれたのはこのときである。

公団が主催している長池公園の里山活動。

今や里山ネーチャンと自称する公団の高橋さんは、ROM (リード・オンリー・メンバー) から目覚めて、ぼんぼこネットに里山オッチャンクラブ通信を発信しはじめた。

当初は、職務上の立場もあったので、一切登場しないことを条件にぼんぼこネットへ参加していただいていたが、あまりにも楽しいやりとりで、ついに我慢できなくなって飛び出して来た。里山オッチャンクラブ通信では、公団の主催する「長池里山クラブ」の活動の紹介が始まった。

9月の地域情報誌『FUSION長池』の情報交換会に、立石浩一さんが登場する。最初の立石さんの印象は、ぼんぼこネットで自称の「たあねこ」さんよろしく、大変におとなしい無口な方であった。

しかし、これは後に単なる借りてきた猫を決め込んでいただけだったことが判明する。長池公園の里山活動を通じて大活躍することになるのである。今や、長池里山クラブのリーダー的存在なのである。

さて、98年12月、里山ネーチャン高橋さんから、この月をもってポレポレフェスタは休止するという連絡が入った。残念だ。休止ということは、実質的には終了である。しかし、翌1月にはポレポレフェスタがなくなっても、長池公園の里山活動は続けますという案内をしてくれた。

1月の長池公園の里山活動は、南大沢の淡路圭介連合町会長の指導で、炭焼きを行った。日常化するFUSIONの活動

みんなが喜んで記事を書いては、インターネットで原稿を入稿してくるようになった。しかし、肝心なフラッシュに入稿するときは、原稿をすべてプリントアウトして写真をつけて持参していた。

おまけに信じられないことであるが、毎回字数のことも写真の大きさのこともまったく気にしないで、ただ記事と写真をクリアホルダーに入れて入稿して、「あとではよろしくー！」というフラッシュの優秀な方々がなんとか誌面にしてくださっていた。それでまくいていたのだから不思議だ。

また、常に協力していただいているみなさんには、しんどくなったら発行中止と言いつつ、意地を張って継続している。せせらぎ北団地の山本さんから「広告を載せない地域情報誌があってもいいじゃないの、この目線を下げない意地が張り通せたらNPOフュージョン長池は、大化けするかもしれないよ」と変な激励を受けたのもこの頃。こんなときに思いついた言葉が「やせがまんの効用」であった。

一方、第3回長池ぼんぼこ祭りは、台風の影響で全体的には中止になってしまったが、そもそもお祭りという特殊性は、一日のことで、夢から覚めるように終わるものである。

この特殊性を日常性に置き換えることは無謀な試みだろうか。特殊なイベントを実施することも重要な価値を示すが、日常的に何ができるかのほうがはるかに大切ではないか。

ということは、一年間は52週あるから、自立した約50人が1日ずつイベント・コーディネーターをすれば、毎週末になんらかのイベントが日常的に行われていることになるのではないかと考えはじめたのである。

第4章 ぼんぼこな“こころ”に法人格をもたせよう

～ NPOフュージョン長池の設立に向けて

月1回の長池公園の里山活動。田の草刈りに初夏の休日の時間が流れていく。

コミュニティ・ビジネスを研究する人たちとの出会い

1997年の11月に、繭ドームで多摩ニュータウン30周年記念事業のシンポジウムがあった。

平日だったので会社に休暇届を出してでかけた。四人のパネラーたちが、これからの時代の市民生活のあり方について話をされたが、終了後、わたしは当時長銀総研におられた新川雅之さんと名刺交換してもらったため、一直線に壇上に近づいていった。新川さんは大変に爽やかに応じてくださった。

そのときの講演内容は、スマートバレー公社とスマートバレージャパンについての説明であった。一番印象に残ったのがこれからの時代は、コミュニティに基盤をもった産業が発展するという話であった。それまでの自分にとっては、コミュニティはコミュニティで、ビジネスはビジネスであった。ところが有名なシリコンバレーの成功の背景にはコミュニティがあったからだという

こんな話は聞いたことがない。しかし、シリコンバレーでは、旧来の経済構造によらないで、土着の人的資源とコミュニティ活動が結びついて、世界企業を生み出すパワーを花開かせていっているのだ。

その後、新川さんとは、お昼休みの前になるとよく突然電話を入れ、「食事をしましょう」と誘っては、割り勘で、これからの時代のコミュニティとビジネスの関係を教えていただくことになった。

そこで話に出てくるのがスマートバレージャパン(SVJ)である。

新川さんはその実行委員をしておられて、SVJの代表は、伊東正明さんという方だという。わたしは、伊東さんを紹介してもらえよう。新川さんをお願いした。そうしたら新川さんは、インターネットのメール機能を使用して、伊東さんとの約束を取ってくださった。

このとき新川さんは、わたしの能力に応じてインターネットメールを配信したうえに、さらに同じ文面をFAXしてくださったのである。わたしもその頃はインターネットが使用できるようになっていたものの、現実はこの程度であった。

ともあれ、伊東さんにお会いすることができた。なんと目が綺麗で、穏やかな人だろうという第一印象であった。この人物が語る、“スマートバレーの成功物語”は、コミュニティをベースにした新しい時代がやってくるというもので、わたしの人生に大きく影響を与える一つの事件であった。

伊東さんも会社を辞めて夢に人生をかけている様子。やっぱり人生が変わりそうだと直感したのだ。

その頃、多摩大学のコミュニティ・ビジネス勉強会に参加したことが縁で、ヒューマンリネッサンス研究所の主任研究員の細内信孝さんにお会いした。気になると名刺交換をさせていただいて、その後かならず電話をかけて伺ってはお会いするのがわたしの常である。このときもそうであった。

細内さんは、その頃、ちょうど「墨田リバーサイドネットワーク(SRN)」の立ち上げに奔走されていた。わたしが「SRN」オープニングの日の訪問者になったということは、ここまでのわたしの単純明快な行動パターンから容易に想像できたことと思う

居酒屋を何軒か経営されている実業家、そのうえ、墨田の産業活性化を考えて活動している利他的精神あふれる人。それが、墨田リバーサイドネットワーク(SRN)の代表の竹村行正さんであった。

細内さんが理論家なら、竹村さんは実践家である。わたしも実践家なので意気投合。墨田に竹村さんをお訪ねしたとき、一緒に街を歩いていたら、すれ違った人が竹村さんに会釈をしていった。なんでもないことのようにだが、挨拶ができる知り合いとすれ違えるような墨田の街に、憧れをもったものだ。

いつの日か「墨田のカップと多摩のためき」の連携が起こることを夢見ている。

竹村さんは、この後、ぼんぼこネットに墨田川のカップさんとして登場してくださるようになった。NPOを意識しはじめ

NPOというのが、この頃からなんとなく頭に浮かんでいた。とにかく一度浮かんだら頭から離れない。

この地域での活動を、「NPOという組織」で取り組むことで、住民たちの役に立つことができないか。コミュニティ・ビジネスを生み出すパワーがこの街にはあるかもしれない。しかし、どうしたらそんなことが実現できるのだろうか。

新川さんをお願いしてNPOの説明会を開いていただいたりしながら、これからの地域社会のあり方と、ぼんぼこネットをめぐる活動と、NPO、コミュニティ・ビジネスのことをずっと考えていた1998年の夏だった。

世の中の動きは、この年の3月にNPO法が国会を通過。12月1日より法人化のための認証を開始するという

4月、新川さんは「TAM A産業活性化協議会」を設立させて、八王子商工会議所の中に事務所を構えることに成功し、日本のシリコンバレーをTAM AIにつくることを目指しはじめた。具体的だ。長池の活動も、このままにしていれば「ぼんぼこなこころ」「地域の優しいこころのインフラ」なんていったって、終わってしまうのではないだろうか？ もし、終わってしまうようなことになったら、ここまで協力して下さっているみなさんに申し訳がないし、責任のない楽しいボランティア活動がそんなに長続きするとも思えないし……。

悩んでいたある日、すばらしい考えを思いついた。このぼんぼこな人々の贈り物である、ぼんぼこなこころを結集すれば、これはマンガ「ドラゴンボールZ」で悟空が使う立派な「元気玉(元気多摩?)」になるかもしれない。そして、地域貢献型(地域の問題解決型)事業活動ができるのではないかと、そうすれば、この多摩ニュータウンのすばらしい人材群が大化けして、地域活力たっぷりの多摩ニュータウン型先端事業、つまり環境共生型事業ができるようになるのではないかと、という着想であった。

この着想を胸に、新川さん、炭谷先生、藤森先生、伊東さん、細内さん等さまざまな方々と話し合った。そしたら、みんなが異口同音に“二一世紀はコミュニティ・ビジネスの時代”だといって大賛成してくれた。

なるほど、この“ぼんぼこな人々”が生み出す“ぼんぼこなところ”を具体化すればいいのだ。いまでもみんなのコンセンサスの塊（元氣玉）のような各種のイベントができています。要するに、もう一歩踏み込んでNPOを創設して、このぼんぼこなところに法人格をもたせて、コンセンサス（地域貢献型事業）を生み出せばいいのかもしれない気がついた。

いや、結局相談した方々に教えていただいた。わたしがわかっていなかっただけだった。

そうだ！ これからは、『FUSION長池』の長池は、地域名称の長池ではなく、公園になる場所に古くから存在していた池の“長池”にしよう。そして、この長池里山活動をシンボルにしていこう。

もしできるなら長池公園の管理・運営をNPOに任せてもらえるように頑張ってみよう。この場合、任意団体の『FUSION長池』では八王子市も対応が困難であろうが、特定非営利活動法人NPOフュージョン長池なら提携しやすいに違いない。これなら地域の方々にとっても、NPOを創設する意味があるであろう。

化けに化けるぼんぼこネット

ぼんぼこネットが、あまりにもお父さんたちの発言ばかりなので、女性だけのメーリングリストをつくってはどうかという声があって、ぼんぼこレディーズを提案したが無視されてしまった。

しかしどうやらお母さんたちも、パソコンを覗き込んでお父さんたちの電子井戸端会議を楽しんでいるようである。もちろん、お母さん自身のメールアドレスで登場している人もいるが、今はまだ、一家に一台のパソコンに、一つのメールアドレスというのが多いのだろうか。

携帯電話も一人一台持つご時世だし、この世は老若男女みんなが暮らしているのだから、最初はお父さんたちが中心になってつくり上げたぼんぼこメールに、徐々にみんな参加して世代や性別を超えて輪が広がってくれればいいと願う。

あるとき、中央大学総合政策研究科の社会人大学院生の中庭光彦さんが、細野先生の紹介で訪ねてこられ、ぼんぼこネットを分析して、なぜこんなに盛り上がる活動ができるのかを学術的に解明して修士論文にしたいといわれた。その後、1999年11月には中間のまとめが完成したということで、事務局会議にお招きして、中身をいち早く披露していただいた。

その論文「都市における集積を規定する社会関係資本～都市居住者の社会的ネットワークの実証分析」のなかで、多摩ニュータウンに見る社会ネットワークとしての集積の事例として、ぼんぼこの活動を取り上げていただいたのである。気がついてみたら、99年8月現在で約二六〇人の人たちがメーリングリストに登録するほど、ぼんぼこの電子井戸端会議は広がっていたのだ。

中庭さんは、このやりとを徹底的に分析され、このネットワークとわたしがひたすら実践してきたことを、見事にまとめていかれたのである。

メーリングリストの効用として、すべてのやりとをメンバーがすべて見ているから、単なるメールの

やりとりではないということ。メッセージを見るだけで、メンバーはそこで起こっていることを多層的に見ることになる。そこには、ネットワークの中心者によるオペレーションがあったなど、自分たちがやってきたことはこんなふうには分析できるのだと、事務局のメンバーはしきりに感心していた。わたしにとっては、一生懸命考えながら丁寧に丁寧にやってきたネットワークだが、こんな構造になっていたのか、とあらためてその意義を思い知らされることになった一件であった。

ぼんぼこネットで交わされる話題を眺めていると、若い街はいいなと思う。子供たちの話題で一杯だ。しかし、この町も「じじいばばクラブ」の時代がすぐに来ることを、忘れてはならない。じつと将来を見据えて、浮かれだめきになることなく冷静に冷静に。自分自身への警鐘だ。

だんだん、ぼんぼこネットに暮らしの雰囲気が出てくるようになった。みんながこの街をふるさとにしようとはし始めている。いや、子供たちにとっては、ここがふるさとなのだ。

一方、ものすごいスピードでコミュニティ活動の広がりど深まりが生まれている。

メーリングリストの使用前とあとでは、10倍ぐらいのスピードの差がある。1か月で過去の1年分ぐらいの会話が進んでいる。

この勢いがあればNPOもやれるかもしれない。NPOを創設する決意ではあっても、果たしてこんな難しいことを自分自身で耐えられるのだろうか。ぼんぼこの方々もどこまで応援して下さるのだろうか。みんな個人の生活をかかえているのだから、できることに限界があるのは当たり前だし……。

でも、結局、自分次第かもしれない。世の中を相手にコンセンサスを取りまとめていくようなもので、難しいのは自明のことだ。

NPOの設立準備を始める

1998年10月、いよいよNPOの設立の腹を決めたわたしは、設立準備委員会を始動させはじめた。たとえば格好がいいが、実質は協力を申し出てくれたラケーン多摩の勝田恵子さんとわたしの二人だけだった。

そこに生きる人たちが必要とするサービスを提供する応援団。それをNPOとして取り組む決意である。これは、今に大化けするかもしれない。

しかし、いきなりこの考えにみんなのコンセンサスを求めることは、混乱をきたすことになるだけである。たぬきのホラ話と思ってだれも支持してくれはしないだろう。

会社から半休をもらい、東京都生活文化局のNPO設立の手続き説明会に参加した。大変だなNPOは、というのが率直なところであった。

一〇人以上の発起人がいて公益に寄与することが明確であれば、設立することはできるが、そのあとの運営ができるのだろうか。ちょっとしたボランティアを続けるだけであれば、任意団体のままが気楽でいいなと思った。

果たしてやれるのだろうか。よほどの決意と行動力と、なんといっても周りの協力がなければ無理な話だった。

この年の暮れに、里山活動などを評価してくれるらしいという99年度の日本財団のボランティア

資金に応募してみた。多くの方々が、大変な好意で応募用紙を持ってきてくださるのであるが、自分のほうの力不足で応募する時間や対応能力がないのが、大変に申し訳なくもあり 残念だった。

多くのボランティア団体が資金を稼ぎ出すために対応することが難しいのも実情ではないだろうか？

99年1月に入って、東京都の発行しているマニュアルに基づいて、NPOの定款の作成を始めた。よくわからない部分の多い法律である。特定非営利活動にかかる事業と収益事業の分け方がわからないし、会計のやり方も不明瞭である。これは弁護士さんも必要だし、税理士さんも必要そうである。苦勞するぞ、これは！

わたしの苦惱をよそに、ぼんぼこネットではお正月らしいメールが飛び交っている。

でも、このことが大変にわたしに勇気と希望を与え続けてくれていた。これがなかったら、とてもNPO設立準備のプレッシャーに耐えられなかったかもしれない。このぼんぼこな人々と一緒にふるさとをつくりたいという思いがわたしの支えだった。

1月26日に都庁を訪問して、NPO法人申請書を持参して事前説明を受けた。大和田さん、細野先生、小久保さん、勝田さんとわたしで訪問した。

生活文化局の方は、「とにかく何もいけませんのでマニュアルを参考にして書類を提出していただけばいいです」という「そんなもんかな、自由といわれてもなあ」と逆に困惑する。そういふうにいわれるとNPOを目指しても、定款すら作成できない人たちが出てくる気がした。

ともあれ、いただいた作成のマニュアルに則って、自分で定款を作成してみた。わたしは新しいことを実施するときには、最初の仕事はすべて自分で手がける主義である。でなければ他の人にいかたちで仕事を頼めない。

この本の執筆と同じで、自分でやってみて、NPOは設立するのは簡単であるが、経営することが大変であることがよくわかった。ある種の公益法人であるために、徹底した情報公開が義務づけられている。これは素人では経営できない。それに事業活動とボランティア活動の区別がつかない。会計処理をどうしたらいいのだろうか？ 知っている人に聞くしかない。手だてはなかった。

そこで、糠谷眞平さんが登場する。

長池にお住まいで98年6月に国家公務員を退官された方である。NPOの国の所轄は、ご出身の経済企画庁。NPOについてご教授いただくため、赤羽さんの紹介で訪問したら、NPO法についての説明資料を入手して待っておられた。NPOについてはとにかく新しい法律のために解釈が難しく、やはり事業活動とボランティア活動の区別が難しいらしい。とにかく具体的に資料を作成して東京都に提出するしかない、ということだ。糠谷さんには後日電話をして、理事を引き受けていただいた。

理事の就任

特定非営利活動法人NPOフュージョン長池の設立にあたって、わたしの思いとその趣旨を説明

して、次のような方々に理事をお引き受けいただくことになった。

・炭谷晃男さん（大妻女子大学・社会情報学部助教授）、地域内居住者でもあり、多摩ニュータウン学会の事務局をどまどめておられる。

・新川雅之さん（TAM A産業活性化協議会）、やはり NPOの先生は新川さんである。新川さんは、当時新会社設立のために奔走されていた。

・山本勇さん（住宅問題のプロ）、せせらぎ北団地の住宅問題の責任者。NPOフュージョン長池でも住宅問題を担当していただくために理事をお願いした。

・山本さんの紹介の大司敏朗さん（地元縁故をもつ方）

ある晩、夜 10 時頃、山本さんより電話があつて、今、京王堀之内駅前のカラオケにいるという。そして、どうしても今から来るように言われて出かけていったら、そこに大司さんがおられた。そのときは名刺交換程度であったが、翌日の朝 9 時にお電話をして理事をお願いした。その早すぎる展開に驚かれていたが、最終的には了解していただいた。長くこの地で暮らしてこられた方々との連携も望む考えから、その橋渡しをお願いしたかったのである。

・宮山雅行さん。もう 10 年を超えるおつきあいをさせていただいている弁護士さんで、何でも相談できる方である。

・鈴木義人さん。後々かならず会計処理で疲ひ弊へいするとの思いから、地域にお住まいの税理士の方を電話帳から発見して電話をかけたら、なんとすくに来宅して下さって、話をしていくうちに了承して下さった。

・細野助博さん（中央大学総合政策学部教授）、細野先生へは、失礼と思ったが電話でお願いした。わたしに頼まれるとダメと言えない」と言って下さった。

・サム・ステフェンセンさん（当時、東京大学の講師）、国際担当を考えていた。みんなでレストランでディナーパーティを開いたとき、デンマーク人のサムさんを一面識もないのに当日の朝電話して誘って連れていったら、みんなにあきれられてしまったことがある。サムさんとはなぜか気が合うのでぜひに、と理事をお願いしたのだ。

・布川千春さん（セルフフィッシュネス社長）、南大沢で地域の広告代理店を経営しておられ、布川さんを紹介してくれる人がいた。女性代表としてその初対面で理事をお願いした。

・藤森平司さん（せいがの森保育園 園長）に副理事長を依頼。藤森さんには、理事をお願いすることは決めていたが、なかなか副理事長を受けてくださらない。ほかにどうしても受ける人がいないならといわれるので、最後にして、やっぱりほかにはいませんでしたと報告して、やっと副理事長を引き受けていただいた。

・監事に、阿部一雅さん（コンサルタント会社社長）、しかし、横浜の方なので地元で代りが見つかるまでという条件つきであった。

以上、わたしと糠谷さんを含む理事 12 名、監事 1 名をお願いしたことを糠谷さんにご報告したら、良い布陣ですねと誉めていただいた。

理事を拡充したほうがいいですよと、事前に糠谷さんのアドバイスがなかったら、理事は 4~5 人

ぐらいで運営するつもりであったのである。

しかし、これだけの困難なことをしようとするのに、受け皿が小さいと苦労するというアドバイスなのだ、と理解して必死で頑張ってみた。そう思って行動したら、人間初対面であろうと純粋に直球を投げると、そう簡単に避けられないことがよくわかったのと、時代の最先端を捉えている方々には、NPOの必要性が見えているのだということがわかった。

説得ではなくて、単なるお願いと説明に伺ったのである。ゆえに、相手の方々の理解力の高さのうえに甘えさせていただいたのだということがよくわかった。これだけの方々がNPOを求めている。そして、わたしたちがやっていることを評価してくださっている。

また、しばらくの間はわたしが事務局長を兼務したほうがいいというアドバイスもあったので、大和田さんには丁寧に相談したうえで、事務局長代理を引き受けていただいた。

大和田さんは、大変に貴重な方である。わたしは行動力としゃべることを得意としているが、大和田さんは非常に緻密で慎重な方である。だから、大和田さんがいてくださることが多くの方々ととつての安心感になると判断してのお願いであった。これは今でも大正解であったと思っている。

同じ頃、住民の多くが楽しみはじめている長池公園里山活動を、いつかNPOとして、もっと応援できる態勢をつくるためにと考えて、ノナ由木坂の諸橋貞夫さんにぼんぼこ里山倶楽部の隊長をお願いしたら、喜んで引き受けてくださった。

さようなら、地域情報誌『FUSION長池』

寂しい、実に寂しい。1995年4月に住都公団の協力で、地域情報誌『FUSION長池』『FUSION長池見附ヶ丘』が創刊されて、最初は100部の発行だったそうだ。フラッシュが配っていたので詳しくは知らない。

公団の予算では、2年間で終わる予定が、住民が深く関与することでもう一年続き、三年で終わるかと思ったら、フラッシュの鈴木さんのご好意で四年目に突入し、そのときに地域情報誌『FUSION長池』となって、ついに発行6000部に育ったのである。

98年4月からは、すべて住民だけで原稿書きと配布を行っていた。そして今、最後の『FUSION長池』23号は、7000部を印刷した。そして、約50人のぼんぼこな人々が喜んで配布してくれた。

でも、終わってしまった。

本当に、『NPO FUSION長池 ぼんぼこかわら版』は発行できるだろうか？ いや何が何でも発行しなければならない、これだけ多くの方々に喜んでいただいている『FUSION長池』をこのまま終わらせるわけにはいかない。

そこで、考えた末、次からの編集をポレポレフェスタの手書きのイベント通信『ポレポレ』をつくっておられた早乙女さんをお願いできないかと相談してみた。そうしたら、大変に気持ちよく快諾していただいた。

お金にならない仕事なのに協力してくださるみなさんの期待に応えられるような、住民のための活動組織NPOフュージョン長池にしなくてはならないと、さらに身も心も引き締まる思いだった。

早乙女さんと話し合うなかで、これからはホームページを主にして情報誌を従にすることと、雰囲

気を少々柔らかく変化させるためにも、「NPO FUSION長池 ぼんぼこかわら版」という標題にすることを提案したら、賛成してくださった。

ぼんぼこホームページの誕生とコラムマスターたち

NPOフュージョン長池のスタートにあたって、以前からお世話になっていた南大沢の岡村隆さんに新しいホームページの制作をお願いしたら、これも気持ちよく引き受けてくださった。岡村さんは、有名な「えきすぱーと」というデータベースソフトを開発した会社の広報室長をされている。1999年4月にスタートできればいいので無理をしないでやっていただくようお願いした。

そして、できあがったホームページを見て、岡村さんをお願いして本当に良かったと思った。ホームページのなかのイラストは、デザイナーの早乙女さんが描いてくれた。

自分の周りには、優れた才能をもった人たちがいる。こんなに質の高いホームページがもてるなんて。そのときに感じたことは、確かに活動のための資金は必要であるが、お金を支払っても得られないものもあるということだった。

そうだ！ このホームページのコラムでいこう！ この各コラム（活動）を支える人をコラムマスターと呼ぼう。それがNPOフュージョン長池の事務局のメンバーだ！ このアイデアはわれながらなかなかではないか。しかしみんなに相談したら、「いいですよ」のひと言で終わってしまった。もつこし感動したり誉めたりしてほしかったのにな、と思う。だが、一方で、みんなにとってもこれらの活動が当たり前になっていることが、あらためてわかったのだった。

そして、なんとこのぼんぼこWEBは、この年の6月、郵政省の主催した「ゆゆうインターネットフォーラム」の「我家のインターネット活用大作戦」で、「いきいきコミュニティで賞」を受賞したのである。受賞理由は、「地域に大家族が帰ってきた」であった。

6月20日に逡信会館で行われた授賞式には、岡村さんと二人で臨んだ。しかし、受賞したというのに、表彰状も何もなかった。賞を取った喜びはさることながら、これには少々がっかりしているところへ、早乙女さんが表彰盾を作成して持ってきてくれた。岡村さんは泣きそうになって喜んだ。早乙女さんの心遣いに、わたしもまた胸が熱くなったのだった。

第5章 ボランティアとビジネスのはざままで

～ 認証手続きと事業活動の模索

お父さんたちの PC レスキュー活動。長池小学校コンピュータールームで、小学校の先生方に Eメールの送受信のしかたやインターネットの検索について講義している。

地域へ帰ろう

たぬきのひとごと

今まで1週間7日のうちの2日までを上限に、人間からたぬきに戻って楽しんでいたのに、少々ぼんぼこぼんぼこやりすぎて、ぼんぼこNPOの木の上に登ってしまったようだ。どうも、ここまで来ると思い切って“人間に化ける”ことをやめにして、“たぬきに戻った”ほうがよさそうだ。でも、いきなり“人間”をやめて“たぬき”に戻ると、近くのぼんぼこな人々もビックリして相手にしてくれなくなるかもしれない。それに餌はどうしよう？ 長い間人間をやっているうちに、餌のと方も忘れていて、飢え死にしないか不安だなあ……

拡大理事会と家族会議

99年4月3日、せいがの森保育園には理事候補および事務局候補の方々が参集した。議事はいたって簡単である。

- 一、4月17日にNPOフュージョン長池の設立総会を実施することを承認。
- 一、初代理事長兼事務局長に富永を内定。理事、監事、事務局員も提案されて内定。
- 一、定款も提示され原案どおり内定。しかし、どうも収益事業と非収益事業の考え方に疑問が残るが、認証機関である東京都の意見を聞くことで決着。

当代一流の方々がNPOフュージョン長池の設立総会の内容を決めるために集まってくださったのである。このボランティア活動はあっても、事業活動は何も実態がなくて、先がどうなるかわからないNPOに期待をかけてくださっている方々が、25名も参集してくださったことに胸がいっぱいになったわたしは、はからずも議事の説明の途中で泣いてしまった。

その同じ4月3日、帰宅して、家族会議を開催した。

今日拡大理事会をやって、お父さんはNPOの理事長兼事務局長になっちゃった。それで、会社続けられそうにないので辞表を出そうと思う」

「もうあきらめていましたよ。でも、生活できるようにお願いします」

「お父さんは陽子に好きなことをさせてくれたのだから、お父さんも自分の好きなことをすれば！」

「いいんじゃないの。よくわからないけど好きなことをすればいいよ！」

「お金がなくなって、みんなして働かなければいけないかもしれないよ」

「まあしょうがないでしょ。乳飲み子をかかえているのではないのだから、なんとかなるでしょ。それ

に世の中のためになることをしようとしているのだから」

「すみませんね。一生懸命、歴史的なホラ吹きにならないように頑張るよ！」

藤森先生との話

4月4日、藤森先生の自宅に電話をかけた。最後の決断を伝えるためである。藤森先生にだけは聞いてほしかった。そうしたら奥さまから、日曜日にもかかわらず保育園に行かれたとかがあった。しばらくしたら電話があった。

「富永さん、どうしました。もうすぐ保育園ですよ」

携帯電話からであった。

「お休みのところ申し訳ありませんが、おじゃましてもいいですか？」

「いいですよ！今日は日曜日だから原稿でも書こうと思ったんですがね」

「今から行きます」

藤森先生とは、初めてお会いしてからまだ2年にもならない。でも、ものすごく膨大な時間を費やして話し合ってきたように思う。わたしは保育園で保育していただいていたようなものだ。それにいつもここをたまり場にしてきた。

「園長先生、明日、会社に辞表を出すことにします」

「やっぱりそうですか」

「サラリーマンをいくら続けても60歳までですよ。今こんなにすばらしいぼんぼこな方々と、大応援団に恵まれて私は幸せです。今しかないでしょう。決断のときは、会社を辞めたバカなやつと思われることも、すべて追い風にする気でやりますよ。いつの時代も無謀なやつが出てこなければ世の中変わりませんからね。わたしは一人一人の庶民が主役になれる環境をつくりたいんですよ」

「何もなくていきなりではないですからね。大丈夫でしょう。それに、富永さんはどうも待っているタイプじゃないですからね。NPOで保育園をやらしましょう。応援しますよ！」

と書いていただいた。これで決心がついた。

これまでの活動を継続させるためには、NPOという組織を法人化することが一番ふさわしいように思われる。しかし、これまでに時代の最先端を行っている人々の意見を聞いていろいろ考えてみたが、NPO法人を経営するのは、普通に会社を経営する以上に難しそうだ。

会社であれば限定された事業目的に対して、利益を追求していくことになる。しかし、NPOは、利益を追求することを目的せず、人々の必要とするサポートを提供していくものだ。それには、ボランティアマインドを欠かすことができないのと同時に、自立して必要な経費を生み出していくパワーも必要だ。

なんとしてもここまで育った「ぼんぼこな活動」を終わらせたくない。そして、これが成功すると革命が起きるほど、世の中が変わるかもしれないという気もしてきた。今、そのゾクゾクするような恐怖心と期待の中から、わたしの「巨大な好奇心と正義感」があふれ出ようとしている。

NPOフュージョン長池設立総会

1999年4月17日、長池小学校の家庭科教室でNPOフュージョン長池の設立総会が開催された。

長池小学校の中村保一校長先生から、設立総会は、ぜひともうちの小学校で実施してほしいと以前から頼まれていたのである。さらに「歴史に名前が残るようになる」とも言っていた。

議長は、大和田さんで、てきぱきと議事進行していただいて議事の内容はすべて原案どおり承認された。約50人の方々が、年会費3000円を持参して参加していただき、熱気に包まれた総会であった。

その日の午後は、法人格の取得を目指すNPOフュージョン長池の第1回事務局会議を行った。そこでは、今後の事務局会議は、毎月第三土曜日の午前10時から12時に、せいがの森保育園で実施することを確認した。

さて、4月5日に会社に辞表を出したが、簡単には辞めさせてもらえない。人事異動の都合から6月30日まで出勤することになった。そこで、残りの日々は半分会社に、半分年休をいただいてNPO活動をすることにした。

これも辛かった。営業部門なので顧客からは「最近休んでばかりじゃないか」と言われるし、同僚にも負荷がかかっているようだし、一方でNPOの認証の準備やNPO法人の事業活動のことを明確にしなければならない状況でもあった。

わたしは、NPOフュージョン長池の設立にあたって、多くの人に受けとめてもらうために、透明度の高い自分であろうと思った。つまり「これに自分をかける」という姿勢である。その気持ちで決意して臨んだから、周りのみんながいろんなことを喜んで引き受けてくれたのだと今でも思う

しかし、みんなに余計な心配と気持ちの負担をかけることも望まなかったので、17日の設立総会を終えるまでは、ぼんぼこな仲間たちには会社に辞表を出したことを口にしないでもらった。

NPOフュージョン長池の認証申請書を提出

5月の第二回事務局会議では、NPOフュージョン長池の特定非営利活動にかかる事業と収益事業の内容について話し合った。どうも何が収益事業になるのかよくわからない。理事の宮山弁護士さんに聞いても前例がないということで、明確な答えが出てこないし、東京都に聞いてもよくわからない。一応、藤森先生が推進しようとしてくださっている「ぼんぼこ保育所」は収益事業に入れた。保育所が収益事業なら、住宅管理支援事業も収益事業ということになった。

そして「NPOFUSION長池 ぼんぼこかわら版」は、1999年夏季、24号として発行継続に決まった。早乙女さんが、編集や発行の手続きを進めてくれることで、地域情報誌『FUSION長池』は、見事に「NPOFUSION長池 ぼんぼこかわら版」に生まれ変わったのだ。これから、地域に対して、広く10000部を発行していく。

よかった、続けられる。しかし、発行資金をなんとかしていかななくてはならないという課題も残って

いた。

5月31日、本来事業である特定非営利活動にかかる事業と収益事業の区別が納得できないまま、申請書は東京都に受理された。

これで最長四か月後の9月の末までには認証してもらえる可能性が大きくなった。でも、会計処理の問題というのではなく、まだ特定非営利活動にかかる事業と収益事業の捉え方がよくわからない。

このときの定款に記載した、事業の種類の部分を紹介する。

(事業の種類)

第5条

1 この法人は、第3条の目的を達成するため、特定非営利活動に係る事業として、次の事業を行う

- (1)地域の里山活動
- (2)祭り事業
- (3)郷土史調査・研究事業
- (4)FUSION長池の発行事業
- (5)PCレスキュー事業
- (6)ぼんぼこ鉄道倶楽部
- (7)その他、長池地域とその周辺の住民が必要とする事業

2 この法人は、次の収益事業を行う

- (1)マルチメディアを普及する事業
- (2)住宅の建設、管理、修繕に係る事業
- (3)地域で教育を推進するための事業
- (4)地域で少子・高齢化に対応するための事業
- (5)公園管理と運営を含む地域の環境に対応するための事業
- (6)その他、長池地域とその周辺の住民が必要とする事業

3 前項に掲げる事業は、第1項に掲げる事業に支障がない限り行うものとし、その収益は、第1項に掲げる事業に充てるものとする。

6月の第3回事務局会議でも、NPOの収益事業として、ぼんぼこ保育所、住宅管理支援事業、住民による長池公園の管理と運営などの可能性を相談した。売上げが発生する事業はすべて収益事業なのか。ボランティアなら特定非営利活動にかかる事業なのか。わからない。

事務局体制を考える

森川さんとの出会い

6月に入った頃、NPOフュージョン長池の子育て探検隊のコラムマスターをしているせいがの森保育園の倉掛秀人副園長先生から、園児のお母さんの森川千鶴さんを紹介された。

6月9日、わたしは森川さんと出会い、狂気乱舞したい気持ちであった。

森川さんは編集やプロジェクト・コーディネートのプロであるという お会いして話をするうちに、この人しかいないと思った。森川さんは、この街で子育てをしていて、関わりの薄い人間関係をなんとかできないかと考えているようだった。

仕事をもつ人は外に出かけてしまい、仕事をもたない人は家の中にこもってしまう この街で、老いも若きも男も女も、一日二時間でいいから地域のためになることに関わることができて、それがなにかしらの経済活動になることで、地域に対する愛着と生き甲斐を生み出すことができないだろうか、と考えておられた。そして、そんな考えを実現していきたいという

わたしは、その場で“NPOフュージョン長池の事務局長代理”をお願いした。あまりの展開の早さに森川さんは目を丸くしてビックリされ、「ちょっと考えさせてください」と答えられた。当たり前である。

しかし、わたしは、絶対に引き受けてもらえるという気がしていた。それは自信とも確信とも違う“運命的な出会い”を感じたからである。しばらくは活動にご一緒していただきつつも迷っておられたようだが、その後、森川さんはNPOフュージョン長池の事務局長代理として、ウィークデーの活動の運営や進行の管理をサポートしたり わたしとのつきあいでは、気の毒なことこの本の編集者として“たぬき語の解説”に悪戦苦闘していただくことになるのである。

マンデーミーティング

日本テトラパックの時代から、一週間ごとのリズムを確立するために月曜日の会議を開催してきた。このことを参考にして、一週間自分が走り回って調べてきたことをみなさんに報告してもらうために、月曜日の午前中に会議を開かせていただいた。六、7月は、事務局長代理に巻き込んでしまった森川さんと状況を整理していたら、だんだんいろいろな人がミーティングに顔を出してくれるようになった。

7月に入ると、参加者は広がっていき、毎週の会合に、地域のいろいろな方がそれぞれに時間を調整しながら参加して下さるようになっていた。

ここにまたしてもNPOフュージョン長池になくはならない人たちが登場してくる。

秋元孝夫さん。わたしが、長池地区に引っ越してくる前に住んでいた、ホームタウン南大沢の住人。住まいと街づくりのコンサルタントとして、高齢者住宅のプランなどを手がけている建築家である。ふとした出会いから、またまた大変な人材を巻き込むことに成功してしまったのである。

エミネンス長池南の吹野正廣さん。すでにリタイアしておられるが大変に元気な方である。北野の八王子市あったかホールでボランティアでリサイクル工房を手伝ったりしているという NPOフュージョン長池の活動に興味をもっていて、ミーティングに繰り返し足を運んでくださった。

江尻京子さん。彼女は自分のことを“ゴミニスト”と称していて、多摩地域のゴミ問題を事例に、循環型社会づくりを目指した活動をしている「東京・多摩リサイクル市民連邦」の事務局代表を務めて

おられる。元気いっぱい活動している江尻さんに、NPOフュージョン長池がゴミ問題の事業化に取り組むときには、事務局を担当していただけないか、とお願いしてみた。すると、またまた「えー!？」と言われてしまった。

忙しい合間をぬって、多くの方々が顔を出してください。8月になると、地域で個人開業している情報システムサポートを得意とする小池松弘さんや村崎美輝さん、損害保険の代理店を営む佐々木勝利さんといった強い味方も得ることになった。

牛乳いいませんか事件？

6月27日曜日、この地域を象徴するある事件が起こった。

午後五時頃、ぼんぼこネットにおっさんの鈴木牧場のバルク・クーラーが故障して、このままだと牛乳が腐って売り物にならなくなるというメッセージが発信された。知り合いに電話をかけてもつかまらない。試しに、ぼんぼこネットに載せてみようとおっさんが思いついたのである。

すると、即座にぼんぼこ中間のみんなが電子メールと電話連絡を始めて、夕方から夜にかけて新住民たちが「牧場のおっさんの一大事」とばかり、大挙して牧場に牛乳を買いにやってきた。新しい街並みからすぐの山手にあるおっさんの牧場近くの、車がすれ違うのがやっという細い山道はたちまち交通渋滞になって、事件を知らない人が車から降りてきて、「今日は何かあるのですか」と訊ねられる始末である。

その後、翌日まで修理ができない事情をぼんぼこネットに載せたところ、今度は中央大学の学生さんや住都公団の職員の方々まで購入に来てくださったのだった。

環境問題の権威、わが街を視察

そしてその翌日、たぬきは少々人間に化けることにして、日本経済新聞本社論説委員室に三橋論説委員を訪ねた。お世話になった山路会長のご紹介であった。

三橋論説委員は東京ゼロエミッション構想委員会の会長をなさっている。NPOフュージョン長池について説明をさせていただくと、大変に興味をもってくださり、近いうちにかならず訪問させていただきますとおっしゃった。

同じ日の午後、山路会長と東京ゼロエミッション構想委員会事務局の環境事業計画研究所所長の吉村元男先生をお迎えして、わが街を視察していただいた。そこで、前日の牧場のおっさんの牛乳事件の話をしたところ、大変に感動されていた。

そのうえ、農業公園の計画があることを説明させていただくと、吉村先生は牛糞と生ゴミが混ぜられると堆肥がしやすいのですよ、と教えてくださった。

視察のあと、せいがの森保育園において「東京ゼロエミッション構想」の説明会を開いた。約20名の地域の人たちが集まって、もしNPOフュージョン長池が取り組むとすれば、どんなことができるだろう、という話もできた。

その際に話題にのぼった牛糞と生ゴミを混ぜて堆肥化するというアイデアは、2000年1月に、牧場のおっさんが堆肥化するための工場を新設し、せいがの森保育園の給食で出る生ゴミを分別して、事業ゴミ回収業者が工場まで運ぶという役割分担で実現している。

事業計画の模索

会社に辞表を出した4月五日以降、会社には休暇をとり、NPOとして認証してもらうための申請書を作成しながら、NPOフュージョン長池が取り組むべき事業とは何かを徐々に固めていった。そして考え、動いているうちに、次のような事業の柱が見えてきた。もちろん、これまでの住民のボランティアな活動をサポートし、地域の情報誌であるかわら版は、無料で発行していくことが基本にある。

子育て支援事業化計画

多摩ニュータウン地域には、保育園に入りたくても入れない待機児がたくさんいるというNPOが保育園を運営することで、地域のお母さんたちの助けになるのではないだろうか？

一方、平成一一年度の補正予算で、待機児の解消を目的に、2000億円が少子化対策に振り分けられるという話を、藤森先生からうかがっていた。そこでNPOフュージョン長池がぼんぼこ保育園を運営することはできないものかと、4月から八王子市や東京都の関連各所を歩いてみることにした。

環境保全支援事業化計画

長池公園が完成して全面開放になるのは2001年4月。これまで公団が公園を管理し、長池里山クラブをバックアップしてきたが、完成とともに公園の管理は八王子市に移管される。この公園の管理や運営を住民に任せの方針を八王子市がもっているという法人格を得たNPOフュージョン長池が、住民側の受け皿となって任せてもらうことで、行政にとっても住民にとっても望ましいかたちになるのではないかと。

住宅管理支援事業化計画

多摩ニュータウン地域には、約二万戸の分譲マンションが存在していると推定している。このマンションの管理組合の活動を支援する事業にも着目してみる。自分たちの財産を守ることを考えると100%の自主管理ができれば最高であるが、現実にサラリーマンをやっている方々が片手間で100%の自主管理を実施することは、ほとんど不可能である。ゆえに、現実には民間の管理会社に任せているところが多い。

しかし、もしNPOフュージョン長池が、住民が構成するある種の公益法人として支援して喜ばれるのであれば、と考えた。6月に、団地の管理組合の理事たちにお集まり願ひ、地域の理事会を開催したところ、長池地域と南大沢地域から一団地の代表が参集してくださった。そのうち九団地からは好意的な発言をいただいたうえ、四つの団地から実際のケースとして検討依頼をいただいたのである。

7月には、理事の山本さんのアドバイスとご紹介のおかげで、民間の管理会社の方との接点ももてるようになった。

まず、民間の管理会社さんの管理方法を勉強させてもらおう。そのうえでどういふ連携ができるかを構想しよう。

地域の情報化支援事業化計画

TAM A産業活性化協議会などと一緒に、多摩ニュータウン地域にインターネットを推進するための情報化支援事業を考えてみたが、NPOフュージョン長池の現状の実力では、PCレスキュー隊のようなボランティア活動を支援することはできても、事業化するだけの体力はないことがわかった。

しかし、多摩ニュータウンを活性化するために、情報化を推進していく必要性と、その時期が近い将来、来ることだけは確信している。

高齢者対策支援事業化計画

糠谷さんの紹介で、立川のケアセンターやわらぎの石川治江事務局長を訪問することになった。老人の介護のことを何も知らない山本理事さんと倉掛副園長さんとわたしが、糠谷さんの案内で訪問して説明をお聞きしたのだ。

この街でもいずれ、近いうちには高齢者対策支援事業をする日が来るであろう。そのときにはぜひとも連携させていただきたいと思ったのである。

5月二三日、わたしは八王子市の介護保険制度の説明会に参加した。でも、新しい制度のため、やはりよくわからないことだけがわかった。帰る途中、南大沢の介護支援センターへ立ち寄り、近くNPOフュージョン長池で説明会を実施したいのだがと伝えると、担当者の方が休日返上で説明会をやってくださるということになった。

7月三日、八王子市在宅介護支援センター 南大沢において、NPOフュージョン長池は介護保険制度の説明会を開催した。朝から雨で、人出が心配されたが約30人の方々にお集まりいただき、会場は一杯であった。

地域情報誌『NPO FUSION長池 ぼんぼこかわら版』の誕生

早乙女さんが生まれ変わらせてくれ、みんなの思いが凝縮した『NPO FUSION長池 ぼんぼこかわら版』1999年夏季、24号が完成した。

公団のライブ長池街づくり館に搬入された一万部が、みるみるなくなっていく。約六〇人の方々が地域の一軒一軒に配布してくれるのだ。

八ページで構成された『かわら版』の一面の、第九回里山活動の田起こし。

この一枚の写真の中に理想のフュージョンの姿を発見した。

その写真は、長池公園の中の田んぼで田起こしをやっているものである。その一枚の写真のなかには、八王子市の公園緑政課の方、古くからこの地にお住まいの淡路連合町会長さん、そして、新しくニュータウンに暮らしはじめた人々が写っていたのだ。

これだ！ みんな仲良し！ ずっとこれを望んできたのだ。

小泉栄一さん逝去

7月四日、訃報。

わが郷土の歴史家である小泉栄一さんが、老衰のため亡くなられた。小泉さんは、この地域の旧

由木村の歴史を保存された方である。

でも、それを誇るわけでもなく「自分の生まれてきた役割」を日常として、淡々と暮らしておられた。鎌水という地区で立派な茅かや 葺ぶき屋根のお宅を住まいとして保存しておられてもいた。

当たり前の暮らしのなかで、郷土の歴史を保存されたのである。この方との出会いも運命的であった。このこともたぬき生活に戻った原因の一つであると思っている。

ある日、宮上小学校の宮上という名前の理由が知りたくて、小泉さんを訪問したことがある。

家の前まで行くと、とても品のいい、優しい顔をされたおしいちゃんが、にこにこ話しかけてこられた。

自己紹介もしないまま郷土史の話に突入し、そこで宮上という意味をお聞きしたのだった。そしてそれが「八幡さまのお宮の上と下」という意味であることを教えていただいた。

二時間あまりの立ち話の最後に、やっとこの方が小泉栄一さんであることがわかったようだった。こんな日常のちょっとした出会いの場面においてすら、この方は郷土史の語り部であった。納涼拡大理事会

7月の事務局会議は、7月20日に拡大理事会として京王プラザホテル多摩で行った。理事さんたちと事務局メンバーの交流も必要だ。事務局メンバーは、今回はとても高級なところで開催するんですねえ、と最初はものめずらしげな雰囲気だったが、最後には酒宴で盛り上がっていった。

このときに、理事の糠谷さんが、きわめて的確で鋭く、しかも丁寧にNPOの事業をとらえる本質的な指摘をしてくださった。

東京都が申請書類を受理したということは、これまでの考え方で大丈夫かもしれない。しかし、どうも特定非営利活動にかかる事業と収益事業との捉え方がおかしいのではないだろうか。理由はお金が発生しても、特に営利を目的にしない場合は、すべて本来事業である非営利活動になるような気がするのだが、とおっしゃるのである。

糠谷さんのいわれることはもっともである。

われわれの活動はたとえお金が発生しても、すべて非営利の活動としか考えていないので、すべて非営利活動の分野に入れさせてもらえば、どれだけ会計処理もやりやすくなるかわからない。会計処理の問題だけではなく、事業の意義からも収益を目的としているわけではないのだ。

すでに認証の申請書類は受理されている。このまま通ってしまうのなら、このように進めるしかないのだろうか。何か、まだすっきりしない感じが残っていた。

子育て支援事業 NPOで保育所

7月末のいよいよ予算の振り分け段階で、八王子市の方針ではすべて現状の社会福祉法人経営の保育園に予算が振り向けられることになった。

だがNPOフュージョン長池は、当時認証申請中だったためか、申し込み用紙すらもらえなかった。そのため、次の方向が見えてくるまで、当面、保育園構想は延期せざるをえなくなった。

一方、多摩高度化準備組合の武山滋さんが、南大沢のひとつ西側の駅、多摩境付近で推進している企業団地のなかに、保育所を設けてはどうかと藤森園長が提案を始めた。

もしできれば企業団地内の保育所は、全国で初めてのこととなるそうである。しかし、企業団地で働く人たちの子供たちに限定されるので、不特定多数の公益に寄与しなければならないNPOが取り組む保育事業にはなりそうにない。

また、NPOがファミリーサポート支援事業をやれば、多摩ニュータウンという四つの市にまたがっている地域でも、各市域内に限定される行政ができないサービスを提供できることもわかってきた。

しかし、これもNPOが事業活動をするための、片手間ではない強力な事務局がなければ手を出すことはできない。

長池小学校の夏季連続講座 四〇日連続開放に挑戦

5月頃、長池小学校の中村校長先生と話をしている、夏休みに学校を地域に開放してはどうか、という話になった。

アメリカでは、チャータースクールといって、独自の教育プログラムをもつ研究開発校が数多くある。中村先生とは、地域で学校の空き教室を利用したチャータースクールのような試みができないものだろうか、などと前々からよく語り合っていた。

さて、電子井戸端会議では、長池小学校の夏季連続講座について、どんどん具体的な話が盛り上がり、このテーマで先生になる、生徒になる、いろいろな人が参加してくれることになっていった。

しかし、最終的にこの企画が許可になったのは、相手が法人格を申請中のNPOならば安心という判断が、長池小学校と八王子市教育委員会にあったためのものである。

結果、四〇日すべてということにはならなかったが、地域のNPOと学校が連携するとこんなに楽しいことができる、ということを実現できた。八王子市の田中博教育長さんからは、“わが市の誇り”と書いていただいた。

NPOが主催した講習会は、ケーナづくり、自然案内教室ガリレオ工房、科学の楽しさをすべての人に、金銭教育ビデオ鑑賞会、ネオテニス講習会、フラワーボトルを作る会、星空観望会などであった。その他にも、退職された先生による手作り絵本教室、巣箱づくり教室なども開催された。

わたしはこれまでに多摩ニュータウンを“自由に自立した人々がつくる街”と書いてきた。“一人の人を主役に”とも書いてきた。たあねこさんが、自分で決めてアレンジして“星空観望会”をやる。みんなが応援するものだから“木に登った”格好だ。しかし、みんながそっと“木から落ちない”ように、優しく手を貸している様子がよくわかる。

石上真弓さんの“フラワーボトル講習会”、春日亀美智雄さんの“ケーナづくり”など、全部そうだ。だれかが“これをやりたい”というそれをみんなが大切に、応援しようとしているのが、よく見えるのだ。

こんなふうに、地域のなかでのイベントが多くなってきて、万が一事故が起こったときのために“保険”はどうか、という議論も出てきた。学校や団地に入っているところもあるだろうから、二重に掛けてもしかたない。やっぱりNPOは支援専門でいこう、そのほうが多くの方々の喜びをみな

ら“ニターツ”とできるチャンスが多くなるはずだから。NPOも目立っている黒子なのである。

マスコミの注目

6月二四日の東京新聞に、NPOフュージョン長池の活動が紹介された。

ぼんぼこネットのメンバーの奥田澄雄さんの依頼のため“インターネットを肴に飲む会”で、お話しさせていただいたことがそのまま記事になった。不思議な気分だ。サラリーマンを辞めてNPOを実践しようとするときに、さまざまな方面の応援団がまさに地から湧き出るように現れている。不思議だ。このエネルギーはいったい何であろうか？

この閉 へい 塞 そく の世紀末に新しい時代を求める民衆のエネルギーなのか？

7月一九日の日経新聞の朝刊のコラム「春秋」に、多摩ニュータウンのTさんが紹介された。会社を辞めた男の始めたNPO活動の話で、牧場のおっさんの牛乳いりませんか事件や、ぼんぼこネットのことが書いてあった。

この記事を書いてくださったのは、三橋論説委員である。山路会長のご紹介でお会いした後、約束どおり7月九日に視察に来てくださったのだった。その視察の際、三橋さんは記事にするなんてひと言もいってなかったのに、突然に記事になったので驚いた。

わたしがお昼頃までまったく知らずにいたら、電話で初めて友人から教えられて「なんだ、知らないでどうする！」と言われてしまった。

その後、9月二四日の日本教育新聞には、「東京・八王子市立長池小の試み」NPOと学校づくり」地域拠点化へ住民と共同、「四〇日間連続開放講座」で」という見出しで、夏休みのさまざまな活動が取り上げられた。

また、同新聞には、せいがの森保育園とNPOの関係を「保育園が地域の核に」口コミから情報発信基地へ」という見出しで記事が掲載された。これらの記事のおかげで、学校や教育委員会でのNPOフュージョン長池に対する評価が一気に高まることになった。

これらのマスコミからの注目ぶりといったら、その後、1999年の暮れから今年にかけて、新聞や雑誌、あるときはテレビの画面で、いつもの調子でしゃべっているわたしの姿を、人々は目にするようになったのである。

事業活動の模索は続く

NPO活動日記を開始

6月まではボランティア活動を主に行動してきたので、ぼんぼこネットで発言するだけで十分であったが、事業活動を開始すると少々内容のニュアンスが違うので、ぼんぼこネットにメールできない気分になることが多くなった。

わたしの行動に伴い、平日の活動が活発になってくる。ウイークデーに動きのとれる、地域のわたしと立場を同じくする個人事業者の人たちとは、毎週のミーティングで状況を理解していただいている。

しかし、これまで、週末のボランティアな活動を中心にしてきた事務局のお父さんたちや理事さんとの情報交換については、ギャップを極力埋めたいと思った。そこで、8月1日からわたしの“NP

O活動日記」を毎日書くことにしたのだ。

NPOを立ち上げたのをきっかけに、ぼんぼこはメールアドレスを使い分けることにしていた。理事会メンバー用、事務局メンバー用、細かい連絡を取り合うことの多いPCレスキュー用の三つである。NPO活動日記は、ぼんぼこ事務局とぼんぼこ理事会のメールアドレスに送信することにした。

8月に入り、サラリーマン時代の人間関係を駆使して、NPO法人が企業の事業活動を支援する事業ができる可能性を追求してみようと思った。するとマーケティング調査支援事業、商品開発支援事業、雑誌の編集支援事業、新製品配布支援事業などができる可能性があることがわかってきた。

こうしたことは、地域の広告代理店である理事の布川さんのところのセルフイシューネスとの連携で可能になりそうである。

しかし、こうした考えがボランティア活動中心の方々にどの程度許容していただけるかは、まだわからない。

やはり住宅管理支援事業を最初に手がけることが一番必要とされていることかもしれない。山本理事さんは一生懸命アドバイスしてくださるが、悲しいかな私には専門的なことがわからない。地元の業者の方々にお会いしたり、エレベーターの保守管理会社の方々にもお会いするが、自分の対応能力ではどうしようもない。

ところが、四つの団地管理組合の方々からは、絶対に良いことなのだから頑張れと大激励をいただいている。

この過程で知り合った、レーベンスガルテン長池の柳沢理事長とは、納得がいくまで議論を繰り返すことになったことと、叱咤激励していただいたことが、NPOの住宅管理支援事業が具体的にになっていく後押しになったと思う。

さあ、9月を迎える。何がなんでもこれからNPOとして行う事業活動を明確にしなければいけない。

これにはまず、森川さんのようなプロジェクト・コーディネートのプロの方に、本格的に踏み込んで仕事をさせていただくことや、秋元さんのような建築の専門家になんとかして住宅管理支援事業の責任者になってもらいたい。そうしないと、わたしの力ではこの事態を脱却できそうにない。

たぬきのひとごと

電子井戸端会議では、みんな楽しそうに遊んでいる。しかし、このままボランティアな活動だけにしておくと高齢化のなかでかならずいつか終わってしまう。これはすでに多摩ニュータウンの先輩格の地域で現実になっていることである。絶対に終わらせたくない。今やぼんぼこネットは、「たぬきのかわいい子供」のようなものでもある。なんとかインターネットとNPOという時代の最先端の手段を用いて、このぼんぼこコミュニティが日常化され持続性をもち、二世紀の100年を超えて「まち」のなかに生き続けられるようにしたい。そのためには、コミュニティビジネスに支えられたネットワーク型

の強靱な事務局が必要だ。

でも、もう一歩自分の中でもイメージがハッキリしない。こんなときに自分だけで考えすぎてしまうと堂々巡りを繰り返して、疲れきってあきらめてしまうのが常である。打開策は一つしかない、今まで何度もやってきたように人の意見を聞いてみよう

しかし、これが腹が立つのだ！ 自分が死力を振り絞るようにして用意するアイデアを、みなさんが好意であるがゆえに率直に叩くのである。これが好意とわかっていても腹が立つのである。でも、これに強靱に耐えなければ「明日を開くイメージ」は完成しない。

辛抱強く辛抱強く、さあ、勇気を振り絞って頑張るぞ！ この勇気ある辛抱が、「コンセンサス・コミュニティ」を支える「マインド」なのだから。

あとになってわかるのだが、どうも、このとんでもない巨大な決意（やぶれかぶれの大風呂敷？）が何かを動かしたようだ。まるでジェットコースターに乗ったような毎日がいよいよは始まる！

第6章 市民ベンチャーとしてのNPO

～暮らしの支援事業がスタート

NPO フュージヨシ長池、住見隊のために作った幟のぼり。ぼんぼこな仲間たちである。

特定非営利活動に係る事業と収益事業

1999年9月の侃侃諤諤の事務局会議

7月にサラリーマンを辞めてから、あっという間の二か月だった。

しかし、どうも「これだ!」という突破口が開かない。わたしは、一日二四時間、寝ても覚めてもNPOフュージヨシ長池のことばかり考えて走ってきた。そんななか、NPOの本部事務所の構想に絡めて、あるアイデアが浮上してきた。

NPOの本部として届け出ている住所は、わたしの自宅であった。ミーティングの場所に使っているのは、いつものたまり場であるせいがの森保育園のコミュニティルーム。関わっている人たちとの連絡手段としては、バーチャルな空間でのメーリングリストを最大に活用している。しかし、今後、実際に事務局活動をしていくには、人が集まったり作業をしたりする事務所機能が必要になる。

そこで登場したのが、コンビニエンスストアを経営しながら、二階を事務所スペースにしてはどうか、というアイデアだった。会社を辞めた後、いろいろな企業を訪問したりいろいろな人との会話から生まれたアイデアであった。ただ単に、コンビニエンスストアを開くのではない。せせらぎ北団地からせせらぎ緑道をはさんで北側にある公団の所有する空き地を借り受けて、団地内であふれている駐車場を整備し、その一角をコンビニエンスストアと事務所にしてはどうか、というものであった。

そこで、このアイデアをみなさんにぶつけて、これからのNPOの事業活動の突破口にしようと、収益事業を考える事務局会議を開いたのである。

9月6日、いつものせいがの森保育園には、理事や事務局の何人かの方々が集まってくれた。まずわたしは、NPOの認証申請書が受理された以降の活動の経緯の概略を説明したうえで、NPOフュージヨシ長池の本来事業とは何かを議論したい、また、NPOは現行法下では資金的手当が困難なので、株式会社をもつことが必要ではないかと考えるに至っていると切り出した。

ここで、みなさんと再確認したのは、認証申請当時の事業計画について、当時は収益事業が明確ではなかったもので、次年度も含めて、収益事業の計画はなしとなっていること、再来年度からは事業報告が必要になってくること、順調に手続きが進めば、9月末のNPOとしての認証が見込まれていることだった。

さて、どなたが発言した内容かは明記しないが、この会議は本当に侃侃諤諤がく諤がくの意見交換会、討論会となった。NPOフュージヨシ長池の歴史の一ページとして、ありのままをぜひ記しておきたい。このやりとりのすべてに、今のあり方や制度としての意義、課題があらわれているからである。NPOを目指す人が必ずぶつかる壁だと思うからである。

株式会社化すると、税務会計に縛りが出てくると思う。NPOに対する寄付行為についての優遇措置はあるのかな？」

「社会福祉法人には優遇があるが、NPOにはないと思う」

「NPOが収益事業を行った場合、三七、八%の課税になるらしい。利益を出すのではなく、人件費にあてるなどで利益を解消することを考えたほうがいいという考え方もある」

株式会社化せざるをえない発想について説明します。現状の維持であれば、今のままでいいかもしれない。かわら版の発行をちょっと頑張ればね。でもそれにとどまることなく、いろんなことを手がけるには、強力な事務局機能が必要になってくる。拠点となる事務所をどうするか検討していたら、団地の隣地を駐車場として活用する話と結びついて、駐車場とコンビニをつくり、二階をNPOフュージョン長池の事務所にするという案が出てきたのです。

NPOは、法人格をとっても銀行融資が得られないのが現実。お金を集めることが難しい。会費程度しか稼げない。株式会社をつくれれば、出資もしやすいとってくれる企業もある。そうした会社や個人の出資でなんとかならないだろうか考えたのです。そして株式会社をつくるとしたら、NPOではやれない事業を限定して行うことを考えているのです。これはNPOフュージョン長池の事務所を生み出すのが目的なのです」

「うん、株式会社をつくることには正直、抵抗がある。でもNPOがまだ社会的に認知されていないことや制度の不備から何もできないとなると、そうするしか動きようがないんだろうか」

「事務所もなく、人手もなくてこれからどうするのかを考えたとき、ビジネスラインで走ったほうが早いのではないかと考えたのです。糠谷理事にご相談したところ、株式会社をつくるにあたっては、誤解を受けないように気をつけてください、というアドバイスをいただいた。ビジネスはビジネスで分けてやるのならよいでしょうと言われたのです」

「NPOが会社に場所を間借りしているのはよくある例だね」

「社会福祉法人をやっていると、行政の対応の遅さは自明のことだと思っているから、まだ時間が必要でしょう」

「でもNPOの税制優遇が進まないのは、多くのNPOの運営が頼りないと思われるからのようですよ」

「会社として成り立つ事業であれば、NPOに還元できるような支援会社をつくれればいいのかもしれない」

「法人税制が今後どう変わるかを危き惧ぐしています。長期的戦略が必要なのでは？」

「法人税制については、今後利益が出ていない法人からも税金を取り、利益をあげている法人には税率を下げる、といった方向で進むだろうとみています。企業の寄付金に対する負担については、その気になれば相手がNPOであっても寄付はできると思う。それをしないのは、NPOが頼りないと思われるからじゃないかな」

「収益事業と非収益事業の分け方なただけで、各々の事業が収益をあげていくのが本来のあり方。収益をあげたところから収益を生み出せないところに補填するという会計処理はできるんだろう」

か？」

来年の3月に認証を得たNPOの初めての決算が出てくる。どのNPOも、まだ決算を迎えていない。事業会計のあり方は、それを参考にできるかもしれないと思っています」

税金を支払うのはしかたのないことで逃れようがない。でも、事業間で赤字の補填をしあう必要はないんじゃないか。利益を出しているセクションが、組織全体運営にかかる費用をもつとしても、赤字を出してまでやる必要はないと考えるのだが」

「NPOフュージョン長池は、既存のビジネスや地域活動とは違った可能性を求めているんな人が集まっている組織だと思う。ビジネスマーケットが地域社会に降りてきただけのビジネスにはしたくない。当面は、NPOフュージョン長池に関わることでメリットを得られると思う個人や会社の会費や寄付で事務局経費を稼ぎつつ、優先課題としてある住宅管理支援事業をとりあえず立ち上げて走らせることにしては？ 秋元さんから、当面の事務所の連絡先としての支援をいただいているから、ぎりぎり活用させていただければ。それとは別の考え方で、富永さんが個人で立ち上げる事業に支援できる人は支援していけばいいと思う。その際、NPOの代表と株式会社の代表が同じというのは、先ほどの「誤解のないように」という指摘に触れないでしょうか？」

理念や志のある組織は、資本投下に対する効率がよいということがいわれている。それは企業であってNPOであって同じであるから、NPOと株式会社が密接であることに問題はないと思う」

ボランティアマインドでこれまで関わってこられたメンバーの方々を尊重することが大事だと思う。その方たちに納得していただけるような方向づけが必要と思うのだが」

ボランティアマインドで来られた人たちは、余分なプレッシャーをかけると動きがとれなくなってしまうでしょう。動ける自分が負担していきたいのです。NPOも株式会社も理念が乖かい離れないように、自分が責任をもってやっていきますよ」

「NPOフュージョン長池の目的をどこにおくかが大事なのではないかな。このNPOは世の中のニーズをつかんでいると思うけど、仕掛けの段階で金銭的に大きく出費することはどうかな」

「住宅管理支援事業は、NPOフュージョン長池で取り組みたいと考えている。駐車場とコンビニ経営は株式会社として取り組むことで分けて考えたいと思っています」

「NPOフュージョン長池のホームページのかたちが理想的ではないか。NPOフュージョン長池はコーディネートする拠点であって、各コラムが個人であったり、事業会社であったりとかたちのイメージなんだが」

「アメリカには公営住宅がない。住んでいる地域の環境を守るために、民間が手を出せない事業をNPOが地域の潤滑油となって住宅を管理運営している例がありますよ。それから、今日出てきた駐車場の事業計画案には懸念があるなあ。企業家としての事業収入が見込まれていないよ。事業主の取り分がないというのはどうだろう」

「これで成り立つなら、すでに企業が進出しているはずだよ。ペイすればいい、という発想だったらこれは成り立つのだろうね。地代については、所有者の譲歩を得られるのかな」

「株式会社にすることによって信用力を高めて、地代を下げられないかと考えているのです」

「身軽に考えるなら、住宅管理支援事業をまず立ちあげることと全力をあげることで、事務所をつく

るのはリスクということですね。個人でやるのならいいのだからけれど、これまで7月、8月、動ききったところで、具体的なカードがようやく見えてきたところなのですよ」

「事業計画は、他社に相見積をとったほうがよいのではないかな」

「一億1000万円売り上げて、1000万円の利益を出すのと、一五〇〇万円売り上げて1000万円の利益を出すのは、同じようでもまったく違う。コンビニは売上げに変動があるから、そこまでリスクを負わなくても事業を立ち上げられないものだろうかと思いますよ」

「ある公益法人の立ち上げの例を見てきたけど、状況を進展させるために無理な仕掛けをするとそれに頼ってしまって、全体がついていけなくなる。NPOは、理想を議論できる場として生かしつつ、優先課題に具体的に取り組む（この場合、住宅管理支援事業）ことで動かしていけないだろうか。べき論では事は進まないと思う。現実的なところからしか動いていけないと思う。それに人の心が推進の源にもなるし、心が離れば、志気も下がることを頭に入れていく必要がありますよ」

「ボランティアマインドで集まっていれば、現状が維持できればいいという考えになるでしょう。でもそこからは、それ以上のものは生み出せないと思うのです」

「住宅管理支援事業をしっかりと立ち上げることから動けないだろうか」

「株式会社化で、地域で儲けることを目指していると思われるのも、不本意なことですねえ」

「たぬきのひと」ごまあ！

みんなして言いたい放題言ったものである。しかし、これが重要である。富永よ！今のやり方では誰もついてこなくなるよ！」富永が考えていることはまだピン트가もう一つ合っていないよ！」とみんなが好意の鏡になって教えてくれたのである。でも、だれも具体的な解決策を語れない。前例がないことに挑戦するときの常である。これはまったく的外れではなく、少しピン트가合っていないだけである。さあ、このピン트를どう合わせるかが問題だ。好意の方々の鏡に映し出された「たぬき」の姿に自分がうつとりするぐらいの解決策を、ぼんぼりパワーでどう見出すかが大切だ。そうでなければ有能で多忙な方々が、こうして集まってくださって真剣に議論していただいた恩に報いることができない。

NPOフュージョン長池 認証申請の取り下げ

9月9日、東京都生活文化局を訪問することになった。

前日に事務所（わが家）に都庁より電話があつて、「修正箇所がありますので印鑑を持って来てください」と言われたためである。そこで藤森先生と一緒に「誤字脱字でもあったかな」と言いながら気楽に出かけた。

もうすでに、5月31日に申請書が受理されて三か月を超えているし、NPO法は、基本的に行政指導を行わない法律と理解していたからである。ところが行ってみると申請を取り下げてほしいといわれた。一瞬「え!？」と思った。

NPOの認証担当の方の説明では、今のままでは「不認証」になるとのこと。申請書を受理したくせに、今ごろそういうことをいふな！」と心の中で思ったが、口には出さなかった。そして、だれでも仲良しになるいつもの方針で担当官のアドバイスを聞いたところ、結果、藤森先生とわたしは大変

に喜ぶことになった。それまでの矛盾であった部分が一挙に解決することになったからである。

変更箇所：

1 第3条(目的)の変更

原文：この法人は、主に長池地域およびその周辺の住民に対して、街づくりに関する事業を行い、公益に寄与することを目的とする。

変更(案)：この法人は、主に多摩地域の住民に対して、暮らし全般に関する事業を行い、公益に寄与することを目的とする。

理由：“長池地域”を地図で探したけれど地図に標記されていない、故に“多摩地域”というわかりやすい地域名称を使ったほうがいいのではないかと。 “街づくり”という再開発のような意味になることが多いので、NPOフュージョン長池のやりたいことからすると、“暮らし全般”といったほうが適切ではないか？

その後、この“暮らし全般”という言葉が、事業活動のビジョンに大きなヒントを与えることになるのである。

2 第5条(事業の種類)の変更

原文：(事業の種類)

第5条

1 この法人は、第3条の目的を達成するため、特定非営利活動に係る事業として、次の事業を行う

- (1) 地域の里山活動
- (2) 祭り事業
- (3) 郷土史調査 研究事業
- (4) FUSION長池の発行事業
- (5) PCレスキュー事業
- (6) ぼんぼこ鉄道倶楽部
- (7) その他、長池地域とその周辺の住民が必要とする事業

2 この法人は、次の収益事業を行う

- (1) マルチメディアを普及する事業
- (2) 住宅の建設、管理、修繕に係る事業
- (3) 地域で教育を推進するための事業
- (4) 地域で少子・高齢化に対応するための事業
- (5) 公園管理と運営を含む地域の環境に対応するための事業
- (6) その他、長池地域とその周辺の住民が必要とする事業

3 前項に掲げる事業は、第1項に掲げる事業に支障がない限り行うものとし、その収益は、第1項に掲げる事業に充てるものとする。

変更(案):

(事業の種類)

第5条

1 この法人は、第3条の目的を達成するため、特定非営利活動に係る事業として、次の事業を行う

- (1) 地域活性化支援事業
- (2) 広報誌事業
- (3) 住宅管理支援事業
- (4) 子育て教育問題支援事業
- (5) 環境保全支援事業
- (6) その他、多摩地域の住民が必要とする事業

理由 :NPOフュージョン長池がやろうとしている事業は、全て非営利の考え方ではないか。非営利であっても金銭は動くが、全て特定非営利活動に係る事業のみでいいのでは？

やった！これで非営利事業と営利事業の間で悩む必要がなくなった。でも、前に尋ねたときは、お金が動くものは収益事業といわれたはずなんだがなあ。

3 第7条(入会)の変更

原文 第7条1項

正会員は、次に掲げる条件を備えなければならない。

- (1) 入会前から第3条の目的に適合する活動をしている個人及び団体

変更(案):

正会員は、次に掲げる条件を備えなければならない。

- (1) この法人の目的に賛同する個人及び団体

理由 :入会する前から活動している人でなければ入会できないと解釈できるのでよくないという。これが一番不認証になる要因である。NPOは、来る人に門戸を大きく開いておかなければいけないのである。

以上の3か所の変更を要望された。

「ああ、これでまた2か月以上4か月以内かよ！」と思ったが、とあえず了承して、申請書を取り下

げて再申請することを約束して帰路についた。

その帰り道に、藤森先生とわたしはニタニタしながら 面倒だけど、これで一挙に特定非営利活動に係る事業と収益事業の問題が解決して良かったね」と話しながら京王相模原線の橋本行き特急に乗った。

藤森先生は、京王堀之内駅で下車して保育園へ向われたが、わたしは新川さんと一杯やるために橋本までいった。新川さんは、9月6日の会議のことで大変に心配して下さっていたが、わたしが異常に陽気なのに最初ビックリされたようであるが、理由を聞かれて納得されたようだ。

NPOの認証 再申請

9月18日、NPOの定款変更を決議するために会員のみなさんにお集まりいただいた。再申請のためには再度総会議事録が必要であるからである。認証申請をいったん取り下げて、再申請しなければいけなくなった経緯を説明したうえで、前記の変更(案)を審議して賛成していただいた。

そのときに、理事の糠谷さんから特定非営利活動に係る事業と収益事業の整理ができて良かったが、法人格を取得すると、これからはもはやボランティア団体ではなく、NPOとして社会的責任をまっとうできるように頑張らなければいけないと激励をいただいた。肝心なときに、いつも大事なアドバイスをいただくことができて、本当に感謝している。

一つの大きなハードルであった事業の分け方であるが、これですべて特定非営利事業として整理できたことでスッキリした。次の問題はNPOらしい「住宅管理支援事業」をいかにきちんと構想して、スタートさせていくかである。的を絞ってピントを合わせよう

9月22日、東京都生活文化局にNPO FUSION長池の認証申請書類を再度受理してもらった。あくまでも穏やかに仲良く、相手の立場を考えながらおつきあいしてきた。NPOの認証担当の方々も大変に親切にしてくださった。受理していただいた最後に、

もう一回審査しているのですから、二か月の縦覧期間が過ぎたらできるだけ早く認証しましょう」

と言ってくださった。うれしい、ぼんぼこ！ みんな仲良くすればいい

事務局体制の芽

これからは、特定非営利活動に係る事業と収益事業に分けずに、一本化して対応することになる。しかし、NPOの活動に関わる人は、勤めをしていれば平日は活動することができない。逆に週末が活動できない人もいる。そこで、参加メンバーを限定せず、かつ全方位的に動けるように、事務局会議をウィークデー事務局とウィークエンド事務局に分けて定期的に行うことにした。底流にぼんぼこネットワークがあって、そのコンセンサスとして、各種のボランティア活動が生まれて、その活動を支えようとして住宅管理支援事業が生まれてきた。

このボランティア活動をサポートするのがウィークエンド事務局で、住宅管理支援事業やその他これから生まれてくるであろう事業活動をサポートするのがウィークデー事務局である。毎週月曜日の午前をウィークデー事務局会議の日とし、毎月第三土曜日の午前をウィークエンド事務局会議

の日とすることにより、一気に月間のリズムと週間のリズムで活動できるようになった。それに、ウィークエンドの事務局長代理の大和田さんに対し、とうとう森川さんがウィークデー事務局長代理を引き受けてくれたし、上々の吉である。

さて、方針は決まったが、具体的に検討しなければいけないことは山ほどある。NPOの会計業務については、他のNPOの決算を参考にしながら対応していく必要がある。NPOが住宅管理支援事業に取り組むのは、単に管理のための事業ではなく、暮らしやすい街づくり、その拠点となる窓口業務を担う意義からである。まず、現状をよく調べることが第一のステップだ。現状の管理のコストだけでなく、内容を見直すことで、管理の質を上げることができるだろう。そうしたら、具体的なコンサルティング契約の確定に向けて、活動を開始しよう

それから、事業の仕組みづくりが必要だ。大手の業者に委託するだけでなく、事業に地域の人たちが絡むことができるような仕組みにしていきたい。ここから先は、個々の事業に特化してどんどん事を進めていく必要がある。実にこれが懸案だったのだが、ここにきて秋元さんが住宅管理支援事業のチームリーダーになることを引き受けてくれたのだ！

暮らしの情報センター

公団が長池地区で開発した戸建てエリア、N-City。N-Cityの販売は、もちろん公団と民間の販売会社の仕事である。しかしわたしたちも、購入したら住むことになるわが街をぜひ理解してほしいとの思いから、「暮らしの情報センター in からまつハウス」のお手伝いをさせていただいた。

からまつハウスと名付けられた公団の現地販売所のなかで、転居してこられたあとのことを知りたいた方々のために、この街で暮らすための「暮らしの情報」を提供したのである。

この暮らしの情報とは、理事の布川さんのところでまとめた「わたしのまちの便利帳」という手作りのガイドブックを基にしている。

公共施設の案内、病院や学校、保育園や幼稚園、ボランティア団体やサークル、交通アクセスや時刻表などをはじめとする、暮らしはじめたときに「こんなことが知りたかった、こんなことを知っていたら便利だった」という情報が紹介してある。販売所を訪れた人びとに対する、住民からの実際に役立つ生きた情報提供であった。

これだ！ 暮らしの情報センターだ！ この情報センターは、公団の販売所という特殊な場所に存在している。しかし、もしNPOがマンション管理のお手伝いをさせていただくときに、この暮らしの情報センターが各団地のなかに常設されるとしたらどうだろう？ まさにこれは団地に居住する方々にとって大変な付加価値である。ヒントが合ってきたぞ！

そして、「暮らしっくコンサート in からまつハウス」。同じときに、暮らし方を提案するための一環として実施されたコンサートである。演奏はすべて地域住民が行った。住宅とともに、楽しく豊かなライフスタイルを提供する方針が参加者の心を捉えて大盛況となった。これがあとで有名になって、広報「東京都」(1999年12月号)で紹介されることになるのだ。

住宅管理支援事業の構想

NPOとして取り組んでいく体制としては、住宅管理支援事業担当理事を山本さんをお願いし、チ

ームリーダーを秋元さんとして、繰り返し議論しながら構想を固めていった。

秋元さんがまとめた、住宅管理支援事業の構想とは次のとおりである。

何故、NPOフュージョン長池が住宅管理支援事業を実施するのか？

1) われわれ庶民にとって、良好な住環境に安心して居住できるかどうかは大変に重要な問題である。

2) この重要な問題を単純に管理会社にゆだねるのではなく住民が構成員である、特定非営利活動法人NPOフュージョン長池が、住民の目線での支援事業が行うことができれば、住民同士で協力しあって管理業務を実施することができる。

3) 管理組合の一年交代の理事さんたちだけでは、なかなか管理業務を完全に実施することが困難である。

4) そして、各団地の窓口業務に地域の「暮らしの情報センター」機能を付加する。学校、病院、塾、買い物等々……

さまざまな地域のよろず相談コーナーとして、ボランティア活動情報なども手に入るようになる。

実施の方法

1) 組織体制を明確にする。

2) できるだけ、管理組合とNPOフュージョン長池で100%の管理を目指す。

3) しかし、団地の規模や実情に応じて、管理会社の協力を必要とする場合は柔軟に応じる。

4) 団地の管理内容の一項目ずつ徐々にNPOに移行したいことが当該管理組合の意向であればそれも応じる。しかし、最終的には、管理組合とNPOの100%管理を目指すことを目標にする。この場合でも専門性の高い部分は管理会社に期待する。

体制やネットワークについて

住宅管理支援事業の役割を具体的に示した。住宅管理支援事業の役割は大きく三つになる。

一つは「団地窓口での対応」、二つには「管理組合の相談役」、三つ目が「地域とのふれあいネットワーク」である。

たぬきのひとごと

いやー、すごい！ 動き出した。なんか、たぬきは木製のジェットコースターを作ってしまったので、壊れるんじゃないかと心配しているが、いろんな人が手を出して補修してさらに巨大にしていくので、最近はおたくが振り落とされるのではと思うくらいだ。何なんだろうこの勢いは？ そうだ！ リサックス？ リサックスを取りまくネット上のボランティアなコミュニティがリサックス・コミュニティなら、こちらはぼんぼこ・コミュニティだ！ これならひょっとして、NPO専従たぬきで「餌」がもらえるかもしれない。こんなに楽しく人に喜んでいただいて、生きていけたら最高ではないか！

本書の冒頭で紹介した、花びらのような事業展開図を覚えておいでだろうか。このころ、秋元さん

が暮らしの支援事業の代表的なキーワードについて、こんな感じかな？ と描いてくださったものに、次のようなみなさんの意見を加えてでき上がっていったのが、この象徴的な図である。

環境保全、ごみ、リサイクル、リユース対策といった視点が必要だね。

消費、健康、介護といった課題にどう取り組むことが考えられるだろうか？

この図を横から見てみよう。そうすると、「住むこと」がベースになる。やっぱり住宅管理支援事業の意義は大きい。

インフラとして、情報ネットワークがあると言った視点を加えるとぼんぼこネットが生きるね。

輪の中が事業活動で、外側がボランティア活動と見ると、両方が包含されていていいね。

こうして暮らしの支援事業の全体像が明らかになってきた。

また、住宅管理支援事業を「住まい見守り隊」と称し、略して「住見隊（すみたい）」にすることになった。わかりやすい、いいネーミングになった。

住見隊は、まず11月から毎月第三土曜日の事務局会議のあと、午後2時～4時まで、NPO主催の管理組合理事懇談会を定例化して、街の各団地の管理組合の理事さんたちの、現状の悩みや情報交換ができる場をバックアップすることから始めることにした。

それに並行して、住見隊業務の運営や、暮らしの情報センターとのリンク、対応マニュアルの作成、窓口業務派遣人員の教育研修など、2000年4月サービス開始を目指して、具体的に詰めながら事業を立ち上げていくことになった。しかも、今年度中の収入の見込みは立たないため、関わる人たちは秋元さんをはじめ、手弁当ということも、みなさんに快く承知していただいたのである。信じられないことだが、この事業への期待と熱意を感じることができたのだ。

住見隊の始動

NPOフュージョン長池の事業の柱となる住宅管理支援事業は、活動を始めるとますますニーズが見えてきた。一方、NPOは、独自に業者と繋がっていきなり方をつくっていかないと、他の管理会社と同じになってしまう

また、ただコスト面を追求するだけだと、品質の管理の面で問題も起こりかねない。安く、サービスのきちんとした業者の選定が必要だ。メンテナンスや清掃事業に、ボランティアとして取り組みたい高齢者の人たちの人材リストを作成して、NPOと連携を取っていくことも考えられる。

11月には、建って12年を超えた南大沢の団地に、ユニットバスの交換等住宅備品の共同購入を提案した住見隊は、ぼんぼこ価格を業者と交渉した。その結果、市価より安く購入することができるようになったのである。このことをきっかけに、コンサルティング事業の具体化と並行して共同購入支援事業を進めて、少しでも稼いでいくことにしたのである。今後は、佐々木さんと小池さんの連携で、説明会を開催する場合の業者のとまめなどを行っていくことになった。

そして、なんと清掃作業に関するコンサルティングの結果、年末の特別清掃の紹介第一号を獲得することもできたのだ！

もうひとつ、懇談会で指摘されたことは、住宅管理に対する会計業務の民間管理会社依存を見

直したいという意向だ。今後はNPOフュージョン長池での会計業務の自立を推進することにして、会計ソフトの充実に話が及んだ。そうしたら、相模原でメディアプラスというソフト開発の会社をやっておられる多摩産業活性化協議会のメンバーの金沢勇さんが、会計管理のソフトの開発協力をしてくださることになった。

金沢さんは、起業家向けの会計ソフトの開発を手掛けていて、団地管理に応用できる会計ソフトをテストケースとして一緒に考えてつくってくださることになったのである。どうして、わたしはこぞとというときに、この人、と思える人材に出会ってしまうのだろうか？

話を戻そう

12月の団地管理組合の理事懇談会には、11団地、15、6名の出席があり活発な議論がなされたが、いずれもNPOの活動を支援するという応援をいただくことができた。そうだ！毎月の懇談会で待っているだけでなく、地域の団地管理組合を訪問して、もっと住見隊の説明をしていこう！これまでの管理会社との関わりをいきなり否定するのではなく、ゆっくりと着実に事業を立ち上げていくのだ。一連の経過の情報公開とともに、業者の仕事の実績のチェックについて検討する必要もあるだろう。第一歩は、踏み出されたのだ。

そして今、NPOフュージョン長池の住見隊事業は、公正自由な競争のために、会計管理、窓口管理、修繕などのコンサル事業の三つの柱を、それぞれに個々に分割して契約という姿勢で貫いていくことを再確認して、事業を進めている。また、団地の各管理窓口が、暮らしの情報センターとつながって、日々の暮らしの役に立つためのサービスの一日も早い実現を目指している。

この住見隊事業が、徐々に花開いていくNPOフュージョン長池の暮らしの支援事業の当面の事業の中心になることを見据えているのだ。

これらは、東京都と公団がつくり上げてきた、行政による堅牢な多摩ニュータウン計画のピラミッド構造に風穴をあけることにつながる予感がしている。

これは、決して行政批判ではない。風通しがよくなることで、そこに暮らす住民と行政や企業とのパートナーシップという新しい関係性が、目の前に開けていることのあらわれなのである。

ネイチャーセンターの火事

11月17日。大変なことが起きた。長池公園に公団が建設中だった、体験学習施設ネイチャーセンター（仮称）の火災である。深夜の出来事だったが、火災を目の当たりにした住民のみなさんの一連の行動を、ぼんぼこネットに見ることができる。

ものすごいサイレンの音で目覚める。消防団の人たちの活動を見守る。長池公園のオープンを心配する声。早朝、ぼんぼこネットに、公団の高橋さんから「近隣の皆様には大変ご心配をおかけしました。お詫びかたがた、ご一報まで」というメッセージが入っていた。

わたしは、すぐさま起こったことの原因追究等は専門の方々にお任せして、変なうわさ話にしないようにしましょう。さあ、日頃お世話になっている公団の方々にエールを送りましょう。みんなしてネイチャーセンターにかける期待と夢を語りましょう。再建だ！再挑戦だ！残念とは思いますが、建

物はまた建てればいい！ ぼんぼこ！ ぼんぼこ！ 頑張るぞ！」というメッセージを送り、多くの人に賛同していただいた。

火災は一部新聞やテレビでも報道されたが、その後、ぼんぼこネットには、地域内外の方々からのお見舞いのメッセージが次々と届いたのである。みんな優しいのである。翌日公団の高橋さんは、それまでの経過を報告してくださったうえ、皆様からの応援メールはプリントアウトして事務所職員に配布しており、関係職員の本当の励みになります。ありがとうございます」というメッセージを載せてくださった。

ようやくNPOとして認証される

9月に再申請して、今やおそしと待ちこがれていたが、12月2日付けで東京都より認証を請けることができた。12月4日に郵便で受け取った。東京都は、設立について認証します」とそのことが書いてあるたった一枚の紙だった。

さて、認証より二週間以内に、法人登記を行う必要がある。事前に準備を整えて、待ちかまえてくださっていた理事の鈴木税理士さんと、さっそく登記手続きを行った。12月7日のことだった。その後、東京都にも無事、登記を終えた謄本を提出した。これで、個人ではなく一つの組織として契約を結ぶことができる。社会的な認知をいただいたということだ。

さあ、持続可能な活動のためのNPOへ前進しよう！

事務局の体制づくり

以前から、事務所をどうする、という課題があった。9月に提案したコンビニエンスストアの二階という案は、リスクが大きすぎるという結論になった。その後もせいがの森保育園をミーティングに使い、秋元さんの事務所を電話連絡先にさせていただき、南大沢駅前のセルフイッシュネスの事務所を勝手に「ふらっと立ち寄りふらっとコーナーにしてしまい、NPOフュージョン長池の活動が有名になってきてからは、いつしかそこで新聞や雑誌の取材をお受けするようになっていた。

NPOの活動が、マンスリーから、ウイークリーになり、デイリーワークになってきた。いよいよ本格化していく住見隊事業のことを考えても、やっぱり拠点が必要だ。

そんなことを考えていたら、南大沢駅前のビルの七階に56平米のスペースがあるという、さっそく秋元さんと見に行ってみた。そこをNPOで借りて、一部をNPOブースにして、他の空間を地域の事業者のインキュベーションセンターにしてはどうかと考えた。

ウイークデーの事務局活動には、地域で自分で事業をやっている人たちが協力してくれている。その人たちの多くは、いわゆるホームオフィスで仕事をしているので、みんなで集まって生まれることの付加価値と、NPOの求心力への期待があった。でも、やっぱり家賃の負担が大きい。それではひとまず、この案は置いて、他の候補も当たってみることにした。

そうしたら、唐木田(多摩市)に、一戸建ての候補物件が見つかった。自分たちが使うイメージからは、こちらのほうが使い勝手もよさそうだ。白い小さな家。空き家のようだが、まずオーナーに折衝してみることにした。もしここを事務所として使う場合は、テナント貸しではなく、多くの人に事務局に活用してもらえるような仕組みにしてはどうかというアイデアが出てきた。事務所を直接使うことはな

い人も、新川さんのところで開発しているグループウェアの試用実験などを取り込みながら、グループウェアのアクセス権の登録制にして活用してはどうか。この物件にみんなの夢はふくらんだのだが、結果は、家主の都合で借りることができないということだった。

しかし、勢いが出てくると話がどんどんジェットコースターのように進んでいくのが、ぼんぼこパワーである。

年も押し詰まった12月の末、長池小学校の体育館内にある空きスペースが使えないか、という案が出てきた。NPOフュージョン長池には、夏の学校開放の実績の評価もあるし、休日の体育館の鍵の管理や学校開放の延長のケースとして、八王子市にも打診を試みるようになったのである。

しかし、またもや急展開。とうとう事務所をもてることになってしまったのである！ なんのことはない、足もとにチャンスが転がっていた。地域住民が運営している長池学童クラブ。都営多摩ニュータウン別所1丁目第3団地1号棟の1階である。藤森先生が運営委員会の会長で、監事は長池小学校の中村校長先生。運営委員会の了承を得て、事務スペースを間借りできることになったのである。もちろん必要な経費はNPOとして支払っていく。しかし、机や椅子、パソコンは、ぼんぼこのメンバーの計らいで無料で手に入れることができたのである。

NPOは小さな事務局

事務所も懸案のことだったが、人である。今は、みなさんに手弁当で関わっていただいているが、これまでのボランティアワークを超える多くの事務作業が発生していくことは、明らかである。そこで、NPOの本部事務局員として、岩原由紀さんにアルバイトをお願いしてはどうかということになった。ぼんぼこネットに入った頃はまだ大学生だった、ぼんぼこネットのアイドル的存在、いわぼんである。その後岩原さんは、卒業していったん就職したのだが、どうしても大学院に進学したいという希望をもっている。しかも、この多摩ニュータウンのことを研究テーマにしていた人である。

NPOで働くことで、学業と実証実験の両方をやってみたら？ わたしは、そう話してみた。そうしたらいわぼんは、本気でそのことを考えてくれて、1月いっぱい会社を退職することを決意してくれたのだ。これもまた夢のようだ。フットワークの良い優秀ないわぼんに、事務局を手伝ってもらえるようになれば、百人力だ。

そして、この2月に開催した理事会では、次のような組織体制が決定したのである。

事務局長（理事長兼務） 富永一夫

事務局長代理 大和田明宣、森川千鶴

事務局員 岩原由紀

住宅管理支援チームリーダー 秋元孝夫

高度情報化支援チームリーダー 村崎美輝

業務支援チームリーダー 小池松弘

営業支援チームリーダー 佐々木勝利

これらの体制と併せて、ホームページのコラムマスターたちが事務局メンバーとして、住民のボラ

ンタリーな活動をサポートしていく。人事について、専従者は理事会決議を得るが、その他については事務局長および代理、各チームリーダーで決めることができるようにした。専従者の給与規定は公務員や他のNGO、NPOを参考にするが、法人として収入が安定するまでは、実際は専従者給与も未払金として計上する対応にならざるを得ないかもしれない。自立していくというのは大変なことである。

基本的に、小さな事務局で最大の効果を発揮できる体制をイメージしている。今後NPOの事業は、地域の事業者たちとの相互の支援関係と連携で推進していくことにしたのである。

新たなプロジェクトの始動

高度情報化を考える

1999年の暮れ、せいがの森保育園の倉掛先生のご紹介で、有線放送の米田敬太郎さんが事務局会議に現れた。その際、同軸ケーブルを使った有線放送でインターネットを活用する可能性についての情報をいただいた。これは、有線放送を活用した高速インターネット接続で、しかも低料金でアクセスできる可能性があるかもしれないということに気づく。

そこで、さっそく高度情報化支援チームリーダーの村崎さんを中心に一連の情報を収集したうえ、この地域にはパソコンを使ってインターネットにアクセスしている家庭が多いことを実際に示したうえ、「高速・低料金のインターネット接続の実現」を、多摩テレビ、NTT、有線放送をはじめとする高速インターネットを推進している事業者に向けて要請するために、NPOフュージョン長池で100〇世帯を目標とした、署名を集めることにしたのである。

技術の革新は日進月歩でわたしたちの生活に近づいてくる。

NPOフュージョン長池の暮らしの支援事業のイメージのインフラとして、情報通信の活用は、不可欠なのだ。

生ゴミの堆肥化プロジェクト

牧場のおっさんのところに、年が明けると牛糞の堆肥化工場が完成するという夏に東京ゼロエミッションのことで、説明会を開いたとき、生ゴミと牛糞を混ぜることで堆肥化が進むということを知った。

何か、身近なところからできることはないか。そう考えて、自分の住むせせらぎ北団地をテストケースとして進めようと考えて、団地のみなさんと相談してみた。協力いただける世帯から、分別して生ゴミを集めることができたとして、出た生ゴミをどうやって牧場のおっさんのところまで運ぶか。その費用をどうするか。そんな課題が見えてくるといきなり個人の家庭から始めることの難しさも見えてきた。そこで、いろいろな人に相談して考えていったら、また糸口が見えてきた。

せいがの森保育園から出るゴミは、地元の株式会社ハチオウという業者さんが回収している。藤森先生が、給食の生ゴミを分別する手間と、回収車に牧場のおっさんのところを経由することでやれるのではないかと、言ってくれた。やった！ またひとつ、かたちになってきた。それに、自らゴミストと称するジャーナリストの江尻さんが、その一連の経過を全部記録してくれるという。これは、地域で取り組むときのノウハウになるではないか！

牧場のおっさんの工場が稼働し始める年が明けてから、生ゴミの堆肥化プロジェクトは始まった。そこでできた肥料が、多摩地域に流通して、一日も早くニュータウンの植栽に活用されるようになる
といいと思う

地に足の着いたボランティアワーク

ぼんぼこホームページは、ウェブマスターの岡村さんが手をかけてくださり、広く世に紹介されたおかげで、今や多くの人にご覧いただいている。

かわら版の発行は、早乙女さんが毎号とまどめてくださることで、滞りなく進んでいる。

ぼんぼこ里山倶楽部では、諸橋さんや赤羽さんたちが、住民がどのような公園づくりを望んでいるか、住民としてどのような公園づくりができるかなど、地域の方々と意見を交わしながら、そのためにNPOフュージョン長池として何ができるかを考えた結果、ぼんぼこアウトドア倶楽部と改名し、幅広い活動のサポートを目指しはじめた。

PCレスキューの大和田さん、ぼんぼこ鉄道倶楽部の赤羽さん、郷土史勉強会の田中さん、子育て探検隊の倉掛さんをはじめとするコラムマスターたちは、それぞれに自立した活動を謳歌している。

「自由に自立した人たちがつくる街」といつてきた。そうやってほしいという願望を込めて、そういつてきた。でも、本当になつてしまつとは！

1999年11月の終わり「ぼんぼこ」にまた新しい活動が生まれた。

自分たちの住んでいる街を見て歩こうとこれまでもいろいろな人がぼんぼこを通じて、探検隊をつくつては歩いてきたが、今度は、街のサイン(表示、標識)を見て歩くのをテーマとしたものだ。

秋元さんと森川さんが、「さまざまなコンセプトが織り込まれたであろう新しい街に、住民として住んでいて、おもしろいもの、お金をかけて作られているはずなのに、ちつとも役に立っていないもの、あとから便宜上付け加えられた変な表示など、探して歩きますか？」と問い出して、ついた名前が「ぼんぼこまちなみ探検隊」といつ、ここで得た情報も、暮らしの情報に加えていけるのではないか。

12月、この街はイベントが目白押しである。11日は長池公園の里山活動の収穫祭。12日は、初雪コンサート。そして18日は事務局会議&忘年会、19日は南大沢文化会館弦楽四重奏コンサート。

ほんつに毎週末、どこかで何かが行われている。「NPOののぼりを作って立てようか？」と提案したら、早乙女さんが、あつというまに作つてくれた。たぬきのマークの入つた青と黄と赤の鮮やかな幟である。まずは、住見隊のイベントで見かけることができるだろう。

さまざまなパートナーシップ

旧住民と新住民

牧場のおっさんとは、1997年の多摩ニュータウン学会で出会つたのがはじめだつた。

その後、ぼんぼこネットに誘つたら、多摩の歴史のこと、牛や農業のこと、いろいろなことを教えてく

れた。おっさんは、詩人だ、とみんなが言う。独特の語り口と、自分のホームページでは（これがかなりの使い手なんだ！）、日常のひとこまを写して絶えず紹介してくれる。旧住民とか新住民とかにこだわらないで、どんどんわたしたちと関わってくれる。牛を連れて、見附橋まで来てくれる。

そうすることが、これからの多摩丘陵、多摩ニュータウンにとっての開けていく道であることを感じて、その道を行くパートナーとしてわたしのことを見ているのではないか。

おっさんは、あるときぼんぼネットにこんなメッセージを書いた。

田村明著「まちづくりの実践」(岩波新書)によれば、「まちづくり」に関わる人々として、「風土」すなわち「風」の人と「土」の人が必要だと書いてあります。

「土」というのは簡単に言えば地元に住んでいる人だそうです。

一方「風」の人というのは、まちを訪れる人だそうです。

「まちづくり」を成功させるためには「土」の人だけではなく、

「風」の人々とお互い一緒になってすすめていくことがポイントだそうです。

ぼんぼこも同じだ!!

行政

1999年9月23日、多摩市に新しくできたコミュニティ記念館のこけら落としで、多摩ニュータウンサミットというシンポジウムが行われた。テーマは、「新しい行政とのパートナーシップを求めて」。

八王子市長、町田市市長、稲城市市長、多摩市長の四市長サミットのあと、第2部では、細野先生の計らいで、大学の先生や官庁の方に混じって、わたしも話をすることになった。それは、「住民の自立」なくして、すでに「自立している行政」とのパートナーシップは存在しないという話だったので、行政よりむしろ住民の方々に対して辛口な内容であったかもしれない。要するに、「隣の方や団地の人とうまくつきあえないのにどうして「行政」とうまくつきあえるの？ 行政の方々に要求する前に、もっと日常的レベルでやらなければいけないことがあるんじゃない？」という語りかけをしたのだ。

行政について思うことはたくさんある。しかし、そのやり方を否定したり批判するのではなく、どうすればよいか、自分たちができることは何なのかを考えて動き出すことが必要なのだと思う。

NPOフュージョン長池は、法人としての社会的責任を果たす役割を担えるようになったことを、さらに自覚していきたい。

少し前の8月15日、多摩高度化準備組合の武山さんが、東京都産業振興ビジョンのホームページのURLを送信してくれた。東京都が、産業の振興、活性化を図るため策定している産業振興ビジョンは、チャレンジプロジェクトとして都民からのさまざまな提案を集めていた。それをとまとめている、東京都労働経済局の担当部長の木谷正道さんとの交流が始まった。

9月8日、木谷さんから、都立大の生田茂教授を交えて「情報ネットワーク:多摩 未来」をチャレンジプロジェクトとしてスタートさせたいので集まってほしいといわれて参加した。そのときにわかっ

たのは、都庁や都立大にも話のわかるすばらしい人たちがいるということであった。

南大沢に移転してきた都立大学とも、東京都とも、これまで直接のご縁はなかった。セルフフィッシュネスの布川さん、布川さんの片腕のチーフプランナーで、企画やコーディネートをささっとこなしてしまふ鎌田菜穂子さんらと交えて、「多摩・未来」を立ち上げようと大いに盛り上がってしまった。価値観を共有できる方々との会話は楽しいものである。

その後、「多摩・未来」には、多摩地域の研究者、企業人、NPO、教育関係者、学生、住民、シンクタンク、行政関係者などが次々に参加するようになり、この年の11月16日、都立大学において100名を超える人が集まって、さまざまな活動と情報発信を通じて多摩地域の活性化を目指すことを宣言する、設立総会を開くに至ってしまったのである。もちろん、わたしも呼びかけ人の一人となったのだが、これからNPOフュージョン長池と多摩地域のみなさんの間で、良い連携ができることを願っている。

企業

会社を辞めた直後、ふと思いついた。この会社を辞めたばかりが逆にチャンスである。みんなどうしたの？ と聞いてくれる。この間にNPOの宣伝をしよう、NPO人生の楽しさを語ろう。そして、法人会員やスポンサーとして活躍していただく。この機会に、世間がどのくらいNPOを理解できるか見てみよう。

そこで、いろいろな会社と知人を訪ね歩いた99年の夏であった。ルネッセ・ホテル・マネジメント、シグマ光機、ふるさときゃらばん、文化放送、日本経済新聞社、ドール・コーヒー、キリンビバレッジ、カゴメ、全酪、清水建設、三井物産、京王プラザホテル多摩、エソネットネットワークTAM A、森永乳業、明治乳業、雪印乳業、エイエムピーエム、長谷工コミュニティ、柴田書店、日本テトラパック、新学社、AGF、ベネッセ、コスモエレベーター、ウェブTV、NTT八王子、サンドリー、東京コカ・コーラ、東急コミュニティ、小岩井乳業と、人脈を駆使しては、NPOの活動について話して歩いた。このことは、その後、NPOフュージョン長池の応援団を増やしていくきっかけになっていったと思う。

公団が、この多摩ニュータウン地域で事業用用地を分譲するときの条件として、地域に開放するスペースを設けることとしているために、各事業者は、地域開放用のスペースを必ず設けている。しかし、その後の使用状況となるとさまざまである。全労済情報センターさんは、このセンター内にある「レインボーギャラリー」を積極的に開放してくださっている。この「わが町の芸術家 作品発表会」という企画は、全労済さんの発案に、住民が乗らせていただいた企画である。98年に始めて、今年には三回目を迎えた。

当時、エミネンス長池の理事長をしておられた本吉邦俊さんとは、この作品展を通じて出会った。この後、本吉さんは、翌年も開催される作品展の実行委員として関わることになった。

仕事でお世話になったカゴメの役員の方が、たまたま多摩？ に住んでおられることもあって支援してくださっている。「人が身も心も健康になる」ことが、「カゴメの目的だから」と言っていた。

ている。現在「NPO FUSION長池 ぼんぼこかわら版」が発行できるのはこのおかげである。だから、わが街では「カゴメのえこひいき」が起きている？

企業がNPOにスポンサーとなって寄付行為をすることは、非常に難しいのが現実のようである。そこで、ちゃんと目に見える形で役に立っていることが証明されなければならない。

NPOフュージョン長池は、地域でしょっちゅうイベントをやっているのだ。人が集まる。そこで、「はい、野菜ジュース！」。このジュースの配布で、おじさんたちがキャンペーンガールの代わりになったのである。

他のNPOとの連携

東京都の木谷さんに、早稲田でまちづくりに取り組んでいるグループをつないでいただいた。早稲田商店会の安井順一郎会長や「五体不満足」の著者乙武洋匡さんらのグループで、やはりネットというメディアリストを持っていて、わたしもそれに参加させていただくようになった。木谷さんは、安井さんやわたしとのつきあいを、木谷おじさんジャニーズ事務所所属のタレントだ、なんて言っているが、東京都の産業政策ビジョンがこうした元気のよい地域の活動をつなぐ橋渡しになってくれる。

早稲田の安井さん、墨田の竹村さんなど、それぞれの地域で頑張っておられる方々と、エールの交換をしているが、これからは、こうした活動をしている仲間たちとの具体的な連携も、夢ではないと考えている。

人が集まる運動体（ある種の生命体）は、求心力と遠心力のバランスで健全に発展するように思う。このぼんぼご活動にとってはもちろん長池地域での顔の見える活動が求心力になる。しかし、それだけではこの生命体はいつしか自然消滅してしまう。そこで、今度は遠心力を必要とする。地域で必要とされることを、ただ、ひたすらやる。そのことを認めてくれる応援団が、そっとそばにいてくれる。

世に広く紹介することで、お会いしたこともない方からの温かいエールを身に受けることになったりする。こうして出会いは限りなく融合していく。

これからの事業の可能性～たぬきの夢

さて、これまで住宅管理支援を具体的に進めてきたことで、コミュニティ・ビジネスの可能性がいくつか見えてきた。NPOとして関わることのメリットの見える事業とはなんだろう？

今、地域の事業者の支援事業の芽が出ている。「多摩 働希隊」である。NPOフュージョン長池を支援する事業者は、NPOフュージョン長池から支援を受けている事業者であると位置づけることによって、双方にメリットが生まれてくる仕組みである。

2000年2月、せいがの森保育園に「ピオトープをつくろう」という秋元さんらを中心としたプロジェクトが生まれた。NPOフュージョン長池を通じて出会った地域の専門家たちが、それぞれの持ち場を生かして、ピオトープの実現に向けて動きはじめたのである。

ビオトープとは、野生動物が共存共生できる生態系をもった場所」という意味で、ドイツ語で生物を表す「bio」と場所を表す「tope」との合成語だそうである。

この生態系を、保育園の園庭に人工的に再現していこうとする試みだ。せいがの森保育園の給食の生ゴミを、牧場のおっさんのところへ運んでできた堆肥を使って、植物を育てることで、子どもたちの自然観察の場にしていきたいと藤森先生は考えている。

これは、NPOフュージョン長池を核として生まれた、保育園、牧場、ゴミの回収事業者、プランナーといった地域のさまざまな事業者たちのFUSIONである。

また、長池地域のお父さん方は、今は35歳から55歳ぐらいの方々が中心なので、今はあまり心配もないかもしれないのだが、いずれ年をとって定年退職したあとに、どうやって生き甲斐につながる仕事をしていくのだろうか？ 今のうちに地域の人材バンクをつくって、企業のアウトソーシングの対象になれるような仕組みをつくっていききたいと思う。

また、藤森先生によると、八王子市の特にこの多摩ニュータウン地区では相変わらず保育園への入園待機児が増えているという。そこで、厚生省のこの4月からの保育園運営に関する規制緩和で、民間の保育所を認可して公費助成の道を広げることから、企業による保育事業への参入が始まるだろうという。八王子市は、既存の保育園が分園をつくって対処することが望ましいと考えているようだ。

しかし、ニュータウンの人口構成からして、このままで世代が進むと、保育園のニーズは恒久的なものではなくなるから、将来のリスクが大きいし、企業としてコストに見合うだけの収益をあげられるかどうかも疑問である。このことから、藤森先生とは、地域の住民たちが最も必要とする時期に、一時保育も含めて、NPOのようなセクターに保育事業の柔軟な運営を任せてもらえないだろうか？と引き続き話し合っている。

分譲団地では、長期修繕積立金をストックしている。しかし、これは地域で一斉に使われることはあまりないだろう。この眠っている資金を、緊急に必要とする団地との間で融通することなどは考えられないだろうか。コミュニティ・ファンドとして、有効に運用していくこともできるはずだ。

今は、新住地区には法的な縛りもあって、空き地があってもなかなか活用されていない。これを弾力的に活用することによって、例えば長池地区の空き地の1区画をNPOフュージョン長池が借りて、菜園、ワゴンセール、エコカフェなどのにぎわいのある空間をつくれませんか。そこには、ライフステージに応じて地域内で住み替えることのできる循環型のコーポラティブハウスもできて、屋上にはもらい湯のできる露天風呂を作って、富士山を見渡すことができるようにしたい。

それから、企業と個人の橋渡し。たとえば、商品の委託販売事業。その際、選べるメニューは多いほどよいだろう。NPOフュージョン長池は、地域で顔の見える関係で密接に関わることができる。

さらに、ニュータウンの資源である不動産の流通を見直すことはできないか、街ぐるみの防犯・防災上のセーフティネットを実現できないか。そうすると、またみんなの知恵や力が生きてくるもん！ひとひとのやりたいことの夢の実現のサポートだけでなく、コミュニティに対する視点を変えること

で、これまでになかったビジネスが生まれそうだ。時代の風と人々のエネルギーがFUSIONして、暮らしの支援事業の花を咲かせようとしている。どんどん夢がふくらんでいるうちに……夢と現実の境がなくなってきたぞ!?

終章 たぬきの見た夢

たぬきは夢を見るのが好きだ、夢を見ようと思うといつでも居眠りすればいい、これはたぬきの化け学と一緒に、たぬきの得意技の一つである。

今までの夢を振りかえってみよう。せせらぎ北団地で、この“ぼんぼこな活動”の芽が出て、見附ヶ丘連絡協議会と見附ヶ丘フェスティバルを生み出し、地域情報誌『USION……』が飛び出し、インターネットがやってきて、長池ぼんぼご祭りになって、ボランティアなさまざまな活動を生み出し、いまやほとんど毎週のように何らかのイベントのある街になり、NPOまで生み出してしまった。そして、人間からたぬきに帰ったやつが現れた。

これは、『平成狸合戦ぼんぼご』ではないか。たぬきさんたちが、多摩ニュータウン開発で住むところを追われながらも、最後に渾身の力を振り絞って、新住民たちに昔の多摩丘陵を見せた“こころ”だ。もっと自然な生き方、もっと素直な生き方が人間の世界にもあってもいいのでは？ と問いかける、“ぼんぼこなこころ”のようだ。

この“ぼんぼこなこころ”が、利他的精神たっぷりの“ぼんぼこな人々”をこの地に呼び寄せ、インターネットを駆使して、その“こころ”のコンセンサスとして、ついに50人の個人正会員を集めて特定非営利法人NPOフュージョン長池を結成してしまったのだ。これから、この“ぼんぼこなNPO”が生み出すものはなんだろう。それは、“平成狸合戦ぼんぼごPART 2”だ。

ある人が、“ぼんぼごたうん”を訪ねてきた。駅を降りたら、そこにはレンタルで使用できる“電気自動車”がある。一人乗り用、二人乗り用、4人乗り用があって、地域内の交通手段としてお使いください」と書いてある。料金は使用時間分だけ精算すればよい。もう一つある。まるで遊園地にあるような“トロッコ電車”だ。ゆるやかな山坂の多いこの街にはちょうどいい。お年寄り夫婦が乗っている。この“トロッコ電車”の名前は“ぼんぼご号”で、運転手さんは、ぼんぼご鉄道倶楽部の赤羽さんだ。レールは歩道の端を使用しており、スピードも人間の歩くスピードより若干早い程度である。この街の交通手段は、みんな環境に配慮された“エコカー”である。

この人はさっそく“トロッコ電車”に乗ってみた。団地沿いの歩道をトコトコ進む。街の樹木や公園の手入れが大変に行き届いているので、“車掌の富永さん”に聞いてみる。

「このまちの清掃や植栽事業は、行政から委託を受けたNPOが運営しているのです」

と言う。そういえば、さっきの電気自動車のレンタルのところに“たぬきマーク”が貼られていた。車掌さんに聞いてみると「それもNPOの運営です」という。他にも、NPOがやっている事業がありますか？」と聞いてみた。そしたら立て板に水のように車掌さんがしゃべりだした。後悔したが車掌さんのおしゃべりはもう止まらない。

「このNPOフュージョン長池が最初に手がけた事業は、住宅管理支援事業でした。2000年の4月のことです。それまで、管理会社さんまかせであった団地管理を徐々に住民と住民で作ったNPOとの共同作業で、住民感覚で実施できるようにしたのです。もちろん専門性の高い仕事は、管理会社さんにもご協力いただいています。そして、そんなに難易度の高くない仕事、つまり団地

の清掃等は、極力地域内の事業者に発注するようにもしています。当初、多くの方が多摩ニュータウンには産業がないといいました。しかし、わたしたちはベッドタウンとして開発されたのだから“住宅産業”があると考えました。これなのです。このまちの人々は、みんな住宅ローンをかかえて生活しています。その住宅にかかる経費が削減されて、かつ、サービスの品質が上がったのですから大変に喜ばれました。特に団地の窓口業務の方をNPOから派遣できるようにしたのも成功でした。なにせNPO活動が大好きな利他的な方々が窓口にいるもんですから、団地の管理事務所は、いつも団地内のサロンのようです。

窓口へ行くと、まず美味しいコーヒーや紅茶が飲めて、団地の誰かが作ったケーキやクッキーも食べられます。もちろん有料ですが、支払いは実際のお金でもいいし、ぼんぼこマネー（エコマネー）でも払えます」

お年寄りの誰かが、腰がいたい、腕がいたいと、色々体調不良を訴えています。そしたら窓口にいるNPOのスタッフの人が、パソコンから何やら情報を取り出して印刷したものを持って来てくれました。そこには、多摩市の福祉センターに行けばお風呂に入れる情報からお医者さん情報まで印刷されてあって、“トロッコ電車”の時刻表まで載っています。お年寄りは大変に喜んで、このまちに引っ越してきてよかったと言っています。

今度は、若い奥さんがちょっとコンサートを聞きに行きたいけれど、子供が小さいから行けないという話を始めました。さっき気分の良くなったお年寄りが、『行ってらっしゃいよ』と声をかけて、三、四時間くらいでしたら私が10ぼんぼこマネーで、子供さんの面倒をみてあげるわよと言うと、若い奥さんも喜んで、じゃ、今度その10ぼんぼこマネーでお買い物でも代わりに行きましょかね、と言うのです。このまちの団地管理窓口は、暮らしの情報センターを兼ねているのです。だから教育や健康のことや買い物相談まで何でも相談できます。こうしてこのまちの団地や住宅は、NPOが支援することで安心して住めるようになったのです。まさに街のセーフティネットですね」

車掌さんの長話を聞いていたら、大きな公園に近づいてきた。サービス精神旺盛な車掌さんは、聞かれもしないのにしゃべりだして、この公園もNPOが運営しているという1年を通じた里山活動を軸に、ネイチャーセンターという体験学習施設は、いつでも誰でも利用できて、空き状況に応じてさまざまなイベントや趣味の会が行われたり、近くの学校の子供たちが課外授業に使用したりしているのだと説明してくれる。

「そうそう2001年には、近隣住民を劇団や大学が応援してくれて“ぼんぼこみゅーじかる”をやる計画もあるのですよ！」

それはすごい、と感心の声を上げたら、この地の小学校や中学校の土曜、日曜は、NPOが鍵を預かっているのでもいつでもオープンできるし、NPO保険にも入っているので安全管理から事故対策まで万全だという。幼稚園や保育園も地域と融合しており、ちょっとした一時預かりもしてくれるという。もちろん時間外や保育士さんのお休みのときは、地域の、資格をもったお母さんたちが、NPOから委託を受けて働いているという。

ここまで来ると、今度は、車掌さんのほうが質問されはじめた。

「お買い物はどうなっているのですか？」

「そうですね！ 毎朝、ご主人や子供さんたちを送り出した奥さんは、まずCATVのインターネットに接続します。使いたい放題ですから大変に助かります。それからショッピング情報のコーナーをクリックして、まずその日の買い物を決めます。街の事業者は、競ってNPOのホームページに広告を出していますので、今、まちの中で売られているものがすぐに検索できるのです。しかも、夕方四時になると生鮮食料品の値引きの情報が一斉にホームページにアップされますので、今までのように、スーパーに行ってから今晚の夕食を考える必要もなくなりました。それに、ホームページで注文しておく、指定された時間にNPOのスタッフの人が“エコバイク”で宅配してくれるのもうれしいですよ。その代わり10 ぼんぼこマネーがかかりますけどね」

「最近、有機野菜のような食料品が求められています、このまちの人たちはどうしていますか？」

と車掌さんに聞く。そうしたら車掌さんまたまた得意になって、よくぞ聞いてくれましたとばかりに、農業公園の話をはじめた。そのうえ、今からこの“ぼんぼこ号”で行ってみましょうという誘いに乗って行ったところでその人は驚いた。

そこは昔の多摩丘陵がそのまま残っているような場所で、酪農や農業をやっている。近隣のニュータウンに住んでいる人たちも、好きな人がボランティアとして手伝っている。そのおかげで、農家や酪農家の方々の採算も取れているという障害を持った方々も、一緒に生き生きと働いていた。そして、この“ぼんぼこタウン”では、東京ゼロエミッション構想の一環として、ゴミ“ゼロ”のまちづくりの実証実験もやっているという。牛糞に近隣から出る生ゴミを混ぜてつくる堆肥化工場も完成して稼働している。できた堆肥は、有機農業の堆肥になったり近隣の公園や団地の植栽に使われている。こうしたことが行政とのパートナーシップで柔軟にできるのもNPOが存在すればこそそのようだ。

その後、農業公園の中にある“ミルクバー”で途中下車して見ると、そこでは、“牧場のおっさん”というブランドのアイスクリームやヨーグルトや低温殺菌乳を直売している。美味しいのだ、これが！

突然！ 息子の「おやじ！ 本の締切り日だよ！」という声で飛び起きた。せつかくいい夢を見てたのになぁとっていると、息子は、「ぼんぼこ、ぼんぼこ言って、ムニヤムニヤニタニタしてるからからかっただけ」という。そうか、夢か。でもこれは、きっと正夢になる気がするから不思議だ。

多摩ニュータウンに移り住んで～あとがきにかえて

1986年4月、わたしは初めて自宅を購入して、横浜の地より東京八王子市、多摩ニュータウンのホームタウン南大沢に引っ越してきた。

当時わたしは三三歳で、母（幸子）、妻（公子）、長女（陽子）、長男（哲夫）の五大家族。母の希望どおり一階で出入りが楽で、庭があって、なおかつ庭のある南側斜面は道路より一段高いところが良いというがままな条件に“ぴったり”の場所を引き当てた。母はこの南大沢の地を大変に気に入った様子だったが、すでに心臓病を患っていた母は、「わたしは、ここで死ぬのが最高だねえ」というわたしは、「そうなるかもしれんねえ」と郷里の広島弁で答えながら、多摩ニュータウンという環境を選んでよかったと改めて思ったのである。

しかし、住んでみるとなんと人間関係が希薄なのだ。わたしもうるさい人間関係は苦手だが、あまり希薄なのも寂しい気がする。

そうしたときに、居住団地の管理組合の初代理事をさせていただいたことで、大変に温かい人間関係に触れることができた。管理組合の運営方法を他の理事さんたちとおおよそ月に1回のペースで相談したり、懇親会、草取りや餅つき等を行ったりした。それらは、団地居住者同士が仲良く暮らしていけるように願いながら行ったのだった。そして、ホームタウン南大沢という居住団地だけにとどまらず、近隣の10団地ですで行われていた“盆踊り実行委員会”を基礎に“南大沢連絡協議会”の設立のお手伝いをしたりした。近隣に存在していた“松が谷連絡協議会”の会則のコピーを入手し参考にしながら設立準備をしていくうちに、地域に多くの気のいい仲間もできた。地域の人間関係はこんなふうにして育まれていくのだな」と実感したのもこの頃だった。

しかし、仕事も忙しく上司にこき使われている年代では、地域活動を思うように実行することは極めて困難なのが実状。そのうえ、母が徐々に体力を失い、入退院を繰り返しはじめた。それなら、と母が死に場所を求めようとしてこの南大沢の地に引っ越して来たのだから、しばらくはかけがえない母のことを最優先に考えてあげようど決意した。

そうしたら、ろくなことはない。わたしの勤務する会社の営業担当役員からあるとき、転勤してもらうようになるかもしれない」と言われたときに、私は「母が病気ですので転勤しません」と思わず答えてしまい、後であんなこと言うど出世もパーだなどガックリしたのもこの頃だった。

頭の中では、「母のことを優先」と考えていながらも、いざ現実になると矛盾した感情が出てくるものだ。でも結局わたしにお咎めはなかった。今から思うとそんな矛盾だらけの自分が、当時、自分の人事ぐらい自分で決められるとってはばからなかったことが恥ずかしい。

心臓病を患いどんどん体力を失っていく母親に、

「おふくろの人生は幸せだった？」

と聞いてみる。

「そうねえ、戦争もあったし、広島原爆にもあったし、親がハワイに移住した直後に“日米開戦”で生き別れになるし、保証人の印鑑と農地開放ですべての財産を失った。あまり良いことはなかったねえ」

「でも、人間って不思議だねえ、人生の終わりの三年から五年が幸せだと過去を忘れるみたいだよ、息子夫婦に孫二人、今は幸せだよ」

と言う

人生にとって晩年の3年から5年が一番大事なのだと、死にゆく母から学んだことである。なんとそれは、60歳のサラリーマンの定年後にやってくる現実ではないか。サラリーマンとしてどんなに成功しても、その後の人生に恵まれなければ自分の人生は不幸になる。これは当たり前のように、それまでの自分はこの現実を避けて通ろうとしていたことに気がついた。母の死を勇気をもって見つめることで教えられたと思った。これは困った、どうしたらいいだろう

この問題を日常性の中で解決することへの挑戦が、後にサラリーマン人生に訣別して、NPO人生を選択することにつながったと確信している。

そして、入居から3年目の1988年2月に母は七〇歳で亡くなった。その大変にやすらかで美しい母の死に顔を見ていると、激動の昭和の時代の流れに翻弄されて前半生は決して幸せとは言えなかったかもしれないが、晩年の数年間にこころ穏やかな日々を送れたおかげで、人間として“自分の人生もまんざらではなかったかもしれない”と感じ、もしかしたら“究極の自己満足”をして“ニヤツと笑って”死んでくれたのかもしれないと感じた。

この個人的にも厳しい現実の中で南大沢時代は、せっかききっかけをつかんだ地域との関係性を失ってしまい、大変に残念だった。“夢よ、もう一度”と考えるようになったのもこの頃だった。人生の最も重要な晩年を幸せに生き、そして、“みごとにサバサバ死ぬ”ためには、地域にこころ豊かな人間関係があることが重要であることに気がついたからである。人間はひとりでは“みごとに死ねない”ということも、母の死から学んだことだ。

私が夢見たことは、これまでたくさんの正夢になってきた。でも、まだ今は夢の途中かもしれない。寝ても覚めてもNPOフュージョン長池としてできることは何かと考えてきた。NPOは、これからは「運営」ではなくて、まさに「経営」という観点が必要だと痛感している。もう、ここまで来てしまった。自分を信じて、人を信じて、この道を行くつもりだ。

最後になりましたが、この本はぼんぼこ仲間の方々のアドバイスのおかげで誕生した。

編集を引き受けてくださった森川千鶴さん、表紙ほかデザインを担当してくださった早乙女博之さんもぼんぼこ仲間である。

そして、NHK出版の方々も、打ち合わせをさせていただくたびにまるで最初からぼんぼこ仲間であったかのように協力していただき、大変に感謝している。

この本を生み出すために協力してくれたぼんぼこみなさん、ほんとうにありがとうございました。これからも、どうぞよろしくお願ひします！ ぼんぼこ！

参考文献

多摩ニュータウン 30 年の歩み～過去から現在そして未来へ』(東京都多摩都市整備本部刊)

『NPO愛を力に変えるシステム』(朝倉匠子著 ブロンズ新社刊)

編集 森川千鶴

地図・図案制作 早乙女博之

編集協力 別府由紀子

校正 熊谷愛子

写真提供 NPOフュージョン長池

富永 一夫 (とみなが かずお)

1952 年、広島県広島市生まれ。専修大学卒。

日本テトラパック株式会社に 21 年間勤務。1999 年 10 月退社。

1999 年 12 月、特定非営利活動法人『NPO フュージョン長池』初代理事長に就任。

1986 年より多摩ニュータウンの八王子市域に居住。

多摩ニュータウン発市民ベンチャー NPO 『ぼんぼこ』

2000 (平成 12) 年 4 月 20 日 第 1 刷発行

著者 富永 一夫

c 2000 kazuo Tominaga

発行者 安藤龍男

発行所 日本放送出版協会

〒150-8081 東京都渋谷区宇田川町 41-1

電話 (03)-3780-3313 (編集) / (03)-3780-3339 (販売)

<http://www.nhk-grp.co.jp/npb/npbtop.html>

振替 00110-1-49701

印刷 享有堂印刷所

製本 石毛製本

R 日本複写権センター委託出版物

本書の無断複写 (コピー) は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。

落丁本 乱丁本はお取り替え致します。

定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-14-080506-4 C0036

Printed in Japan